
明治三十五年六月八日發行
女鑑
第貳百五拾四號

女鑑第貳百五拾四號

目録

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及び通運にて本社出版部へ御直送の事
○郵便爲替は東京新富町郵便取扱所へ御振込可被下候事
○郵券代用は(一錢、三錢)一割増の事
○別に領收證を出さず若し强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事
○未納税の來書は一切受取り申さゞる事

定價

一冊 金拾錢
六冊三ヶ月分 前金五拾七錢
十二冊半年分 前金壹圓拾錢
廿四冊一年分 前金貳圓拾錢
全國無遞送料

廣告料

一 五號活字廿三字詰一行 金參拾錢
半頁 金八圓
一頁 金拾貳圓
表紙一頁 金拾六圓
色刷は特に御相談に應ず

明治三十五年六月四日印刷
明治三十五年六月五日發行

編輯兼發行人 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 渡邊索一
印刷人 東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地 並木眞雄
發行所 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 國光社
發賣元 東京市京橋區築地二丁目二十一番地 株式會社國光社出版部 (電話新橋二六九三番) (電話新橋特八八)

井上頼圀校訂　小澤政胤編著

慶長以來國學家畧傳

洋裝全壹冊
八百五拾頁
總クロース美本
定價壹圓五拾錢
郵稅十里以內七錢百里以內十二錢百里以外廿四錢

深く國學者の傳記を集めたる書は僅に微細なる古學小傳の類に過ぎず德川時代文學史の研究に不便少からざりしを著者小澤氏從來慨して前後**十年間諸書を參照**し遂に本書を大成せられたり著者は尙之に滿足せずして略傳と名づけられたれど其實**今日**に於ては**最も完備した國學者の傳記**なり載する所は慶長以來明治二十八年までの有職故實家神道家語學者文人歌人等**五百四十名**人の末には**其**の**著書目錄**をわけかつ引用書目を明示したり或は之れを**國學者人名辭書**ともいふべくまた**列傳体國學史**とも稱すべし卷初にはイロハ分**索引**ありて搜索に便し**國學傳結系譜**ありて各學者の學を一目に見るべく**國學者年表**ありて一見各時代の學者を數ふべし殊に斯學の老大家**井上頼圀先生**は反覆叮嚀自ら**校訂**の勞を執られたれば其正確なることは根據ある他書の比にあらず本書一たび出でゝ國文學研究者は**暗夜に電燈**を得たるの思ひあらん**師範**學校**中**學校高等**女學校**其他**各種**の**學校**に於ては無二の**參考用書**たるべく殊に**文部省檢定受驗者**は必ず一本を座右に備へざるべからず

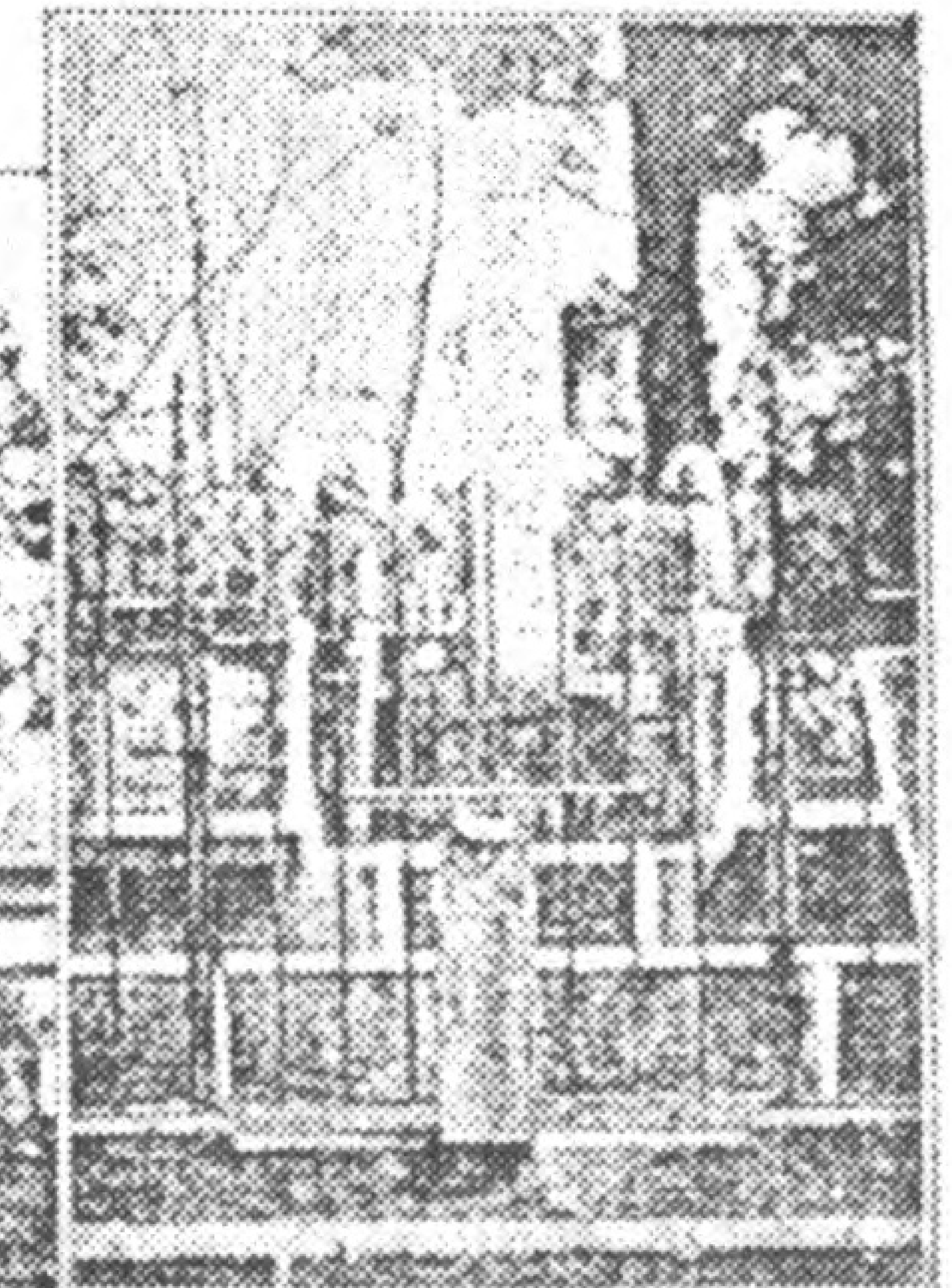
發行所　東京築地二丁目　株式會社　國光社出版部



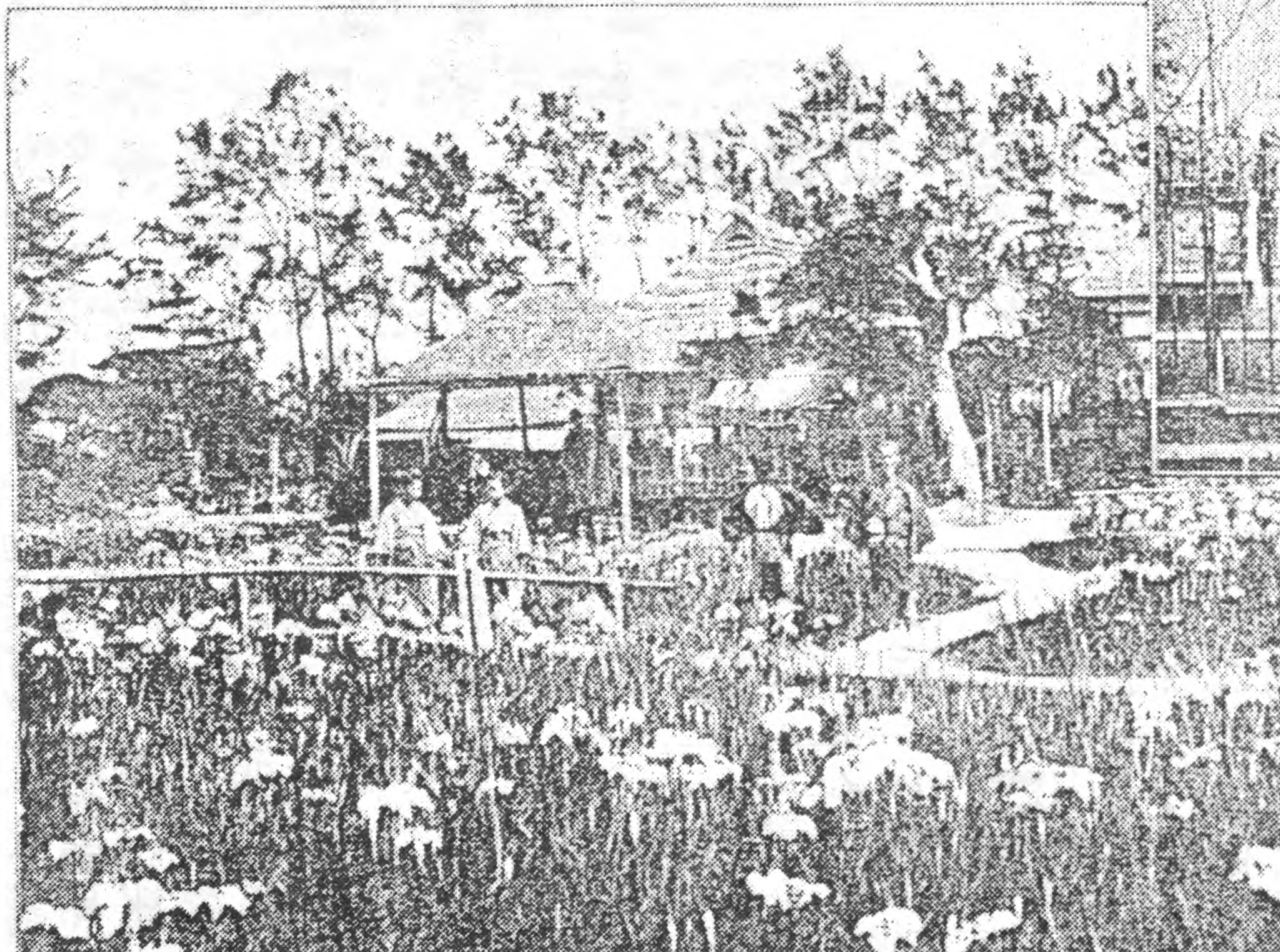
女子高等師範學校教授從七位佐方鎭子刀自



愛國婦人會評議員山脇房子刀自



仙臺三澤初子の墓



堀切の菖蒲



論說

女子が日常の心用ひ一つ二つ

華族女學校教授兼學監　下田歌子

或る人のいひけるやう、處世の路はいと難きものにこそあれ。日常普通極めて卑近なる事に就きて、却りては、とは、いかにせん〳〵と思ひ惑ふ事ぞ多かる。同じくは、さる類ひの事を、折々には、敎へ示し給へかしとある。げに、さぞあらんと覺ゆる節もあれば、此度は、人の上に見もし聞きもせし事の、一二、心に斯くあれかしと思へることどもを云ふべし。

抑も學校等に於て、說き示す所の修身は、時に限りありて、且つ多くの人を、一時に敎ふるなれば、なるべく、其何人にも、取りて用ひらるべき事柄を撰び、極めて、其大體に就きて、簡略に云ふに過ぎず。況んや、古書の倫理を說きたる物によりて講ずる所あるが如きに至りては、存外に高尚なる事を說けども、却りて、通俗近易の事を知らしめざる等の嫌ひ無しともいひ難し。これ、即ち、敎育ある女子のなか〳〵に、無學不文の老婦人などに誹議嗤笑せらるゝ所以なりかし。

先づ、女子が常の心がけは、萬づ方正に誠實なるべし。清淨潔白なる精神の、皇天上帝にも嘉せらるべきが如く、可憐仁慈なる言行の、鬼神仇敵をも伏せしむべきが如くならんことを期すべし。

そのかみの「女教草」といふ書中、女子が悪徳を退けたる條に「さし足しては、立ち聞きし、人の咄しの腰を折り」とこそ書かれつれ。いと淺間しき事なり。自らの身は、俯仰天地に恥ぢず。いかなる神使の不意に來たり、呼ばるとも、更に逡巡恐懼する所無くして、立ちて命に應ぜらるゝやうにあるべし。然れども、他人の上は、能く思ひやり深くして、あはれに懐かしく、物事に情々しくあるべし。いかに、うらなきどちなりとも、其私室に入る時は、先づ音なひて後に入るべし。人と物語りするには、或場合に於ては、低聲にて爲さゞる可らずと雖も、耳語して、他の疑ひを引くこと勿れ、低聲に物言ふ時、決して横目づかひして、他の顔を見る可らず。我が上を云ふにやと思はれんは心づき無き事なり。

歩む足音はいかにも〳〵静かなるべしと雖も、かまへて〳〵拔足す可らず。人の歩み近づく氣勢を他人に示すべし。

況て、人の談話を立ち聞きすること等ゆめ〳〵あるべからず。往時は「立聞きする時は、其蹈みたる地三尺凹む」と迄、云ひ誡めたるものを、今はさる細事を丁寧に教ふること、少なくなりぬるぞ口惜しき。されど、其當時も、小説演劇等に、書かれたるは、極めて立派なる、人物の「容子は殘らず次の間にて立ち聞きせり」など云ふことを記したる、よし、その事柄の、いか程良じきことなりとも、決して、心直く、氣高き人のなすべき行ひにはあらず。いと淺間し。こは其作者が、仕組の都合上、殊更に、一つの人物を、ふと、其場に顯出せる趣考の文に出でたること多しと雖ども、然れども、これ猶、其風俗の影として、見ざる可らず。抑も、何時の世よりか、左様の事は免されに

けん。そを、泰西の人評して、善からぬ風俗なりと云ふを聞けり。いと歎かはしき事ならずや。斯かる事は、いかで〳〵、幼少の中より、注意して、嫌ふべく恥づべき事なりと云ふことを、能く知らしめ置かれたし。人の物を斷り無くして、取り去れば、世は盜人とし、法は賊として、罪なふにあらずや。人の他に憚るべき内々の談話を盜み聞きて、他に洩らさば、神は、いかで、其人を惡みて罪あはでやはあるべき。又、立ち聞きしたる事あらずとも、人の言ひ聞かせたる事、秘密にせられよと、賴まれたるは云ふも更なり。さらでも、人の爲よからじと思ふことは、決して、口をつぐみて、言はぬものぞ。さてこそ、最も重りかに賴もしき人とは云はれぬべきなれ。

又、信書の秘密をよく守るべきは云ふも更なり。人の開きたる儘、打ち置きたる書狀なりとも、斷り無くして、竊かに披き見、盜み讀む等の事すべからず。或る人、泰西の演劇に、無敎育なる婦人が、情と嫉妬の形狀とを顯して、人の反古籠を探りては、他よりの來狀を調べ見たるさまを演じたる、いと淺間しく感じたりと。いかにも打解けたる同志の私しの談話なりとも、苟且にも、人の誹議に亘ること、淫猥卑劣がましき事は、口にす可らず。これを口にすることの、女子自らが己れ先づ、其品格と價値とを落すは、云ふ迄も無く、邪念一度きざせば、心の鏡忽ちに曇りて、其明を失ふもの、心に浮ぶ惡き事さへも、早く抑へよと、佛は說けり。又、基督は「汝が左の手惡を爲さば左の手を切斷せよ。左の目、惡を爲さば左の目をくじり去れ。身體の不具は、精神の不具なるに勝れり」と敎へられき。況んや、他に對して、淺間しき事を談るをや。女子の女子たるに恥ぢざらん

と欲する人は、能く、爰に鋭意戒心すべきなり』

或る人の親友、某婦人、新たる宮づかへせられたる頃、婦人が異例の出世を妬みて、あらぬさかしらもし、笑ひ誹りなどする、女子多かりき。或時、婦人が次の間に、物取りしたゝめて居られける程、兩三の女子寄り集ひて、聞けがしに、彼の婦人を誹れり。或る人、年齢も、まだ無下にうら若き程なりしかば、矢も楯もたまらぬ許り、口惜しく覺えて、頻りに辯護せし程に、果ては或る人々にさへ誹られ惡まれて、いと不愉快なる狀を呈しきと。さて後に、或る人婦人の側らに行きて、「己れさへいと口惜しく覺えつる事、君、いかに、耐へ難くこそ聞きなし給ひけめ」と云ひたるに、婦人は、實に、何事をも感せざるさまにて、「何事かありし。われは、更に、心つざりき」とありしかば、或る人餘りの事に、あきれて、「さても〳〵、君の心よさよ。高聲に、長き時間、君の事を誹りつるものを」と云へば、婦人答へて「左やありし。われは、聞かずなりぬるよ。そは、いといぶかしと思ひ給ふべけれど、我れ若かゝりしまゝ、憂き目の限り見盡して、人交らひのむつかしき事を知るからに、何事も人の陰言は心にかけじ。又決して、打ち向ひて云はるゝ事より外に聞かじと、心に誓ひを立てゝ、一人其錬磨をなす程に、始めは、心にかけじと思へども、心にかゝり、聞かじと思へども、聞えつる事の、年月經るまゝに、更に、心にもかゝらず。耳にも入らずなりぬかし。凡そ、人の陰にて、云ふ事は、いと左許り、重大の事にはあらず。彼の方ざまに耐へ忍び難き事は、必ず、つひに、面前にて云ふやうになるものぞ。さて後に、眞に、自らが惡くば悦びて改めん。惡からずば、行水と聞き流し置き、其人の思ひ違へたりけ

りと、自づからに悟る時をこそ待つべきなれ」と云はれたるに、或人感涙のすゝむを覺えず、取りて以て、我が將來の誡めとせんと、いたく、其詞を悦び受けゝりとぞ。いと面白き事なれば、因みに、爰に說き加へつ。

總べて、高等なる敎育を受けたりといはるゝ女子は、たゞに、文學、技術の高尙なるのみを云ふにはあらず。其精神、見識、品格、即ち座作、進退、言語、應答の優雅、貞靜、溫良、恭謙の德、靄然として、其おもてに顯るべきを云ふなり。斯かれば、其の苟くも、女子の女子たらんことを欲する者は、宜しく、其一進一退につきても、愼重なる注意をすべきなり。而して、習慣は第二の性となり、其始め、窮屈困難なりと思ひしとも、馴れては、更に苦しと思ふ心の無くなるのみならず。却りては、心安らけく覺ゆるものなりかし。これに反して、其我儘氣儘に振舞ひて、身を放逸に持ち爲したる者は、馴れては、更に、安し樂しと思ふ事は無くて、隴を得ては蜀を望む習ひ、上より上をと欲する餘りに、遂に、より無き非望を企て、成らざる時は、其不滿不快は云ふ迄もなく、知らず〳〵も、迷信の濁浪に身を溺らして、他の嗤笑非難を受くること、いと淺間しき次第ならずや。されば、年少の女子は、先づ、其日常の細事より勉め、溯りて、能く、人の行くべき大道を踏み、所謂、安神立命心ひろく、體ゆたかに、安らけくのどけく世をこそは送らせまほしきことなりけれ。わが國、往昔、上流社會に賢女、名媛の並び出でける世に於て、女子が、家庭敎育中、周到緻密なる心用ひを敎へたる事は、しば〳〵云へりき。さるを、今は却つて、さる事云ひ敎ふるが稀になりぬるかいかにぞや。これを、現今、泰西諸

洲の女子教育に比較して見る時は、遺憾ながらも、其の數等おくると云はざる可らざるぞ已むことを得ぬ次第なりける。されば、今、爰に左許りの事は云はでもと云はれぬべき、小細の末に迄亙らんとするも、また已むことを得ざるなり。さて今よりは、日常坐作、進退の事を云ふべし。

先づ、眼は常に、正視せんことを要す。決して、横眼づかひし、左顧右盼す可からず。殊に、ふと、他より、入り來たる人、前を通る人、及び坐し居る人、就れも人のなり形ちをじろ〳〵と、見廻し、見つめなど爲可らず。況て、他の髮のかゝりより、足もとまで見おろし、見あげなどするいと淺間し。心ある人は、途中行かふ人の上にだに目とゞめては、見ぬものにこそあれ。見ずしもあらずして、能く心に見るをこそ明智とは云ふなれ。先づ、其見らるゝ人になりて見よ。露、見知らぬ人の許へ行きて、鼻しろみ、きまり惡く覺ゆる折から、居並びたる人の、我れ一人に目注ぎたるを覺えば、いとゞ手持ち無く、うら恥かしくて、居づらく、侘しく思ふまゝに、いとゞしく、坐作進退に度を失ひて、心ともなき過ちも、しいづる者ぞ。能く注意すべし。又、心づき無き人のみありて、さる振舞ひせられたりとも、あな笑止と心には思ひても、能く、思ひをひそめて、彼れは惡しとも心づかで、正なきわざはするにこそ、いとはしや。道知らぬ人をなどかは、咎めだてすべきと、能くよく、仁恕の心を起して、苟且にも、不興氣なる氣色見す可らず。しか心高く思ひなりては、其外貌、自づから、氣高く靜まりて、却りては、他の、自からに、耻ぢて、行ひをも改むるものにぞあるべき。

家庭に於ける子女養成の希望

女子學院長　矢島揖子

現今家庭に於ける子女養成に付き、私の望みますることは、モー少し體育に注意して貰いたいので御座ます、主なることを申せば、勉强が少し過ぎて、而して運動が足りませんやうです。是が第一の缺點だと思ひます。其は何故かと申しますれば、我國古來の風習として、短い間に多くの勉强を爲ねばならぬやうになつて參つて居りまする。其れと申しますものは、其人の希望目的が……惡く申せば小さいと言はなければなりませぬ。積極的に申せば、いま少し呼吸を圖つて勉强して貰いたい。

ソコで、先づ通學する人の家庭に望みまする所は、出來るだけ其家事向のことは勘辨致しまして、而して夜の仕舞即ち、睡りに就く時は、キチヨーメンにすることゝ、又寢床を離れることも餘り早く過ぎないやうに、……遲いのも宜しくありませんがどうも早過ぎることを注意しないやうに思はれます。

又體育の關係に重なるものは衣服で御座います。衣服は體に少しも無理を仕ないやうに、改良的にしなければなりますまい。それから食物は、重に滋養品を用ゐることにして貰ひたい。私が氣を付て見ます所によりますと、多くの生徒の辨當が、實に僅かでございます。何う云ふ譯かと云ふに、然う少しばかりしか喰べられない筈はないけれども、多くは持通ふのが重いとか、見えが惡いとか、色々な原因があるだらうと思はれます。

扨て現今學生の體育の注意を、疎にする原因は、

何う云ふものかと思ひますと、私共の幼少の時には、起伏しのことは、大抵夜は遲く寢て、朝は早く起き、而して着物の惡いことは頓着しないで、また食物は、成るべく粗食ものを少し喰べるのが譽れのやうに成つて居つたのですが、併し、最早今日の世の中に於ては、澤山喰ないの杯を譽とする時代ではありませぬ。若も私が子供に通學をさせる場合であつたならば、其處らの事は、精々氣を付けて、家の事とは簡易にさせたい。勿論家の都合から私が望み通りには出來ぬことはありませうけれども、教育が大切と云ふ側から、之に重きを置きます。……起き臥しのこと、食事のこと、衣服のことには、主婦たるものが十分骨を折らねばなりますまい。

右の故に、私は時々通學者の父兄の家を、出來得る限り見舞まして、「學校から學生が歸つて來たならば、何うかマア充分遊ばして、御馳走をして、樂にして置きたい」とは云ふけれども、「能く内の家業の手傳させてやつて下さい」とは云ひませぬ。

私共の今日の望みは、此衛生のことであつて、學校では精々注意して居りますが、家庭に於ても、宜しく注意して貰いたいものであります。

まことの母（其三）

敕撲生

子を養ふことを學びて嫁するものあらずと云へるは、至誠の心により、至愛の情によりて、其子を養育し得るを云ひしまでにて、直に養育の事終るといふにはあらず。己が品性の高からず、素行の修まらざるに、其子をのみ責めんとするは、至誠

と至愛とに於ても、爲し得べきことにはあらず。左れば縱令母には至誠と至愛との天倫上之ありとするも、母を見習ふこと其影の如き子をして、大成せしめんとするには、其母に望むこと多からざるを得ず。是れ今日女子教育と云へる中には、總ての教育の源泉をも含み居ることを知ると同時に、如何に重大の關係を有するかをも推すに難からざるべし。熊本藩に堀君綽といへる人あり。母は同藩なる藪愼庵の妹にして、幼より學を好み、堀氏に歸ぎて後も、尙心を讀書に潛めり。君綽を生みてより、教導訓誨に怠らず、常に身を以て之を率ゐたり。君綽長じて遂に藩の執政となる。元來堀、藪兩氏共藩中の名家にして、食祿至つて裕なり。尋常の婦女子ならんには、殆んど節儉の何物たるをも知らず。美服安座して、徒に婢僕を頤使するに適ぎず。然るに藪氏は夙に學問の効によりて、

儉德は萬行の基たるを知り、人生には不測の災あることを察し、常に家人を誡めて、儉より奢に入るは至つて易きも、奢より儉に移るは頗る難きものなり。事あらん日のために、常々より心掛けて、奢侈に流れざる樣務むべしとて、衣服の裁ち縫ひは必らず自ら其勞を執り、服にも美を加へず、食にも味を重ねず、萬事自ら節儉力行して、模範を示したれば、大家の中翕然として、一同質素の風に靡き、婢僕に至るまで、謹愼にして勤勞を惜まず、歡虞家に滿ち、藩中其德を稱せりといふ。太平の久しき上下奢侈の風に習ひ、珍羞美服して、啻に事あるの日の準備を怠るのみならず、動もすれば負債堆積して、如何ともする能はざるものさへあり。藪氏其間に處して、遠慮を抱きたるは、一に學問の力によるべく、君綽母の教導によりて、執政に擧げられ、既に家事のために後顧の憂なく、

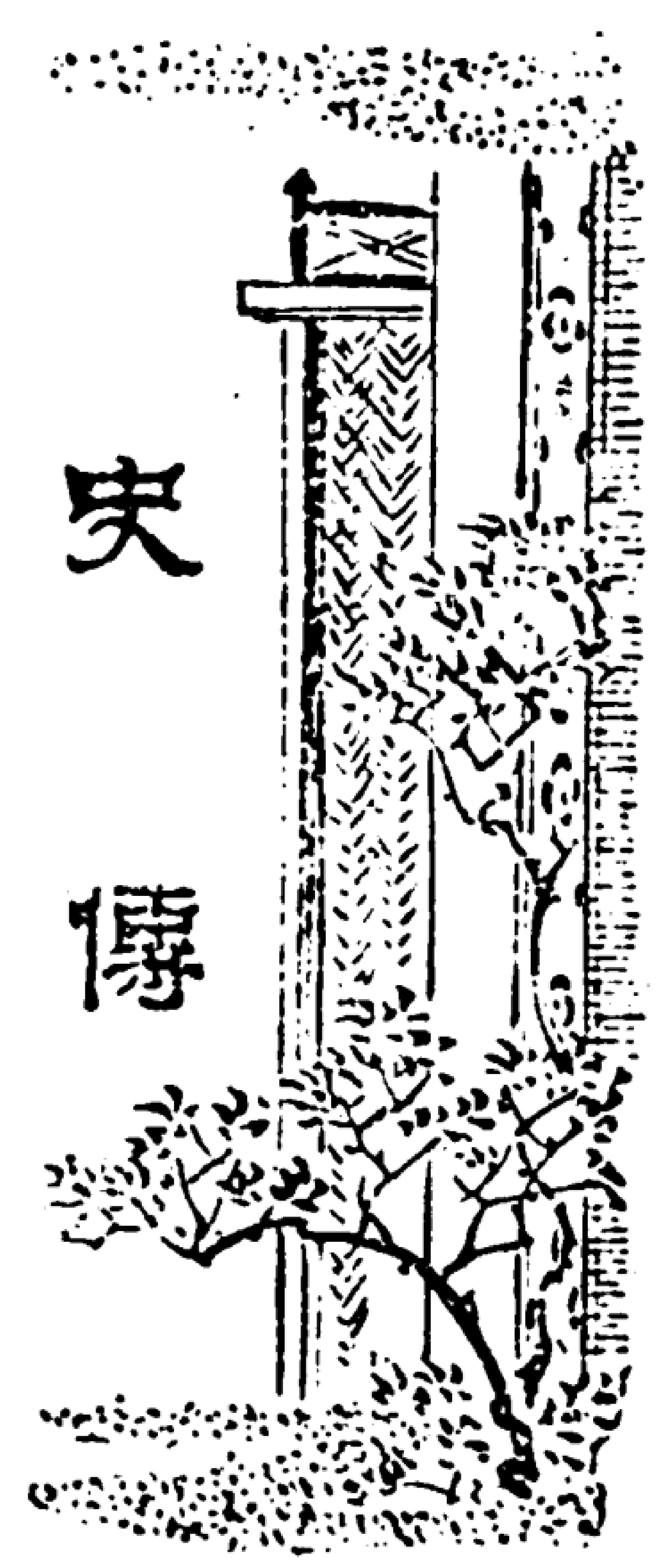
専ら藩政に心を用ゐるを得て、有事の日のために、遠謀を畫したるを推知すべく、一國の富强は、一人の方寸より出で、英才の籌謀は、賢母の手裏に存す。以て如何に女子教育と云へる中には、至大の意味あるかを察するに足るべし。又尾州藩に成田喜起と云へる人あり。母の名をキワと云へり。年十九にして嫁し、二十五にして夫を失ひたり。未だ妙齢なるに寡居して、能く舅姑に仕へ、又幼兒を育へり。家素より裕ならず、然るにキワは仰事俯育共に心を用ゐて怠らず、人皆其孝貞を稱せり、キワ稟性雷を畏る、是れ男女とも往々見る所にして、迅雷天地に轟くに當りては、色を失ひ、措を亂し、堂々たる男子にして、香を燒き、衾に入るの陋態を演ずるものあり。況して婦人にして、此性あるものは、如何に忍耐せんと欲するも、殆んど人事を忘るゝが如き心地に至るを常とす。然るにキワは已を見て其子の慣れんことを慮り、已に克ちて性を抑へ、雷鳴るごとに殊更に襟を正して端座し、少して畏怖の情を示さず。其子遂に母の雷を忌むことを知らざりしと云ふ。是れ其子を養育するに於て一些事たるに過ぎず、然れども斯る些事にまで身を苦しめ、心を勞せしを推せば、如何に常々教導に努めたるやを見るに足るべく、其子長ずるに及びて、能く文武の師を選みて之を從はしめ、精勵怠らざりしめしより、遂に擢でられて、藩の顯職となり、食祿八百石を受くるに至れり。世には寡婦育と稱して、其怯懦羸弱を譏るものあり。是れ婦人の心弱きより、専ら愛に溺れて、此弊を免れざるによれり。勇怯賢愚の天性のみにあらずして、教導訓誨以て怯を轉じて勇と爲し、愚を移して賢と爲すを得べし。キワの一寡婦を以て、幼弱の孤をして、文武を精勵せしめ、大

藩の群士中に卓越せる人才にまで、成立せしめたるを見ても、父なき孤とても、母の賢明によりて、性を移し、業を成さしめ得るを證するに足れり。又水戸藩儒臣青山西塢の妻内田氏は、温順貞淑にして、能く婦道を守り、舅姑に仕へり。所生の子無くして、庶出の子を養ふ。其子幼き時、遊技に耽りて書を讀むことを好まず、西塢其家業を襲ぐに至らざらんことを憂ひ、時々怒りて之を叱責鞭撻す。尋常の婦人ならんには、其庶出の子を觀ること、所生の如くなる能はず、動もすれば父の鞭撻を幸とし、或は己も亦起つて之を苛責し、甚しきは幼兒の失行を列擧し、針小を棒大にし、揣摩を以て本意ありと告げ、邪推を以て事實なりと說き、宛も平生の鬱憤を霽さんとするが如きものあり。口には所生にあらずして、義理あるの子なれば、常に苛責を謹むと說くも、其實は小過寸誤をも恕する所なく、其子をして大人も亦及ばざるの言行たらしめざれば、以て其心を慰せざるが如く、所謂幼童を待つに堯舜を以てし、他人も亦之を見て、養母の常として怪まず、然るに内田氏は庶出の子を見ること、愛撫所生に異らず、父の叱責に遇ふごとに、從容其側に至りて、其子に代はりて罪を謝し、退きて以來書を讀み業を勵みて、家聲を墜さゞらんことを勸め、或時は聖賢の幼時は衆兒に異れることを說き、或時は刻苦精勵にあらざれば、英俊たる能はざることを諭し、諄々として過を悛めて學に嚮ひ、志を立てゝ名を擧げしめんことを努めたり。之によりて其子遂に奮勵刻苦して、後には水藩の鴻儒となり、書を著して家學に光彩を放ち、天下に大名を成すに至る。是れ即延于先生にして、常に曰く予の此に至れるは、一に養母の教導訓戒によれりと。所生の子を愛す

るは天性なり、庶出の子を愛して所生の如くなるもの稀なり。況んや教戒に心を用ゐて倦まざるに於てをや。故に殊に此に堀氏の母の學識によりて、其子を教へて執政たらしめ、成田氏の母の寡婦にして、其孤を導きて顯職に至らしめたると共に、青山氏の母の養母を以て、其庶子を訓へて鴻儒たらしめたるを表す。我邦亦曹大家、孟母鮮しとせんや、是等をまことの母とこそいふなれ。(完)

我が窓てらすよはの螢は
集めては國の光となりやせむ

後龜山天皇



山路の雪

文學士　濱田　廉

信濃なる山路の雪と諸共に
春をも待たで消ゆるけふかな

是れ花はづかしき山口お藤が、主家の妖賊を倒して、從容刑場の露と消えし時の、辭世の歌なり、三十一文字のなか〳〵に、時雨の宿となるぞ悲しき、

佛蘭西革命の恐怖時代に、妙齡の「シャルロット、コルデー」が、命を捧げて奸吏「マラー」を暗殺せしは、既に世界に知れ渡れり、國こそ變れ、事情こ

そ異れ、衆庶の爲めに献身せし高節は、お藤豈に「コルデー」に劣らん、しかもお藤の名はわが島國にだも籍甚たらず、歎くに勝ゆべけんや、いでやお藤が紫匂ふゆかりの色香をたづねんかな、みすゞ苅る信濃國伊那郡飯田城主堀大和守親寳、明君の譽たかく、將軍家齊の覺めでたくして、幕府の側用人に擢んでられ、江戸西丸下に上邸を構へて、日々の出仕怠りなかりける、その奥用人に、十石二人扶持を食む山口彈治と云へる小身者あり、その女は即ち烈女お藤なり、天性愛嬌こぼるるばかりなるが上に、その心ばへめでたく、父母に孝にして兄弟に友、晝はひねもす母を輔けてまめ〳〵しく立ち働き、夜は父を助けて鰻串を削り、その隙には讀書習字を勵みたり、世の常の子女ならば、蝶よ花よと撫子花の、露をも厭ふ年ばへなれど、お藤は早く浮世の辛酸を味ひたり、十二歳又十四歳の時、母の病に臥すや、寢食を廢し、衣帶を解かず、赤誠神明に通じけん、暗にしもなき梅が香の、いつしか堀家の大奥にきこえて、御臺所の御感斜ならず、俄に召されて姫君の御附となりぬ、噫積善の家には慶多かりけり、かくしてお藤は常に姫君に侍侯してよろづ御世話申しけるに、元より温和怜悧の性質なれば、よく姫君の御心に愜ひ、御臺所の御いつくしみも深く、時々は大和守よりもなさけの御詞賜はりしかど、恩に狎れて媚を呈することもなかりければ、今を春べと咲く藤の、清き色香は忽ち家中の話頭にのぼり、人々その榮華を羨みけり、

實に遠くべきは只女色なりけり、一たび色海の迷津に陥れば、明智も忽ち曇る、さすが明君の大和守も、そのためしにもれず、御臺所側室のおはすが上に、又もや豊浦といふ美人を寵し賜ひけり、お

藤が巽日ひらめかせし忠義の刄は、この時より琢ぎすまされしといひつべくや、そも／＼豐浦は傾國傾城の美人にして、菩薩の佛相を外面に飾れど、内心は夜叉の如く、奸智に長けたる毒婦なりければ、初の程はつゝしみかしこみて、能く大和守に仕へ、御臺所を敬ひしを以て、大和守の寵益渥く、大奥の愛を一身に集めて、數十の女中顔色なきに至れり、かくて豐浦は才色を弄して大和守を蠱惑し、漸くその爪牙を露はして閨房を亂せり、この時に當り、天下は有名なる天保七八年の大饑饉に際し、餓莩路に充ちて、野に菜色なかりしが、西丸下の大奥は玉杯飛び絃歌湧き、華美豪奢を盡して、藩民の塗炭に苦しむを顧みず、收斂愈急なりければ、人心やう／＼動き初めたり、

さてもお藤は旣に部屋を賜はりて、奉公怠りなかりしが、恭謙己を持し、能く下を愛したるを以て、朋輩にも敬重せられたり、お藤又閑暇の折々には、讀書に耽り習字を勉め、和歌の道より挿花彈琴の餘技にまで分け入りて、ひたすら婦女の道を磨きぬ、かくて十一歳になりつれば、御臺所の仰かしこみて元服を施せしが、數年の心勞に疾を獲、しばし御暇たまはりて、實家に退きたり、されどお藤の心には一日も早く平癒して、舊の如く姫君にかしづかんと祈りしに、或る富貴の町醫より、切にお藤を求めてやまず、父母も頻りに姻嫁をすゝめしかば、孝心ふかきお藤は父母にかえす詞なく、御臺所姫君にわかぬ名殘の御暇乞きこえて、かの町醫の妻となりぬ、家妻としてのお藤は、舅姑に孝に、良人に貞なりしは云ふまでもなかりしが、禍福はあざなへる繩の如し、お藤が八千代の友白髮をちぎりし良人は、無常の風にさそはれて、世を早うせり、お藤の愁歎思ひやるべし、こ

の後再嫁をすゝめしものもありしかど、貞女いかでか兩夫に見えん、この度は父母の詞にも從はで、淸き操を守らんと決心せり、

こゝに豊浦は驕奢日にはげしく、遂に政事にまで容喙して、おのれに諂はざるものは、悉くこれを退け、便佞のものゝみを用ゐて、任免皆豊浦の私情に出で、賦斂いよ〳〵劇しかりければ、飯田の士民皆憤怨して、形勢穩ならず、國家老安富主計大にこれを憂ひ、先づ士民を慰諭して、自ら江戸に馳上り、大和守に謁して直諫したりしかば、大和守已こと得ずして、豊浦を放ちたり、されば飯田士民の歡喜なゝめならざりしといへど、主計は忽ち家老を免せられたり、この故に豊浦が後復た勢を大奥に振ひし時は、一人として大和守を諫むるものなかりしかば、お藤身を挺して忠義の刄を振ひしなり、

かくてお藤は苦節を守つて寡居せしが、再び堀家に仕へて姫君の御附となり、精勤昔に異らざりき、さる程に大和守は、心ならずも愛妾豊浦を放ちたれど、その妙なる色香忘れがたくて、遂に再び迎へ入れて、名を若山と改めしめ、寵愛前日にまさりしからに、若山の豪華專横も、一しは甚しく、御臺所を讒して奥御殿に幽し、姫君を愛宕下の中邸に移し、側室お糸の方を麻布古川の下邸に逐ひ、躬ら御臺所めかして威を内外に逞しうせり、お藤は姫君に從ふて下邸に赴かんと願ひしが、若山これをゆるさず、上邸にとゞめて若君に侍らしめけり、お藤つら〳〵若山の暴威を見て、主家の行末を思ひ、大恩ある御臺所姫君は、楚囚にひとしき御境遇、大和守は全く若山に溺れて、臣下は皆奸惡邪曲のみなれば、かくてあらんには堀家の御運やがてつきん、若山の心中はたゞ大奥の寵を一身

にあつめんばかりにはあるまじ、にくきは若山、主家の危殆を救はんは、この妖婦を除くの外なし、命を賭して主家の急に赴かんと、思ひつめし誠心は、岩をも透す桑の弓、ひきしぼりたる矢竹心のいかで撓まん、今日よ明日よと機をまつ程に、却て好機を失はん、如かず明日主君の御登城なされし間にと、かく思ひ定めしは天保十一年九月二日の夜なりき、

今夜かぎりの命なれば、父母に永訣の狀を認め、形見の品々とりそろへて、秋の一夜のわけがたきを恨みぬ、あくれば九月三日の朝お藤は髮を整へ化粧を施し、中模樣紋附を上着とし、白無垢を下襲とし、金入の帶をやの字に結び、懷劍を懷にして、しばし香を燻じ鬼子母神を念じて、いく久しくも住みなれし部屋を立ち出でぬ、あはれ若山の運命は、蛟鰐の淵にのぞめりとも、神ならぬ身の知る由なければ、侍女共と月次の和歌を披講せし折から、お藤は大事ありとて人々の退出を請ひ、徐に膝おしすゝめぬ、

若山樣！御家の御爲めに御生害遊ばしませとは、お藤が冒頭の謦語なりき、若山は滿臉紅を潮して威を示したれど、お藤の英氣は少しも挫けざりき、滔々その罪狀を擧げて益自害をすゝめたり、若山は叱咤一番退出を命じたれど、何の功かあらん、お藤は遂に懷劍を杖づきて自害を促すこと益急なり、もし御生害なさらずば、妾が御手にかけまゐらせんと、言ひ放ちたる語氣凜然、眼光炯として若山の胸を貫きたり、若山は已に甕中の鼠なり、その面色忽ち土の如くなりぬ、座にえ堪へで新殿に逝れんとせり、お藤固くその裾を捉へて、主家の大姦慝を誅すと叫びつゝ、直に押し倒して、懷劍の鞘を拂へば、紫電一閃、若山の命は風前の

燈火なりき、權貴に媚び名利に趨りし侍女等は、固より主人の難におもむくの勇なく、若山の急を見て徒にのゝしり騒ぐのみ、

奥用人山口彈治はこの時中老部屋まで來りしに、若山の部屋にたゞならぬ叫聲きこえしものから、驀地に駈けゆきしに、思ひきや娘お藤が主君の愛妾に刄を加へんとは、彈治は心神顚動して聲をもかけず組みつきたり、お藤も今は一生懸命、父とは知らず振りほどけば、彈治は力餘りて仰ぎ倒れぬ、お藤は左手に若山の襟髪つかみて、畢生の力を右手にこめつゝ、若山の脇腹を刺し貫きたり、彈治は再び起ちてお藤に組み付きたれど、女ながらも一念の籠る所、容易に引放つべくもあらず、お藤は尙も刳り廻せば、鮮血迸りて紅の浪をたゞよはせぬ、若山は花の姿も色褪せて、聲もえ立てず手足をもがくのみ、昨日まで榮華の夢におきし身も、今は修羅の苦を見る、惡の報ぞ恐ろしき、

かくて彈治は辛じてお藤を組み伏せし折、諸役人等馳せつけて、お藤を高手小手に縛めたり、若山は致命傷を負ひぬ、療養怠りなかりしも、遂にはかなくなりき、其墓は澁谷村東江寺にあり、お藤はこの後嚴しき詮議を受けしが、應答少しも淀まず、主家の爲めに身を擲ちて大姦を殺したれば、その上はいかなる御處分も苦しからじと、覺悟の體のいぢらしさに、諸役人もそゞろあはれを催せり、家中の諸士も其忠義を憐み、其罪をなだめんことを請ひたれど、大和守の怒はげしくして、遂に死刑に決し、飯田の獄に護送せられたり、知るも知らぬも打連て、涙片手の暇乞ひ、げに人の心に神は宿りけり、殊に御室姫君の御なげき、密に慈悲の御賄物さへ賜はりしと云ふ、思は同じ飯田の士民

も、袖しぼりつゝ烈女の輿を郊迎し、衣食の差入日に幾何なるを知らず、又創手を定むる時にも、よしや主君の御仰なりとも、此烈女に加ふべき刄なしとて、互に辭讓せりと云ふ、忠義が人心を感ずる、槪ねかくの如し、

やがて所刑の朝となりぬ、お藤は神色平生に異らず、徐に硯ひきよせて、一首の和歌をぞ書遺しける、

信濃なる山路のゆきともろともに
春をもまたてきゆる今日かな

お藤その日の打扮は、亂れし髮を結びかへ、白無垢の三枚襲、白綾の帶を前に結び、いとしとやかに最期の座に就きぬ、竹垣の外には空に知られぬ村雨時、かくて諸式法の如く終りて、いよ〳〵最後となりぬるとき、お藤しばらくの猶豫を願ひぬ、未練の心おこりしか、あらず〳〵、お藤恰も月經の期に在りしかば、死後の耻を思ひやりて、厠に入らんことを願ひしなり、憶ふ昔唐天寶の亂睢陽城に苦節を守りし張巡が、臨終の際にも起て施せしためしあり、こゝに至てお藤が尋常一樣の巾幗者流にあらざるを知り、有髯男子將に愧死せんとす、今は心にかゝる雲もなく、黃泉の旅のみ急がれて、端坐合掌、首さし延べて刄を待ち、あはれ散り潔き大和の櫻、創手の同心が淚はらひて振りあぐる刄の下、最後の微笑も淚の種、ひらりと見えし稻妻や、山路の雪と諸共に、春をも待たで消えしお藤が、悲風荒び慘雨篠を亂して、袖も袂も朽ちんとす、時にお藤芳紀二十一、天保十一年十二月二日なりき、

噫一刻おくれたり、江戸の邸より馳せ下りし飛脚は、お藤赦免の狀を齎せしなり、落花枝に上らず、お藤が魂魄は遠く白玉樓上に去りしを如何にせ

ん、士民の遺憾想像すべきなり、お藤の遺骸は飯田美濃瀬町長源寺に葬られたり、法名一貞院不二妙松信女、今も尚自然石の墳墓屹として春風に立てり、側に榮ゆる玉椿年毎に紅の花を開きて、烈女の眞心を顯はせり、明治二十三年の頃、有志玉垣石燈を寄進して壯麗を極む、千萬年の風雨は岩石を削磨すべけれど、お藤の忠義は朝な夕なに立ちのぼる香華の煙の末長う、忘らるゝ期はあらじ千代に八千代に萬代に、

お藤の傳は、安井息軒の「阿藤傳」藤本藤陰の「藤の一本」「烈女お藤」に詳なり、就て看らるべし、



「グリセル、ベーレー」夫人（其三）

宮館さだ子

此時に於ける「グリセル」孃の艱難辛苦は、實に父にも劣らぬ程であります。まだ乙女子の纖弱き身でありながら、健氣にも每夜草木の眠るといふ眞夜中に、竊に「レドブレース」の屋城を拔け出て、二哩の畝路を辿りて墳塋内に潛匿して居る父の許に飲食物を仕送りたる上、東天の白みわたる前に「レドブレース」に歸らなければならぬのである。其途中には「ボルワルス」の寺畔、亂塔斷碑の間を通り貫けるのであるが、風雨蕭條として黑白も辨かぬ折には、孃は行步に艱みて、墓碑に躓き倒るるやうなことは屢次ありました。

此の如き艱難辛苦をば、孃は些かも介意しませぬ

が、唯其最も恐るゝ所のものは父の身の上で、兵士及び捕吏の一隊は父を捕縛するが爲めに、常に隈なく其行衛を捜索つゝある場合でありますから、木枯の音にも魂を奪はるゝやうなことは稀有しくありません。

孃が毎夜墳窖内に潜れて居る父との交通を持續るが爲に、もう一つの困難がありました。开は「レドブレース」城に召仕ふ數多の僕婢等に疑はれぬやうに飲食物を得ることで、是に就て面白い話があります。父の「サー、パトリック、ヒユーム」氏は、平素羊頭を非常に好んで居りましたが、或日此嗜好物が調理されて、食卓の上に持ち搬ばれて來ました。子供等も皆嬉んで食事しつゝある間に、孃は同夜之を父に供するが爲に、手早く大部分を隱しましたが「サンデー」と稱する弟は泣聲しながら「御母さん御覽よ、僕は汁を啜つてる間に姉さんは一人で羊頭を悉皆食べて仕舞たよ」と言付けたさうであります。

此陰濕で幽鬱な墳窖の到底永く隱匿するに耐へぬ所から、例の忠實の出入大工「ウインター」に頼んで、居城の床下に穴を掘り、其地底に澤山の箱を積み累ねて「サー、パトリック」氏の隱匿所に充てたが、此處も或夜の大雨で水が一杯に浸入し、復も立去らなければならぬことになつた。

恰ど此時頃に、無二の友人たる「ジャルヴイスウード」の「ベーレー」氏が、いとも殘酷の死刑に處せられたと云ふ報知が「サー、パトリック、ヒユーム」氏の許に達したので、今は一刻も猶豫することが出來ず、如何かして英國を立退き、難を外國に逃れなければならぬ場合になりました。勿論人に目立たぬやう假裝して逃亡しおければならぬのであるから、孃は甲斐々々しく其準備を整へ

殆んど晝夜を分たざる程でありました。其準備の完整した朝まだ夜の曉けはなれぬ中に「サー、パトリック、ヒユーム」氏は、馬を驅り、倫敦を指して落ち延びました。

氏の逃亡後、間もなく一群の捜索隊は、其後を追ふて捕縛に向ひましたが、幸にも氏は途中にて路を失ひ、徑路に入りたるが爲に捕縛の難を免れた。此くして氏は、間道を經由して倫敦に着し、直に佛國に渡り、更に轉じて和蘭に落ち延びましたが、此間の消息は眞に危險一髮で御座いました。

氏の逃亡後、家族の人々も、其後を慕ふて和蘭に移住しましたが、本國に在る采邑と、其他一切の財産とは擧げて官に沒收せられたが爲に、以前の生活とは打て變り、やう〳〵其日〳〵の露命を繋ぐばかりである。

襲に一家の和蘭に移住する際に「ジユリアナ」と稱する娘の天性羸弱にして、長途の旅行に耐えぬ所から、止むなく本國に殘して置きましたが、都合上此娘をも和蘭に呼び迎へるの必要が生じたので「グリツセル」孃は、其使命を帶び、且つ其序を以て、一家の生活に要する些少の金員を工夫するが爲に、本國蘇格蘭に派遣せらるゝことになりました、此旅行は、孃の如き妙齡の一處女に取りては實に輕からぬ責務である。されど孃は、途上幾多の艱難辛苦を嘗め、普通人の耐ゆること能はざる危險を犯して、克く其使命を完ふした。やがて英國より歸りて「ブリル」港に上陸した時には、夜雨蕭々として泥濘脛を沒し、且つ寒威極めて強く、殆ど骨に徹るばかりであつたが、孃は病弱の小妹「ジユリアナ」を背負ひ深夜雨を侵して「ロツテルダム」に向ひました。されど恙なく、長途の使命を果して和蘭の侘住居に歸り來り、再び父母兄

弟の睦ましき團欒中に投ぜられました時には、是迄の艱難辛苦も全く打忘れて、此健氣な小女の胸中には、唯春光の依稀として棚びくものあるのみであつた。

一家の和蘭に流寓することが三ヶ年半の久しきに及びました。其間に於ける收入は極めて尠なく、而かも其四分の一を家賃に支拂はなければならぬのであるから、以前の如くに多數の僕婢を雇入ることも出來ず、召仕の者は、唯洗濯女一人あるのみで、家事萬端の事は、一に皆孃の手を煩はさなければならぬ。それ故に、孃は平均一週間内に、二度徹夜しなければならなかつたさうであります。



紫式部日記講義（三十三）

井上頼文

宮は、殿、いだき奉り給ひて、御ばかしは、少將の君、とらのかしらば、宮のないし、とりて、御さきにまゐる。

からぎぬは、まつのみのもん。もは、かいふをおりて、おほうみのすりめにかたどれり。こしは、うすもの、から草をぬひたり。

少將の君は、秋の草村、てふとりなどを、しろがねして、つくりかゝやかしたり。

おりものは、かぎりありて、人の心に、しくべい

やうなければ、こしばかりを、れいにたがへるなめり。

釋義

○宮　宮は、御降誕の皇子を申す。○殿　殿は、道長公なり。○御はかし御劍なり。劍は、佩くものゆゑに、はかしといへり。○とらのかしら　造りたる虎の頭なり。虎は猛き獸なれば、邪鬼を拂ふまじなひに用ゐたるなり。後世惡魔を拂ふとて、獅子の頭を小兒にしめすがごとし。中宮御產部類記に引くところの源禮記に、元永二年五月廿九日、甲戌、未剋、始御浴殿、差ニ廳官播磨貞仲一、奉ニ仕丁一人、荷丁二人一、令レ汲ニ東流水一、（白川云々）（中略）皇子（崇德）令レ渡ニ御御浴殿一給、大納言二位、奉ニ仕御湯殿一、（件人、今上（鳥羽）御乳母也）女二位爲ニ對湯一、二條殿奉レ抱ニ皇子一（件人、故宰相中將家政卿女）御匣殿、持ニ犀角虎頭一（件人、右大臣女）高倉殿、持ニ御劍一、典侍藤原能子散米（件人能登守基頼女也）と、見え、貞丈雜記に若宮御誕生有て、御產湯ひかせ申す時、虎の頭の影を、御湯にうつして、ひかせ申す事あり。虎は猛き獸にて、諸のけものゝ恐るゝ物にて、邪氣を退くるゆゑ、其影をうつして、御湯をひかせ申すなり。と、見ゆ。○御さきにまゐる　御前に立ちながら行くなり。○からぎぬ　唐衣は、背子とも書きて、婦人の禮服の表衣なり。錦にてつくり、形は半被の如くにて、襴なく、袷にて、上衣の上に着るもの。○まつのみのもん　唐衣の紋樣には、松の實（俗に、マツポックリといふもの）を織り出だせるなり。○も　裳は腰より下に着る衣○かいふをおりて　かいふは、海部にて、花鳥餘情に、大浪に、みるや、貝などを、織り

たる文なり、と、ありて、海波、海藻、貝など
を、織りいだせるものをいふ。○おはみのすり
めに　大海の摺目にて、織り物の海部を、寶
物を以て摺りたる目の如くにの意なるべしとい
へり。又、めは、あらめ。わかめ。ひろめ。か
ぢめ。などの、め。にて、海藻にてもあるべしと
もいへり。○かたどれり　その景狀を似せた
ることをいふ。○こし　こしは、裳の腰なり。
○うすもの　うすものは羅にて、薄き織物をい
ふ。○からくさ　羅の織物に、唐草を縫ひた
るなり。さて、上の唐衣は、まつのみのもん
云々より、うすもの、から草をぬひたりまでは、
宮の内侍の裝束のさまなり。○少將の君　上
に見えたる、こ少將の君のことなるべし。小の
字を脫せるか、または省きたるかなるべし。○
秋の草村　秋の野の景色なり○てふとり　蝶と
鳥とのことにはあらで、たゞ蝶のことなり。藤
井高尙翁の說に、〻てふとり、と、いふこと、中
昔のかな文に、これかれと見えたるを、蝶と、
鳥と、なりと、みな人おもふめれど、さやうに
はあらず。蝶は、虫なれども、鳥のごとく、は
ねありきとぶ故に、女、童などの、蝶を、てふ
とりと、いひなせる、その世のものいひのまゝに
かける文にて、これは、中昔の俗語なるを、誰
も誰も心づかざりしなり。こゝは、小少將の君、
おりものは、きがたくて、裳のこしに、秋の草
村のゑやうをそめたるに、とびかふ蝶を、白が
ねしてつくりて、つけものにしたるをいふ。い
とめづらしきさまなれば、れいにたがへるよし
にはいへるなり。と、見ゆ。この說しかるべし。
○しろがねして　しろがねは銀なり。すなは
ち、銀を以ての意。○つくりかゞやかしたり

銀を以て造りたれば、キラ〳〵と、うつくしく光りたるなり。○おりものはかぎりありて　織物は、身分のよき人ならでは、着ることを許されざるものなり。故に、かぎりありてと、いへるなり。おり物とは、錦、または、織地をつくして、地紋を織りいだしたる物をいふ。○人の心に、しくべいやうなければ　人々の心にかなふ、好みのまゝにつくりて、自由に着ることの、できぬものなればの意。○こしばかり　裳の腰だけの意。○れいにたがへる　腰の裳ばかりに、秋の野の景色を染めいだし、それに、蝶などを、銀にて造りてつけたるが、例に違ひたれば、めづらしとの意なり。

譯解

皇子は、道長公、抱き奉り給ひて、御まもりの御劔は、小少將の君といふ女房、持ちて、つきしたがひ、惡魔を拂ふまじなひの虎の頭は、宮の内侍といふ女房、取りて、御先に立ちて參る。さて、宮の内侍の、着たる唐衣の紋には、松の木の實の紋を織りいだし、はきたる裳は、海部を織りいだして、大海の摺目に象れり。また、裳の腰は、羅に、唐草を繡ひたり。

また、小少將の君の、はきたる裳は、秋の野の草むらに、とびかふ蝶を、銀にてつくり、つけものとしたるを、まばゆきまで、耀かしたり。女官の着る織物このそれ〳〵制限ありて、人々の心々のまゝに、好みにまかせてつくること能はざれば、只、腰の所ばかりを、かやうに、めづらしく、常にたがへてつくりたるならん。

指環等に用ゐる寶石（承前）

理學士　福地信世

寶石が産出する狀態

指環に入つてある磨きたる寶石は誠に美麗なものでありますが、天然に産出したまゝにては、少しも美麗ではない。形も亦磨きたる寶石の形とは、大に違ふて居る。それ故に、慣れぬ人の目には、寶石と思へぬものが多いのである。天然に出たまゝの金剛石は、玻璃より醜くいものである。

天然に出たるまゝにては、寶石も其價値を顯さないが、人工を加へ磨ぎ上げて、初めて美觀を呈するので、所謂金剛石も磨かずば、玉の光は現はさないのである。

偖寶石は天然に如何なる所にあつて、如何にして採るかと云ふに、大體二つの方法に分ける事が出來る。第一が山より堀り出す法と、第二が川の砂中より拾ひ取る法とである。

金剛石は、昔しは重に印度にて川の砂中から拾ふたものであるが、後ブラジルと云ふ國では、川の砂の中から拾ひ出した。今では南アフリカにて、岩の中から堀り取つて居るものが大部分である。

青玉と紅玉との主なる産地は印度であるが、大部分は川の砂の中から拾ひ出すのである。

緑柱石も主に山から堀り出すので、印度ブラジル等は主なる産地である。

黄玉は歐州にも亞米利加にも多く産し、大抵は山から堀り出すのである。水晶も諸國に産し山から堀り出すのである。

日本は甚だ寶石に乏しい國である。金剛石は未だ發見されない。紅玉も未だ發見されない。青玉は美濃で川の砂中から拾ひ出すものがあるが、惜し

い事には形が小くして、且つ色が美はしくないから、寶石としては價値がない。綠柱石は美濃近江三河常陸等から出るが、此れも色が淡くして寶石としては、價値が少い。黃玉は近江で主に山から掘り出し、美濃では主に川の砂中から拾ひ取りて、少からず產出をする。然し日本の黃玉は色が黃でなくて、無色のものが多いのである。此れは充分裝飾に用ゐるに足るべきものである。水晶は、吾國では多く產し、皆山から掘り出すのであつて甲斐が最も有名なる產地である。此水晶も山から掘り出すものである。伯耆と磐城が有名な產地であつて、伯耆のものは色が濃紫色で、磐城のものは淡紫色である。煙水晶は日本では產出する所が極めて多いが、皆色が黑過ぎて裝飾にならない。寶石となるべき煙水晶は色が淡く、褐色でなくては好くない。色の淡きものは伯耆に少しは出るが、左程上等のものではない。電氣石と拓榴石とは、日本の諸地方に產出すれども、皆色が美はしくなくて、一として寶石とすべきものがない。

要するに日本で出る用に足りる寶石は、無色の黃玉と、水晶と紫水晶とのみであると云ふて可いと思ふ。

寶石を磨く事

天然に出たまゝの寶石は、光輝も少なく、美麗でないから、此れを種々の形となし、美麗に磨かねば寶石とはならない。

其の磨き上げた形には種々ある。ロゼットとか、ブリリアントとかいふ名があるが、要するに、勉めて內部の反射を强からしめ、可成光輝を放つ樣な形に磨くのである。

されば磨き上げたる寶石の形は天然に出たるまゝの寶石の形とは、全く異なるものであつて、天然の形では內部の反射の具合も惡しく、光輝燦然た

らざるものでも適當の形に磨けば、內部の反射と表面の光澤とが充分に現はれ、光が燦然として來る。金剛石の天然に出たまゝの形では美はしくないが、磨き上げたるものゝ目を射るばかり美はしいのは、實に磨き方の當を得たるによるのである。

寶石の磨き上げたものは、誠に天然の美と、人工の美とを能く組み合せて作りたる一つの美術品である。

寶石は石の中で極めて剛いものである事は前に述べましたが、此の剛いものを磨くには、甚だ剛い粉でなくてはならない。此れに用ゐる粉には種々のものがある。

金剛石は第十級の剛さであつて、此の以上の剛さのものがない。依て金剛石を磨くには、もとは色美はしからざる下等な金剛石を粉にして用ゐたのである。然し現今は、人造物にてカーボランダムと云ふ者が出來て、此の者は金剛石より剛いから、此のカーボランダムの粉を用ゐると云ふ事である。

其他紅玉青玉黃玉等を磨くに用ゐる粉は、カーボランダムの粉の他に、エメリーとて第九級の剛さを有する石の粉を用ゐるのである。

吾國では、昔より水晶等を磨くには、金剛砂と云ふ褐色の粉を用ゐた。此れは金剛石の粉ではない、柘榴石と云ふ第七級の剛さの石の粉である。金剛砂は剛さが第七級であるから、水晶までは能く磨く事が出來るが、第九級の剛さの青玉又は第十級の剛さの金剛石等を磨くには用ゐられない。

寶石の摸造

寶石の價が頗る高い故、下等品には此れを裝飾として用ゐる事が出來ない。依て人は其の摸造品を作る事を始めた。

其の摸造に用ゐる材料の大抵は玻璃である。此れは特別製の玻璃であるから、剛さも普通の玻璃よりは少しは剛く、光も普通のものよりは強くなる樣に造つてある。

又時には水晶にて造りたる玉を金剛石と僞はり、又無色の黄玉で作りたるものを金剛石と稱する輩も少くない。

世には摸造品が中々多いから、寶石を用ゐらるゝ人は能く注意しなければならない。

僞物の鑑定　昔は鑛物學と云ふ石の學問が開けて居らないから、僞物の鑑定には甚だ困難した。唯目の慣にて見分けるのみであるから、頗る危險なものであつた。

然るに今日では鑛物學が十分に進歩して居るから、疑はしき寶石を鑛物學によりて研究して見ると、忽ちに其眞僞を明かに知る事が出來る。

鑛物學上寶石を鑑定するには如何にするかと云ふに、剛さ、比重、光線學上の性質等、其他種種の方面より研究するのであるが、其れを一々説明して居る事は出來ぬから、極めて通俗の一つの方法のみを説明して止めやうと思ふ。

先づ第一に鑑定すべき寶石を取り、其の角にて水晶の表面を爬きて傷をつけ見られよ。水晶に傷がつくなれば、其の物は先づ寶石の部類であるが、傷がつかぬ時には、其物は大抵は摸造品であるから注意しなければならぬ。但のヲパルと月石は水晶に傷がつかない。又水晶、紫水晶、柘榴石は水晶に薄く傷がつくのである。

水晶に傷がついたら其物は寶石であるから、寶石として第二の試驗を行ふのである。第二の試驗は黄玉の破片を採り、其表面を鑑定せんとする寶石の角にて引き爬いて見られよ。若し傷がつかなけ

れば水晶、紫水晶、煙水晶、電氣石、柘榴石、綠柱石の類である。若し薄く傷がつけば黄玉である。若し能く傷がつけば其寶石は誠に尊き金剛石、青玉、紅玉の類である。

第一の試驗に用ゐる水晶と、第二の試驗に用ゐる黄玉とは、共に吾國にて產出するものであつて、價も安いから鑑定用として持つて居てもよい。

次の試驗はいよ〳〵金剛石の鑑定である。金剛石の鑑定には青玉を用ゐなければいけない。金剛石と思ふ寶石の角で青玉の表面を爬き、傷をつけて見るのである。青玉に傷がつけば此の物は大抵金剛石として誤りがない。

然し此の試驗は第一に金剛石の角で他のものを爬くも、實際は金剛石の方は少しも傷にはならないが、如何にも傷にある樣に思ふ故、通常の人は此の試驗をなす事を忌む事がある。第二に傷にしてもよい青玉を試驗用として得る事が普通には困難である。

近來レントゲン氏が、エキス光線を發見して以來、その應用が開け、寶石の鑑定にもエキス光線の力を借りる樣になつた。特に金剛石の鑑定には最も適當である。

鑑定すべき寶石をエキス光線にかけて見ると、金剛石は全く透明に見えるのである。玻璃の摸造品なれば、玉は黒々と現はれるが、金剛石なれば玉があるかないか分らぬ程透明である。

エキス光線の應用は金剛石のみではない。他の寶石も、種類によりてエキス光線に對し透明の度に差があるから、其の差によりて寶石の鑑定を大に助けるものである、透明の度の差は凡そ次の如くである。

　エキス光線にて殆んど不透明のもの

玻璃　綠柱石

エキス光線にて極めて僅に透明のもの

電氣石

エキス光線にて半ば透明のもの

水晶

エキス光線にて殆んど透明のもの

青玉　紅玉

エキス光線にて全く透明のもの

金剛石

人造寶石　鑛物學の開けぬ時には、寶石の模造品を鑑定するに大困難であつたが、其學問が進歩せし以來は、學問上其の眞僞を認める事は容易になつた。學問の應用は實に大なるものである。

然るに近來にては、更らに鑛物學が進歩し來り、其の應用として寶石を人工にて作る事を始めた。

近來人工にて寶石を造るには、決して玻璃などにて摸造をなすのではない。化學と云ふ學問で充分に寶石の成分を調べ、其の成分と同じ成分のものを以て人工にて堅め、寶石を作るのである。

されば人工で作つた寶石は、色も光も、成分も、剛さも、比重も全く天然の寶石と同じであつて、其他光線學上の性質でも、エキス光線に對しても、全く同一の性質を現はすのである。實に少しも變る所がない。唯天然に出來たると、人工にも出來たるとの差があるのみである。斯の如き人造の寶石は、容易に其人工なる事を知る事が出來ない。

人造寶石があるとあらゆる性質に於て、天然のものに一致して居る以上は、此の人造寶石を以て、人造なりと賤しむる必要はない。天然の寶石と同じく人造寶石として裝飾品に用ゐて貴ぶべきものであらう。

近來人造寶石にて、最も成功したものは紅玉であ

つて、盛に佛國で作つて居ると云ふ事である。

金剛石も人造にて造る事は出來たが、現今では意外に費用を要すると、無色の美はしいものが出來ぬとが缺點である。然し後には必ず美品を作る樣になるであらう。

鑛物學は、今では寶石の模造品の鑑定に應用せらるゝのみではない、進んで寶石の人造品を作る事にまで應用される樣になつた。

今後益々進步して世に得難き美しき寶石を、ドシ〳〵人工にて造る樣になり、此れを裝飾に用ゐたなら、サゾ美術に一大進步を與へるであらう。

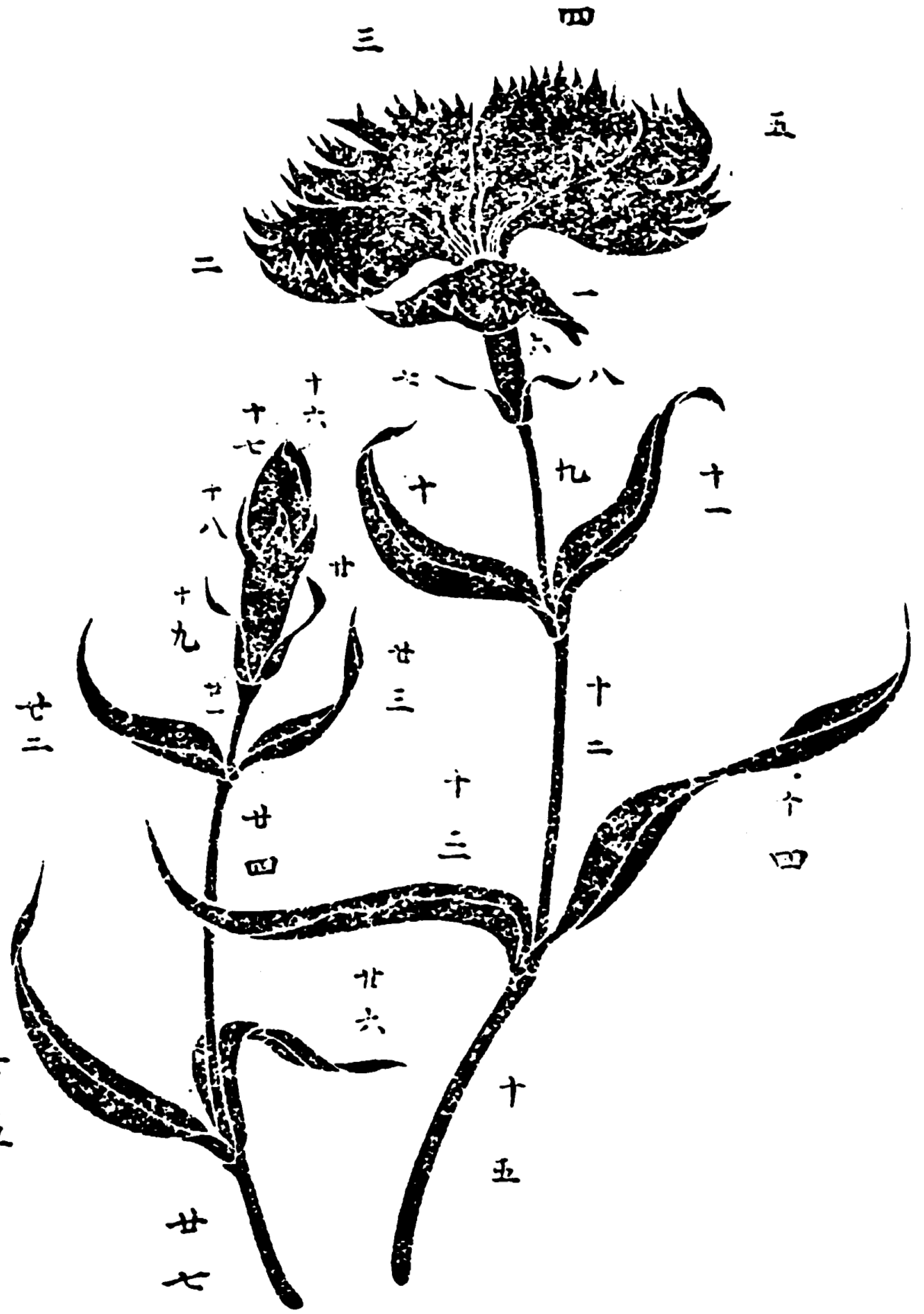
學問の進步は誠に驚くべきものである。（完）

和畫通信講義（第廿七回）

山崎彩峨

瞿麥は、其の種類、誠に多く、これを、悉く描き別くることは、いかにもくだ〳〵しくて容易ならず。たゞ、墨畫にては、色のものは、淡墨にて沒骨に畫き、點體あるものは、乾きてのち濃墨にて點を打ち入るゝか、淡墨にて（白色の花は）勾勒に畫くか、白色にして點體あるものは、其の部分を淡墨にて、沒骨に畫くかの二樣なり。葉莖は、淡墨を含めたる筆先に、濃墨を附して畫き、乾きてのち、濃墨にて、花心、葉脈を入るゝなり。

彩色畫にては、胡粉を含めたる筆先に、淡紅色のものは、臙脂、（點體あるものは、朱と臙脂とを和して、これを打つ）深紅色のものは、朱と臙脂とを和し、紫色のものは、藍紅を和して畫く。白色は、單に胡粉にて畫く。點體あるものは、胡粉の乾きたるのち、其の色にて斑點を打ち入るゝなり。花心は、胡粉、花粉は黃色にてときたる胡粉にて畫くか、または、花心花粉ともに、紅色にて畫くか、そはいづれにてもよし。葉莖は、藍黃等分の鮮綠色にて畫き、葉脈は藍か藍墨かにて入るゝなり。


一
二
三
四
五
六
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
廿
廿一
廿二
廿三
廿四
廿五
廿六
廿七



家庭改良に關する意見（つゞき）

磯部　武者五郎

次に衣服の改良につき一言せん、我邦人の衣服は現在のまゝにて不可なるは衆人の認むる所なれば、何とか改良すべきことは論を俟ず、然れども極端に變更するにも及ばざるべし、改良するには前に述べたるが如く風土、氣候、習慣、體質、經濟につき一々其の得失を考へ以上の諸點につき都合よきものならば、完全のものとし、不都合のものならば不完全のものと見倣し、以て改良を實行すべきことなり、

先づ衣服の種類には綿布、麻布、絹布、毛布の四種あり、我國の風土氣候習慣の上よりいへば綿布絹布、麻布の三種が適當にして毛布は適せざるべし、即ち我邦は四周環海にて雨量多き國なればつとめて身體の蒸發氣を發散せしめざるべからず、之れには衣服の重量を輕くし、洗濯するに簡便なる衣服を可とすべし、故に綿布絹布は尤も適當にして、夏季は麻布を用ふべきなり、毛布は價も高くして洗濯に便ならざれば不適當なるべし、然るに近來男子は洋服を着するもの日に多きを加へ從て毛布を用ふること愈多くなる傾あり、これは大に理由あることにて、余も男子の服裝は洋服を可とし、往く〳〵は男子は洋服を常服と爲すべしと思ふなり、其の故は社會の進歩に從ひ業務の繁雜に赴くは當然のことにて此の業務の繁雜なるに處しては洋服を以て尤も便利と爲すべし、從て

業務の捗取ることを得べければ即高價なりとするも、一方に此の如き大利益あることなれば經濟上洋服を採用すべきことゝなるなり、且又本邦人の體質孱弱なるは從來坐業坐臥の習慣が與りて力あるべければ自今は活潑にして敏捷なる様に爲し、立業立倚の習慣を作りて體質の改良を圖ること肝要なるべし、故を以て男子の衣服は洋服を可とすべければ勢毛布を使用するに至るなり、されども綿布若くは近來新に織り出す反物にて洋服を作ることを得るに至れば誠に完全のことならん洋服は男子の服としては形狀に於ては完全なるものなれども毛布を用ふることは先づ我邦人には適せざる方と知るべし、

女子の衣服に至りては綿布、絹布の類を以て適當とすべく、毛布は重量ありて通氣あしく、不適當なるべし、只從來の衣服は形狀甚不適當なれば之を改良することは目下の急務なるべし、之を改良するには經濟上又業務上の便利を圖り、兼て女子の體質にも適當せることを考へて作るを旨とす改良の方針は帶を狹くすることゝ袖を廢すること、衣と裳とを別にすること、等が重なる要點なり、近來改良服追々世に出で種々の服裝を見る中に山根氏の改良服と渡邊氏の改良服とは先づ適當なるものなるべし、

次に住居につきて一言せん、是亦我邦の風土、氣候、習慣、體質、經濟上の諸項を考へて其の改良を圖るべきなり、風土、氣候、及び經濟上につきては從來の木造家屋を以て尤も適當にして且完全せるものとすべし、即 我が邦四周環海にして雨量多く且溫帶中にある國なれば通風換氣の尤も良き構造を取るべきを以て 即 木造にして窓なくして開放せる建築を可とすべし、且又木造家屋は、

煉瓦、石材を用ふるに比すれば廉價なるを以て經濟上にも適當とすべし、但室内の裝置は宜しく從來の疊を敷くを廢し、椅子、長椅子等を用ひ座することを止めて立ち倚る習慣を作ることに改むべし、故に住居の改良は木造家屋を本體として西洋的の裝置を折衷するを以て適當となすなり、但官衙公會堂、其他特別なる建築物にして堅牢を主とし或は美觀を主とするものは煉瓦、石材、鐵材等を用ふるは當然のことなるべきも、吾人通常の住居は木造を本體とする改良法に據るを適當とすべし、但從來の家屋の中尤不適當と思ふは天井の搆造なり、天井は袋の如きものにて通氣なしく天井裏に空氣腐敗し汚塵積りて衞生上には餘程有害の搆造なるべきを以て天井の搆造を改むるは尤も必要ならん、

以上は衣食住の改良に關する意見の概略を最も簡單に述べたるものなり、尚其の詳しき意見は追々述ぶることあるべし、

（終）

通俗家庭の栞

土肥半次郎

●亭主の逆境と主婦の義務●

△我が亭主逆境に陷り進退維れ谷まるの場合に際せば、二世を契りし女房の義務として格別に亭主を慰籍鼓舞し、以て其の痛く衰ひ挫けたる氣力を盛り返し、二度の蕾を着けさするに盡力せねばならぬ。

人間は時期と場合に依つて榮枯盛衰必ずしも一定せぬ。然れば今ま逆境に處して憂き目に遇ひつゝある人にても、何時また埋木に芽が生へて瀬に浮ぶ便なしとも限らぬ。

方今世俗澆季に、人情浮薄に、人生の一大轉機たるべき婚禮の如き之を見ること甚だ輕く、剩へ近頃は政略的結婚とか、商略的結婚とか申すさへ流行し、妻を擇む者茲に於てすれば夫を擇む者亦た茲に於てし、眼前一時の虛榮に迷ふて深く前後の分別もなく、夫と呼び妻と呼ばれつ。軈て一年二年は何心なく夢又た夢と打ち過す內、不幸にして家勢一轉漸く孤城落日の運命に接着すれば已れ女房の分際として早くも――金なくば何の已が亭主かな――の體度を極め込み、終に其の末見込なきを名として緣の撚を解き戾さんとするに至るは、世間其の例に乏しからぬ。

機も織りましよ、手鍋も下げましよ、――此の意氣あり此の覺悟あり、始めて人の媳たることも出來、人の妻たる事も出來るではないか。さるに今現に義、生死相渝らざるべき亭主の不運なる位地に陷りつゝあるを慰め勵まし、力の及ぶ限り心の屆く限り、共に回復の道をはからんともせで、却つて亭主を無能呼はりし、自ら愛情の手綱を振り切つて尻に帆掛けて逃げ出すなんど、了簡違の骨頂である。昔し英の敎法家リチヤード、バックステルは其國敎に從はざる爲め、一生政府の迫害に逢ひ、東漂西泊一日も寧處なく、非常に轗軻淪落せしが、其の女房たるチヤーロトンは、此を物の數ともせず、常に滿腔の熱愛を以てバックステルの渾身にそゝぎ、其の後更に獄に投せらるゝに及び、矢張り自身之に附き添へ、力の及ぶ限り慰籍の道を講じて、其の忍耐心を鼓舞し、終に首尾よく寃を雪ぎ、獄を出で、靑天白日の身とならしめた。其の時バックステルは人に語つて「吾が妻は平生如何なる場合に於ても吾に疎かならず、併し我が獄中に呻吟せる際は、殊に我に親切なりし」と

云ふた事がある。又た獨人ジルゼンドルフが、其の妻を稱揚して、「我が危難に逢うや、未だ曾て怨嗟せざるのみならず、能く智を用ゐ我を助け、困厄の中より頭をあげしめたり」と云へるを見るも女房の亭主に於ける眞の愛、眞の情は、實際非常の場合に於てこそタノミにもなりチカラにもなれ、何不自由なき時代に無意義なる一顰一笑を弄し、濫りにお爲ごかしをやるは却つて痴に似て見苦しさの限りだ。

之を要するに夫婦の誼は正に連理の枝である。比翼の鳥である。而して夫の光は妻の光である。妻の擧は夫の擧である。然れば其の祝福の時代に於て、互にワリなく樂を頒つが如く、矢張り調子の惡しき場合には、手足龜なす冬の晨背に玉流す夏の夕、機をも織り手鍋を下げ、以て辛酸苦楚を甘んじ、近き將來の回復を期せねばならぬ。况や世には太公覆水盆の故事さへあるものを。貧を以て人間の逆境の如く思惟するは、大なる心得違である。人生に百年定命なきと共に、貧富固定の分數がない。彼の富貴榮耀に居る人も、心一たび驕慢を萌し、而して後遊惰し、而して後奢侈し、而して後濫費すと云ふ場合まで推し落つれば、最早船底一枚の外に破産の惡潮は襲ひつゝあるではないか。恰も之と正反對で、如何に貧の極度に苦めばとて、其の精神さへ確實にて大に發憤し、大に勤勞し、大に節儉し大に貯蓄したならば、相應の身代はイヤデもオウでも造り上げらるゝ仕宜である。

然れば貧は富の階段又た富は貧の首途であると、廣い度胸を据ゑ付け、深く物の順序本末を考へ、決して自暴自棄してはならぬ。然るに家庭の司命者たる主婦にして、貧すればとて鈍に陷り、朝か

ら晩まで頭痛鉢巻に、天下の苦虫を一人で喰ひつぶしたらん如き權幕を粧ひ、亭主の氣力を慰め勵す所か、己れ自ら火索とあつて狂風斷へず庭上に荒び、濁浪常に閨中に激するの失態を誘き、果は辛棒も忍耐も叶はず、連理比翼の情誼をあげうつて離縁さわぎの噂を立つる如きは、實に有爲ある新日本的婦人の資格なきのみならず、極言すれば犬猫を距る餘り遠からぬものである。寄語す、天下逆境の家庭にある主婦よ、御身等は常に最も平靜に且つ最も貞淑に、決して眼前の小利害、周圍の幻影に惑ひ迷はず、只管着想を遠大にし、ジルゼンドルフの細君を學び、バックステルの細君を學び、以て亭主の良參謀たり、以て家庭の大黑柱たり、千辛屈せず、萬苦撓まず、終に最後の勝利をかちえて、系圖の光たり舅姑の光たり、夫の光たり子の光たることを、専ら心掛けねばならぬ。

女禮心得草（七）

日本女學校禮節助教授　大谷喜代子

前にも申し上ましたとほり、上中下の差別のない、小笠原といふ私立禮式を御まなびの方は、早くおやめなさい。然してよろしい敬師さんについて、お習ひなさいまし。

○つぎ〳〵の禮

前條にのべました、最敬禮よりつぎ〳〵の仕方は普通には、

◎同輩の禮といひますと、手をつきますのに、四五寸ほど左右の指先と指先との間をあけます樣に、少しも肱をはりませんで、手をつきまして、頭もたゞみより五六寸はなるゝほどにして、禮をすると、きめてあるやうです。

◎下輩のとしては、兩手を膝のわきにそつとつき

ますのみで、たゞ少しからだを屈めて禮をうくるのときめてあります。

◎同じ下でも、ごく輕い者には、片手を膝の側におろしたのみで、おろすといひましても、指の先そのみつくものときめてあるやうです。

○色體の事

色體の事とありますと、此心得を敎へる敎師さんがないやうです。そこで少し申して見ませう。うやまひます人の前では、いかにも深く、我身をへりくだりますのが普通の事ですが、あまりに式退すぎますと、かへつてわるいのです。たとへば、敬ふ方がこなたへと申されます時に、三度まではおことはり致して、下座に有るがよいのです。三度よりもおほく申されましたらば、ともかくも仰にしたがふのが、古しからの定めであります。

産所式

東京女學館講師　有住常子

出生の小兒に名つくる事

男子女子出生の時、七夜に童名をつくるなり、

出生の小兒祝の日の事

祝の日の事は、七夜の祝ひのみにあらず、初夜三夜五夜の祝あり、其後に七夜、後七夜、又七夜の祝あり、五十日、百日の祝あり、それより御湯始、御着衣、御宮參に至る種々の御祝あるべし。

出生の小兒に進物の事

小兒出生の時、他より進物あるべし、男子女子によりて其物をえらぶべし。

着衣の事

着衣といふは、小兒はじめて衣服を着する祝ひ

り、此日小兒をめのと抱きて座敷へ出て、産着をきする女は別に出て、禮をなすなり。

右の如く一禮してのち、座を立ちて、産着を廣蓋にすゑて持て参り、中座してまつとき、めのと小兒をいだきながら、吉方へ向はせ申すなり。此時廣ぶた持参りて、御むつぎをぬがせ申して、下着どうぶぎをめさせ申すなり。

扨このゝちむつぎを廣ぶたにすゑて、持ちて退くべし、右の如くうぶきぬをめしをはりて、御祝の膳部を出すべし。

だいどころ

割烹學校講師　石井湧太郎

一、なまりぶし、

此の頃は大分魚屋に、なまりぶしが見える様ですから、其の調理方を載せませう。大概諸家では細かに崩して、大根卸しに醤油で食するか、或は、煮付て食しますが、一寸客には出せません。左様かと申して茶碗物に仕立るのも面白くない、其の時には、少し手數が掛りますが、左の調理方を以てやつて御覽なさい、誠に奇麗で味が大層よろしくあります。然して目新しい仕方です。夫れは先づ、成る丈け上等の大きな、なまりぶしがよろしいので、それを熱き湯で洗ひまして、上皮の汚れた部分を薄刃庖丁ではぎとり、血肉の所は用ゐませんで細かく崩すのです。之れを大根卸しと醤油とで食せば、通常の使ひ方と同じです。其所でその崩しましたのを擂鉢でよく〳〵摺り、玉子と葛粉とを入れて、少し鹽氣も付けて、團子の如くに丸めます。水氣が少ないと丸まりませんから、水を入れて、其れを丸めて崩れぬ様にかげんをしなけ

れば不可せん。其の團子の如く丸めましたのを、母指の頭で輕く押ます、母指形を付けて置き蒸籠へ竹の皮を敷きて蒸します。それの蒸し上る間に黒胡麻を煎りて摺鉢ですつて、並味噌の裏漉したのと合せて小さき鍋に取つて、砂糖、味淋、水等で甘味に鹽梅して、火に掛けて錬ます。之れは敷味噌がよろしい。皿へ右の味噌を敷きまして、其の上に、蒸し立のほや〳〵を上せて出します。

附手輕西洋料理

六月献立並ニ仕方

一、肉湯プリヲン、
二、小鯛エラクリーム、
三、豕肉カツレツ、油揚馬鈴薯添ふ、
四、鶏煮、米飯添
五、サラード
六、浮島、フローチング アイランド
七　橙苺ストロベリー

一、肉湯プリヲン

牛肉及び骨三斤を切り砕き、冷水七合に入れ、文火にて煮る事大凡五時間にて、鍋を下ろし、肉及び骨を除き、浮びたる油を匕ひ去り、之れを鹽及び胡椒にて風味するなり。

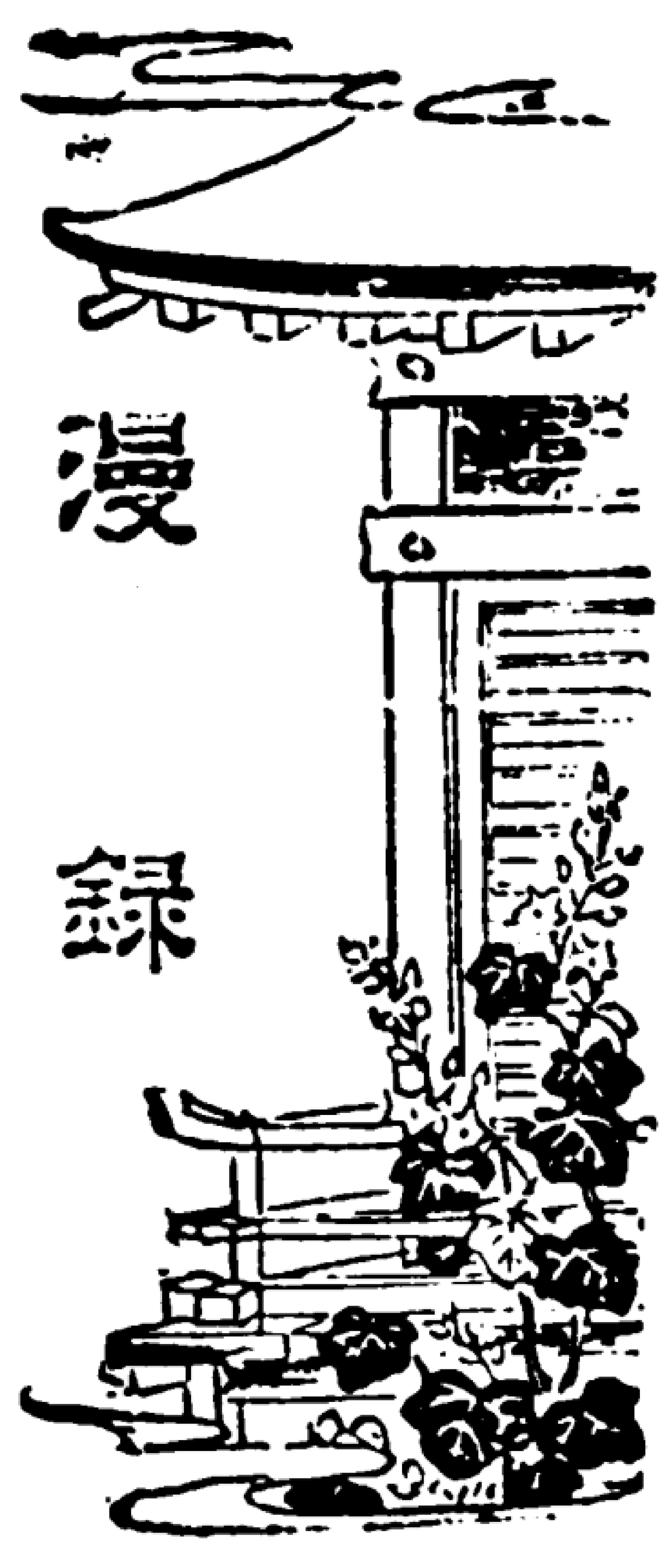
二、小鯛エラクリーム

鹽水にて小鯛(其他の魚にてもよし)を煮、骨及び其の皮を去り、之れに二合の牛乳を熱し、少しのバター及び大匕一杯程の麥粉を加へて、能く練り合せ、旱芹菜と玉葱の細片少々を加へ、鹽及び胡椒にて風味を付け、再び火に上せたるものを掛けて供するなり。

三、豕肉カツレツ油揚馬鈴薯添ノ

豕の頸肉(脂肪を除く)を薄切りにし、溶きたるバター と、麵包粉とを衣として燒くなり。又は豕脂にて油揚しても良し。大七四五抔の酢と八九抔の肉湯とを熱し、麥粉の濃くしたるものを掛け、之れに馬鈴薯を細長に切り、油揚したるものを添へて供すべし

(以下次號)



漫録

皇祖皇宗の御德

日本女學校講師　下田義天類

私は、勅語に「皇祖皇宗の國を肇むること宏遠に、德を樹つること深厚なり」とある解釋を、較もすれば世人は、片寄つた解釋を致しまして、僅かある御德をツヲまへて、大體の御德とするものがあることに付いて、少しお話を致したいと思ひます。

から云ふ六箇敷い問題が出ますと、面白いことは少ないか知れませぬが、面白い事は、とかく實の少いもので、人の聞きたがる話には實が少い。厭がることの實が面白いと申します。古いお話に、彼豐公に事へて居りました曾呂利新左衛門は、常に豐公の氣に入りであつた。此人の話には面白い材料も澤山ある中に、或時豐公が「何ぞ面白い珍らしい話はないか」と云はれると、「御座ります。其は今日私が登城先で、奇體なものを見受けました。其はキウリがマクワ瓜を喰つて居りました」豐公は微笑致しまして「胡瓜が眞桑瓜を喰ふとは餘りトボケた話だ、ドンなことを遣つて居つた」、

「御不審なら御覧なさい」と豐公を引出して、御城の外を見せましたら、八瀬小原が荷を卸して休みながら、眞桑瓜を喰つて居りましたから、曾呂利は豐公を顧みて「アレが木實で眞桑瓜を喰つて居りませう」と言はれて、豐公一言もない。成程キウリ(木實)が眞桑瓜を食つて居るのである。豐公大變に機嫌が克く「貴樣の話は、イツでも眞實のことを言つたことはない、何時でも人を笑はせるが、眞實の話を聞かせよと云はれて「へエ、是れも昨日登城先で、十二三の貧乏人の娘が、何處へか使に行つて、油揚を繩の先に下げて參りました。其を私がジッと見て居りました」と、妙な話だから「其が何した」「其處で空中から鳶が來て、其油揚を攫つて行きました」「其か又何した」「其れぎりで御座ります」「其ぎりじや一向ツマらんじやないか」「眞實の話は如何も此通りで御座ります。面白い話と云ふたらば、何處ぞに綾のあるもので、眞實の話を致すと其綾を取りて仕舞ますから、面白味が無くなるのであります」と云ふた(是は豐公に油斷をするな、と云ふ偶意であると云ふ說があります)世の中に面白いと云ふたらば、何處ぞに何か當てにならぬことがある。其は善き事柄が果して面白くないと云ふ理屈ではないが、極つて居る事、即ち見慣れたこと、聞き慣れたことは面白味が少い、幾ら面白く結構なことでも、其が餘り過ぎますと慣が來ます。慣が來ますと面白味が無くなつて仕舞ふ。毎日〳〵御馳走が出ますと、御馳走の甘味が無くなつて仕舞ふ。イツも不自由な處へ、偶ま立派な珍味を食しますれば、變つて居るから甘味を感じます。其で幾ら身の爲になることでも、又結構な書物なやうなものでも、其が度々になつて慣れますと云ふと、頓と興味が少く

なつて來る、今こゝにお話しやうと云ふ、皇祖　皇宗の徳を樹つることと深厚なりと云ふやうなことも、世間の人が、其徳の中に浴し切つて居りますと、其徳に慣れて徳を徳と思はない。水中の魚は水を知らぬと云ふが如く、空氣中にある人は、空氣の徳を知らないと同じである。故に較もすると、小さき徳を稱揚して、大きな徳に氣が付かないものがある。暗夜に提灯を借りたことは喜ぶが……喜びの餘りに蠟燭まで添へて禮に行く……然るに月に對して喜びを述べるものはない。是は大きな徳に浴し切つて居りますから、結構な徳と思はないのです。大煩でもして、而して愈くでもなりますと、快氣祝であるとか云ふて、御馳走をして人を招きなどするは、醫者とか藥とか、大きな金を遣つて心配を爲た結果を喜ぶのである。其れに引換へて、金も遣はず、心配もせず、藥も飮まずして達者で居るものは、達者振舞をして、祝を爲たことはない、是亦平生の事だと思つて居るから、達者と云ふことに何も感じない。世の中の事は何も多く然うでありまして、東京で名高い川開きなんどは、一瞬間の花火を弄んで居る。兩國で打上げた所は立派ですが、ドンと云ふ中にパッと消えてしまふ。然るに其よりもモー一段美しい、滿天皆花火の如き立派なものが連ッて居る。彼空中の星の光を見て、誰も玉屋鍵屋と云ふて擧めた人はない。彼兩國の花火は、五分間經たない内に消えるが、終宵消えもせず、落ちもせず、……アノ位立派なものはない……其星に對して、賞讃を致す人はない。是皆慣れて居るが爲に感じが薄い。面白味が少い。遂には善いことは耳に聞くことが厭になる。畢竟は慣るゝと云ふことは、一番人に取つて、善

からぬ道へ流れ込む始である。

世人は我が　皇祖　皇宗方が、或は高臺に上らせられて煙を望まれたり、或は寒夜に御衣を脱ぎなさつた等の御徳を稱揚して居るが、是は一時の御徳である。其よりも永遠に渉つて居る御恵は、數限りもなくある。其を見出す人は少い。

私が今お話ししやうと思ふのは、第一に火と云ふことに付ての世界の有様です。御承知の如く、支那でも火食を知りましたのは、世が始まッて大分經ッてからで御座ります。歐羅巴あたりの、彼イスライルの時代の人は、多くは火食の道を知らなかッた。其れで、火の効用を能く知つて來たと云ふは、日本人などに比べますと、大變後で御座ります。皆様は火に由つて快樂を取り、健康を保つて居る。その食ふところ質に容易ならぬほどである。口に甘いものを喰ふのも火のお蔭である、火が無かつたなら、御膳を米で食べねばならぬ。第一鹽、味噌、醬油がない。食物に味を付けることが出來ない。火が無かつた時には、野菜を喰つた所が、生で噛るより仕方が無い。其から、他方では、着物を着ることも、家を作ることも出來ぬ。此立派な家に住まつて居ると云ふことは、全く火と云ふものゝ効用が大部を占めて居る。然るに、此火は常に有るものだから、その大恩は何の感じも有ッて居らない。

（未完）

女子服飾の沿革（承前）

椎園信成

今回は、大寶令にて御定めになりました衣服の制度に就て、一寸記することゝいたします。既に皆さんも御承知の如く、太寶と申すは、第四十二代

文武天皇の時の年號でありまして、今から千百五十余年前の事で、此時に百般の制度をお定めになつて、天下に發布せられた、これを後世大寶令と申すのであります、此天皇は御英明の御方で、何でも國家を治めてまゐるには、秩序と云ふことが第一である。其秩序を保たしむるには、制度と云ふものを一定しなければならぬ、と云ふことを御考へになりまして、位に即かるゝと、直に刑部親王及び藤原不比等などに命じて、孝德天皇及天武天皇の御時と兩度に、御定めに成た制度を改定せしめられた。此二人も中々えらい人でありましたから、親ら編輯の主任と爲つて、唐土の法律制度を參考して、漸く大寶元年に至りて完成しましたから、これを律六卷、令十一卷として天皇に奉上した。天皇は大に歎賞せられ、翌年天下に頒布し、殊に明法博士を國々に派遣いたして、之を講釋させ、普く庶民に其意を知らせて、何事も此意に服從しなければならぬ。又百官もこの意に從つて政をいたさねばならぬとの命令を下されました。これが即ち今云ふ所の大寶令であります。

扨て此令の中に、衣服令と云ふものがある。これが即ち朝官の衣服の制度であります。此令が發布になりましてからといふものは、從來複雜を極めて居た處の衣服も、全く一定する樣になりました。左に此時に定められた、禮服、朝服、製服の三種に就て記しませう。

一 禮服

禮服と申すは、今の大禮服であります。これは朝廷の大祀（大嘗會の事なり）の時、及び元日の節會に列する時、五位以上の位を持て居る人が着用する服であります。併し官位の高いひくいに依て、服にも差違がある。即ち同じ女官と申し

ても、内親王、女王、内命婦、と三種に別てありまして、夫れ〳〵相違があります、先づ内親王の御服より歴次申しますれば、

○○○○内親王禮服＝一品（親王の位は凡て何位と云はずして何品と云ふ）内親王の禮服には寶髻（頭髪の部に記載せん）を頭に頂く、四品以上は品毎に、其制にも階級があり、衣服も品毎に少しの相違はあるが、概して深紫の衣、蘇芳深き紫の紕帶、次に淺き綠の褶、蘇芳深き淺き紫綠の纈の裙をつけ、足には錦の襪（靴の下に着する足袋なり）金銀を以て裝飾となしたる綠色の革靴を用ゐます。

○○○女王禮服＝一位は、禮服の寶髻（五位以上は、位階毎に各々別制あり、内命婦も之に準ず。）服は深紫の衣、五位以上は皆淺き紫の衣を用ふ。其他の女王は、内命婦の服制に準じて居ります。但し褶のみは内親王と同物を用ゐます。

○○○○○内命婦禮服＝一位の命婦は禮服の寶髻、深き紫の衣、蘇芳深き紫の紕帶、淺き纈の褶、蘇芳深き、淺き紫綠の纈の裙、錦の襪、綠の舃（金銀を以て飾る）三位以上は淺き紫の衣、蘇芳淺き紫、深く淺き綠の纈の裙、此他の物は一位の人に准じて居る。四位の命婦は深き緋の衣、淺き紫、深き綠の紕帶、烏舃（銀を以て飾る）五位の命婦は、淺き緋の衣、淺き紫、淺き綠の紕帶、其他は上に准じて居ります。（外命婦は夫の服色に従ふ）

二朝服

朝服と云ふは、百官百司の人々、朝廷の公事の時に着用する服である。今日に例へて見ますれば、男子が着する、燕尾服が古への禮服で、フロックコートが、丁度古の朝服に當るやうであります。

一品以下五位以上は、寶髻及び褶、錦の襪、舃を去つて、此他は禮服に同じである。六位以下初位以上は、幷に義髻(俗世稱するカモジなり)を着け、色は何れも夫の服色に准ずるのである。深き淺き緑の紕帶、縹の纈の紕の裙(初位は纈を去る)白き襪、烏皮の履、四孟に之を服するのである。

三制服

制服と云ふは、位がなくして、朝廷の役をつめて居る人、及び、庶人の朝廷の公事に參列する人々の着用する服である。

宮人は、深き緑より以下、兼て着用することが出來る。(紫色は禁じたるも細帶などに用ふるは共細の事故聽す) 緑 縹 紺の纈(緑、縹、紺、の三色を交へて纈とする事を得す) 及び紅の裙、四孟及び尋常に之を服します。若し五位以上の女は、父の朝服の色は禁ずるけれども、以下の色は通はして

之を服する事が出來る、其庶女の服は、無位の官人に同じである。

之が即ち大寶に御定になりました、衣服の制度であります。此の制が立ましてからと云ふものは、官人の衣服は、全く一定しました。朝廷からも、此當時は屢々令を下して、違背する者のない樣に、注意し、萬一此制に背いて居た者が在つたならば、直に彈正臺、或は式部省に拘引して、譴責を與へ、事の重さは相當の罪を科せられた。かやうな工合でありましたから、此制もよく行はれたのである。

併し無位無官の者になりましては、此時に何の沙汰もなかつたばかりでなく、他に少しも書いたものが御座いませんから、一體如何なる服を着て居りましたか、少しも知る事が出來ません。これは

我々の大に遺憾とする處であります。

卯花垣

小畑いく子

春は曙、秋は夕といひならひつれど、卯月ばかりの夕暮こそ、また捨てがたきふしいと多かれ。藤、躑躅、棣棠、芍薬、牡丹、杜若なんどとり〳〵めでたかれど、わけてゆかしき若楓、露もこぼれん風情こそ秋の錦ものかはとそおもはゆる。まして夕風わたる川邊の樗ゆかりの色のなつかしきに岸の胡蝶花なよ〳〵とゆらめくさま、いづれをかしからぬぞなき。

さはることのありて去年よりかりに移り住み、咲き散る花をもよそに過し來つる此夕つがた、そら耳あやしき郭公の、たど〳〵しき一聲にはしなく誘はれ出でゝ、胡蝶を慕ふ稚兒ならねど、けしきを追ひて、そこともなくいつしか家居遠くも來にけらし。

里の小川の流れこそ、不絶清げに見ゆれ、姿を映す岸の梢、四季をり〳〵の裝ことにして、鳥のねぐらもあはれに寒さげの夕もあり、または、花の姿なまめかしき朝もありき。其花かざしいつしかうつろひはてゝ、若葉小くらき今日此頃の思ひやいかに、汀の杜若今を盛りと時めきぬれど、春はいかなる色にやわりけん。同じ綠の野邊の草、秋は種々の錦とや咲きわけなん。人も草木もつゆかはりなき世のならはせなんめりと、思ひしりながらも、猶うき身をかこてるゝぞはかなき人心になむ。

物おもへば、こと〳〵にあはれの種ならぬはなし。さりとて慰まぬにしもあらねば、猶わけゆく

彼方、一むら小ぐらき木立の内に、妙なる調もれ聞ゆるこそいぶかしけれ。暮るはおそき野路のならひ、たどり行けば見る目あはれに心ぼそげの襖の門、這ひまつはれる蔦かつらは、かたぶく軒をつなぐに似て危く、壁は落ちて燈光庭もせを照したり。まばらに結へる卯の花垣のみ時を得顔に、雪か月かと咲き匂ふこそまたなくあはれふかし。かゝる住居に此妙なる糸竹の音、物語めきてゆかしくもまたあはれなり。



何のたづきにかくてはと、ほどちかくよるまゝに、またしも調べそめしは組歌の、

「ゆかりよしある初草の、若菜の上を見つるより、いとゞかはかぬ袖の露、猶うきまさる旅寝哉」

節にあひたる若菜の曲、かきあす爪音、笛竹もいづれ劣らぬ非凡の調、いかなる人の

侘びますらんゆかしやと、燈火もるゝ隙よりかひまみれば、琴のあるじは處女にて、雪はづかしき其面に、つくろはぬ黒髮のちりかゝりたるも、わざとならずなまめかし。笛もたるは、四十ばかりの客人ならんとは、けはひにしるかれど、通ひて見ゆるは姉君か、それにはふけたり。叔母君にもやあらんずらん。屏風だつものに隔りてさだかならねど、奥まりたる方には病める人のありとおぼしく、枕のあたりにつひ居けるは、七十年ちかきこの處女の祖母君なるらん。折〳〵屏風の中を見、また二人の方を見などして、老の身の忍びがたきか。はや袂ぬらし居給ふめり。

あはれの御事や、何人ならんかし。いでや一曲終りなば、案内もとめてことのよしをも聞かまほし。など思ひけるをりしも、燈火照らして家のもの、吾跡慕ひ來にけり。人里離れし此あたりに、暮れはてゝのそゞろきは便なし。と、たしなめられて、始めて心付きぬ。立よれる籬の卯の花のみこそさやかなれ、夕陽に染めし空の紅、いつしかあせて、月さへあらぬころなれば、只星の影のみきらめきて、あやめもわかず、ものすごさいふばかりもなし、常のものをぢに似もやらでと、俄にうしろ見せらるゝもをかし。こと問はんは今宵にかぎることにしもあらず、また夜陰におどろかし參らせんも禮なきわざなんめり、明日こそと、心殘して歸らんとすれば、ものゝ音いよ〳〵妙にして、

いつしかに汲み初て、くやしと聞し山の井の

と、ます〳〵興ふかうなりぬ。また止まらんとするを、やをらみづから急ぎたちて、歸途にはつきぬ。岸し胡蝶花、杜若も暗にそれとはわかねども、三ッ二ッ先だちて行く螢のかげさへ、めづらし

き彼人〴〵にゆかりある心地してなつかし。ふし床に入りてもいもねられず、彼人々の上かに角とおもひつゞけて、夢にさへ入りぬ。つとめて起き出で、硯にむかひ、ゆくりなくも妙なる御調べ聞き參らせてより、いかに偲びておはすらんかは知るよしなけれど、何となう御なつかしさやるせなし、もとより世に捨てられし身の、なみなみの人交らひせんとも思はず、中々にみをいとひてこそかくは籠り居るなれ、されど〳〵、あまりにうき世をよその御ありさまの心にくきまで御ゆかしく、ぶしつけをも顧るのいとまもなくてなど、こま〴〵文にものして持たせやりつ。待つまもあらず、使は歸り來りぬ。御かへりごといかにと、胸さへおどる心地して、押しひらき見れば、紙こそいたう古びたれ、あではかにゆゑづきたる手もて、文の詞はあらず、只一首の和歌をぞをかしくすさびかき玉ひける。

よそめにはさもあらばあれ此處も又
世をうのはなの垣根なりけり

あをば(二)

藤の舍主人

◎緑したゝる青葉の蔭に、しばし汚れたる俗腸を清めんとて、上野谷中あたりを逍遙し、たそがれ近く池の端を通りけるに、一群のえび茶式部の君に出遇へり。何事やらむ、かたみに言かはして、時々は片ことまじりの洋語をさへ交ふなる。はては、目くばせし、つきじろひつゝはゝゑめるさま、たゞごとならずと覺えたり。かなたには、四五人の愛らしき少女の、鐵道唱歌うち誦んじて、あどけなく戲れたる。なにがし法師の歌ひけむ、蓮の

葉の濁にそまぬ心根のゆかしく、ふたがりし胸も忽ちすが〳〵しうなりぬ。げにや、その清廉潔白なる、梅の色香、富士の白雪にたとふるも、なかなかに愚かなりや。かくて、湯島天神に詣でむものと、歩みを速めて、切通しの阪にかゝりつるが、あなあさまし。かたへの赤き暖簾さげたる家より、紫の袴着けたる女學生とおぼしき二人連、おはらかにふるまひて出できませり。をりしも夕日花やかにさして、彼等の半面を照し、顔はもゆるが如く、眼はうるめり。さすがに立止る人目を恥かしくや思ふらむ、下見がちにさゝやきながら、下谷の方へと過行けり。無智文盲の婦女達ならむには、さる方に、少しは罪ゆるさるれど、それだにめやすからざる業なるを、かりそめにも教育あり望みある姫達の、かくてはと、その家庭の狀態のおしはかられ、通ひたまふ學舍もおぼつかなう思はれて、そなたをこそ凝視ゐたりしか。またもや、我心地は苦しう感じぬ。

◎貝原翁の女大學が、德川時代女敎の模範となりて、近世にまで盛んに行はれたりしは、翁の篤學と熱心に基くや論なし。ちか頃、梓に上る著書、年に幾百冊なるかを知らず、されど、概ね十把一束、讀むに足るもの曉天の星に似たり。其數の多きは必ずしも不祥ならず、寧ろ喜ぶべしと雖も、世道に害毒を流すにいたりては、實に恐るべく、憂ふべし。斯道に忠實なる人稀にして、たゞ金錢を貪らむが爲に、無責任なる文字を弄し、匿名又は他人の名を藉りて、世を驚かす類多しと云はゞ、人みなあまり極端なりと笑ふめれど、名も恐ろしき著述少なからず。一たび斬馬劍あらはれて、てる日光を失ひ、女の名に依て、おどろ〳〵しき書いでゝ、明月長へに隱れむとす。ア、明治の昭

代、又一人の益軒なき乎。
◎外形は能く人の心性をあらはすものとせば、衣服は尤も適當なる代表者也。而して、谷面の異るが如く、嗜好もまた其品を異にせり。見よ。田舍ものは大方質素にして、都の婦女は華麗の衣服を着するにあらずや。而も市町、村里の子女、山の手、下町の子女あるかは、服裝によりて、直に顕別せらるべし。昔と今との服裝を比ぶれば、啻に霄壤の差あるのみならず、老婆は地味を欲し、少女は派手を求む。俗地に近き人は、にやけたる風に染み、氣高き家庭に育ちたる人は、その着こなしどことなく品格を備ふ。すべて衣服は、時と處と事情との相違あるに從つて大別せらる。近年女學生間に於て、はでなる縞柄の流行し、滔天の勢遂に止まる處をしらず。是等はあながちとがむべきに非ざれども、徒に流行を追ひ、新奇をこのみ、藝人風を喜ぶものあらば、偶、わが意志の薄弱なるを示すと共に、やがて其浮きたる精神を表白するのみ、もとより、それぐ\ふさはしき縞柄なれども、毫も浮華の嫌ひなく、あまり地味ならざるものを撰ふべし。既に夏衣きかへつべきとなりぬ。其撰擇大に愼ざるべからず。



小説 四つ角

大庭楠緒子

小僧一人鼻歌うたひ去つて、會社通勤者の自轉車、二重外套の紳士を乘せたる二人曳とすれちがひて、しばし往來の絶えたる靜かなる邸町、み冬立

つ空を寒く淋しく蓋ふたる暮色、某別邸と聞えたる塀際の松の葉隠れ新月の眉を細く見せたり。同じ時刻に此處を通ふ宮井醫學士、けふも病院を遅くしまひて車ともいはず急ぎ足に横町を此方へ曲り、何をか思ひこむで傍目もふらず來かゝる後より、年頃は二十二ばかり細面のくつきりと色白く何處といひて難一つなき眼鼻だち姿格好、われで看護婦とは惜しきもの、名高き病院美人とはそれ彼れの事よと、通るたびに人毎にさゝやくは彼が事なりき。

それとなく早足に前なる學士を追ひ寄つて、

「先生、只今お歸りでいらつしやいますか、私先達て此區の方へ轉宅いたしましたので、

不意に聲をかけながら會釋するを驚きふり返つたる學士は

「オヽ、瀧野さんか、貴君今日は宿直ではなかつたか、

「はい、左樣で御座いましたけれど少々仔細が御座いまして鈴山さんに代つてもらひましたので、

と身にしむ北風に袖を縮めて、白茶色の肩掛しつかりとひき纏ひ俯き隠して同じく急ぎ足に從はむとする瀧野金子を、强ちにふりきつて先へともえいはず先年病院にさる醫士と看護婦との間に好からぬ風聞の立つてより以來、醫士と看護婦との病院外に親しくする事を固く禁せられし由朋友より語りきかされをる時、呵々と一笑に附し去りし學士は洒々たる我心に照して何をも後暗しとは思はねば、醫士の指揮に服して神妙に治療の手助けする看護婦なるものは、貴き慈善職の一と數へて卑しめず、その今年より始めて病院に試むる若き技量の、人の豫想よりは遙かに勝れたるをもさら

に誇らぬ謙遜と、彼れがその天性の優しき同情とは常に院内の人をして彼れに服従せしめ彼れを懐しからしむる種なりしなりき。

歩一歩先に立ちて進み行く學士は鬚ある美しき面を少し傾け、

「今日はとう／＼三人といふもの倒してしまつた、彼の腹膜炎のあんぞは余程見込があつたがあ、院長も非常に骨を折られたのであつたが、どうも衰弱が烈しかつたので、

「天命にはいかな御治療も叶ひませんのはどうも致し方がございますまい、と謎しむだる答、

「うむ、然し左樣は思ふもの、實に斯樣な日は不愉快でたまらむよ、自分の服藥させた病人の死期の苦痛はつまり自分の苦痛のやうに思ふからな、こむな度には何故醫者に爲つたらうと何時も後悔する、

「ほんに左樣でございませう、そう申せば今日彼のいけなくなりました十六番室の娘ね、大層可愛そうな身の上の者だそうで御坐いますよ、

「ふむ、そうかな、と存外に耳傾くる、

「私附添のものに委しく聽かされまして、つひ泣いてしまひました、

京橋の大きい小間物屋の總領娘だそうでございまして、神田のやはり大きくやつて居ります唐物屋へ縁談が整つて居りましたところ、

「ふむ、と學士は挾む、

「そちらの息子と大層な執心でもう輿入をするばかりになつて居りました矢先へ、不意と側から邪魔が入りまして理もなく破談になつてしまひまして、彼方の兩親の恩人とやらの娘がとう／＼義理を枷にして乗り込むでしまひましたそうで、ちやうどあの先生、唐物屋の門口へ嫁入

車を引き込みまする途端、此方では彼の娘が病院へ送られまする釣臺が小間物屋から出ましたんださうで、近所では戀煩だと申して氣の毒がりまするものやら笑ひますものやらで、まるで兩親は狂氣のやうになつて居りまするとやら、

「ふむ、其樣な譯があつたのかな、それは非常に氣の毒な、失望の結果あの樣な大病を惹き起したのであらう、それでとう〳〵あの通りに亡くなつてしまつては兩親が何樣にか歎いてゐやう、

「それは貴君ひと通りでは御座いませむそうで然し娘は疾うに死ぬ氣で居りましたのださうで、もう自分はこむな望のない世の中には生きて居らない、死にたい死にたいと申して、…………あの樣に先生の御骨折でございましたけれど、畢竟氣で自分を殺しましたので、

「非常な神經質の女であつたよ、

「それであなた先生、遣りました藥も飲みました擧動を爲ては、そつと手巾の上へ吐き出し〳〵して居りましたさうでこれでは御醫者樣へも何方樣へも相濟まずと、私一人でどの位氣を揉みました事かと、その附添の娘の乳母と申すのが泣き〳〵私に話しました、

「さうか、道理で服藥の感應が少しも無いと思つた、しかし實際氣の毒な女だな、

「あの先生、氣の毒とお思ひ遊ばしますか、

此處に至つて故ありげに金子は聲に力を入れたり、

いつか點火されたる、とある瓦斯燈の下に此時二人は歩み來けるが、擦れ違ひ樣に職人體の男の、

『こがるゝなんとしよ』と、

金子は頰を赤ら爲しつ、

「氣の毒といつてもよからう、して見ると失戀も非常な結果を來すものと見えるな、

と學士は總べて眞面目に杖を振つて寒げに歩めり、

「お聽き下さいまし、それと同樣なのが私の朋友にも一人御坐いまして、

又一人すれちがふ、今度は角帽の學生、じろ〳〵と二人の姿をながめゆくに、金子はちよつと口をつぐみて遣り過し、

「未だ死に切つては居りませむ、なに煩ひ附いても居りは致しませむが、もう〳〵煩ひつくばかりに健康の方には支度が出來きつて居りますので、

「やはりその、戀聟を他女に奪られたといふやうな譯でか、學士は少し微笑むで面白氣に問ひかへせり、

「なに左樣なわけでは、……まあ、社會の制裁と申すやうなものが邪魔をして居りますので、それでその思ひの丈をいひ出す事が叶ひせまむので、………

いひ淀むだる語尾の怪しく震へて消えたるを、學士は心附きて金子が方へ眼を轉じたれど、下向きたる顏の半は肩掛に隱して見せず、たゞ薄暗がりに耳の根の青白さを見るばかり、彼れは次第に聲を小さくなして、

「それでその常人の願は、やがて病み附きまして息をひきとりまする場合には、どうかして其思ふ人に一目逢つて此思を知らせたいと、たゞそればかり申して、………私まことにしみ〴〵可愛さうに思ひまする、

滅入るやうなる話頭と共に二人の歩みはいつのま

にか緩くなりゐき。學士は何をか思へる默りきつていはず、女の面は時のまに青ざめてこれをベッドの上に倒しゐば、さながら療法なき末期の患者かと思はれむやうに著るくやつれ見えけり、しばらくして學士、

「なにしかし社會はそれ程冷淡なものでもありはすまい、また一方に名譽とか地位とかいふものを捨てゝしまつたならば、なにも他の制裁に服さずとも好いんだらう、そいつは今の内に精神的の養生を施さむと、治らむぞ、

「はい勿論さやうで、

また默して一町ばかり、郵便箱の立てるほとり下宿屋の四ッ角に來りし時、學士はつと立ち止りて

「僕は此處から出るむだ、それでは失敬、

歩を轉せむと兆若き眉をあげて帽子に手をかけたるを、

まだ話し續けたき事の多くありて、道は猶遠く二人を分たしめざる事とのみ夢見る如く歩み居し金子は、驚きて均しく歩をとゞめ、

「あの先生、とまづとりとめて何かいひたげ、

「はあ、と學士の早速に立ち止まつて其言ひつゞけられむ言を待つに、女は今更に氣おくれのしけむやうにためらひゐしが、さつと肩掛を外し丁寧に腰を屈めて、

「あの先生、なが〳〵お世話さまいたゞきました、私今日ぎりで病院を退きまする覺悟で、

學士は對き直つて、

「おや、それは、どういふ譯でですか、

と無雜作に怪しむ、

「とても私身體が堪へきれませむやうに存じます故、今日あたり殊に先生の御手術で御座いました故、御側に居りまして卒倒でも致しそうな

心地で、ものゝ叶ひませむ失望やら悲しみやらで、人には申されぬ苦しみを胸の内の亂されまして、あの、これで病み附きまして、もし死にまするやうにでもなりましたならば、どうぞ先生失禮ながら病褥まで御出でを願はれますまいか、私一生のおねがひで、せめて一言なりともお聞きを願ひたい事が御座います故さやうならば御機嫌よう此處で御わかれいたします。

顔に袖をあてしまゝいひ終るや仰ぎもやらず身を轉してさびしき道を眞つすぐににぎはしく燈ちらつく大通りへ、束髪のほつれ髪こぼれかゝれる肩の痩の今さらにめにとまりて、ほつそりとてけたる裾のあたりゆらめきて倒れそうなる姿の彼方へ彼方へと遠ざかりゆく。

呆れたる學士はわれを忘れて茫然と手を拱きて立ちぬ。郵便箱のほとり下宿屋のその四ッ角に。

少音樂家

文學士 藤澤古雪

世にも哀れに、纖弱き病婦が寢床を取り圍みて、喋々と饒舌り立てたる女房の群れは、母親と嬰兒との上に其の手を搖り動かしつ。その中にも、勝れて賢き鍛冶匠が妻のシモン——は、病婦を慰めて言ふやう、

『吾等は神に御神燈を捧げまつらむ。いかに饒舌るも益なかるべし。今こそ御身は來世へ行かん仕度など爲し給へ、又和僧を迎へて、罪の恕しを乞ひ給へ。』

又、今一人の女は、

『されど、この嬰兒にははやう浸禮を施すこそよけれ。御僧の見え給はぬさきに、惡しき靈などに魅入られなばあしかりなむ。』

偽言ひて、彼女は燭を點じて、神に供へ、嬰兒を抱きて瞬きするまでに水を洒ぎ、天に在ます神父と神子と聖き御靈との名に依つて、浸禮を施し、その兒にヤンと云ふ名を與へぬ。

嬰兒は、足もて蹴ることはげしく、弱々しく憐れに泣き聲立つ。例の女房達はひたあきれにあきれて、猫の仔などに似たる兒のさまかな。されど猫の仔ならぬを、――こはそも何物なるべき。と互に私語きぬ。

迎へにつかはせし僧は來りて、爲すべきことども經へて歸へり行きぬ。婦が病は肥立ち好くて、其後一週間と言ふに、仕事にと出で行けり。その兒は唯呱々く泣くばかりなりき。――猶は、それより四年經て郭公鳥のなのる頃までは病勝ちにて伏せしが、それよりは稍健康に、拾歳の春を迎へぬ。

彼は常に瘦せ衰へ、顔色日に燒けて黑く、胃のみ大きく膨れて、兩の頬はいたくこけたり。殆ど白色に近き苧色なせる額髮は、その涼しき惝然ともの を凝視る如き眼の上に懸りて、その眼は遠き遠き或所をまもるやうに思はれぬ。冬の日には、彼は煖爐の後に座るが習慣なりき。もし母の煖爐或は物を與へぬ時は、彼は寒さと饑とに靜に泣きぬ。夏は襯衣一重、衣服の切れを帶の代りにまきて、頭に破れたる麥藁帽子戴き、その破れたる緣の間より、小鳥などの如く空の方を竊み視てゐたりを逍遙ひ歩きぬ。

哀れなる彼が母は他人の家に寄留して、軒より軒ど生活せる雀のやうに、其の日其の日を送りながらも其の兒をいつくしみぬ。されど時には「愚者よ」と叫びて、彼を笞打つこともありき。」

☼　☼　☼　☼　☼　☼

かれ八才の程なりき。家畜かはんとて出で行きし

とて、或時は火杖もて責むること有るに兒は叫んで、再び係る事有るまじきをちかひながらも、胸の中には、何者の音樂を奏で居しかを考へぬ。そは何物なりしか、山松、山毛欅、黄金色なる葭切、――それらのもの音樂を奏し居たりしか。あらず、あらず、森の中のものは、總べて音樂を奏し居たるなりき。

木靈もしかぞありき。野邊の苦蓬樂を奏し、近き花園には雀の一群れ櫻の梢を搖り動かさんばかりに囀りかはす夕ぐれ、さまぐ\の聲村の方よりひゞき來るとき、彼は考へぬ、村人は皆音樂を奏せるにあらずやと。又畑に肥料施す時さへ、彼が耳にはたの肉叉形したる耙の齒に風の音樂を奏すやうに聞きなされぬ。

監督者は、屢々彼の額髮を亂して、木製の耙の齒よぎる風の音に懵乎と聞き耳立つるを見ぬ。人々が、小屋の中に何の喰ふべきものもなきに、彼は菌あつめんとて、松林に出掛けしが狼の害を加へざりしは、神の憐み給ひしなるべし。彼は天性才短くもの言ふ時は他の小兒の如く指の端を口にするならひなりき。人はかゝる兒の成人せんとは思はず、まして母の彼より幸福を得んなんどゝは思ひも寄らざりき。彼は働き鈍く、かゝる兒の何所より生れ來しかと疑はるゝばかりなりき。然れど彼が唯一の好む所は音樂なりけり。彼は何所を問はず、衝立ちて音樂に耳聳てぬ。やうく\生長するまゝに、音樂の他は何事も念頭に置かざりき。かれ家畜を率ゐて森に行き、又は覆盆子集めんとて野に行けるときは、唯茫然と家に歸り來ていふ、

『母よ、森の中にて何者か音樂を奏し居たり。』

母はその時、

『よしさらば、母も御身の爲め樂を奏せん。』

は彼を「ヤンコーの音樂家」と呼び馴らはしけり。春くれば、彼は河の岸近く立ちて、口笛の稽古に日も足らず、夜は蛙の聲、牧場にきしる軌道の音、露のしたゝる音、柴垣のあなたに家雞のなく聲、など聞くにいも寢られず、何事もせず耳欹つ。彼は何ものをその音の中に聞けるか。そは唯神のみぞ知し召さん。母は彼を寺に連れゆく事をせざりき。一度風琴の音を立て、美はしき聲もて讃美歌のうたはれんか、兒が眼はさながら霧もて蔽はれたるやうにて、現世の外には何物をも認ること能はぬやうなりければ。」

村なる巡査の、夜間眠りを耐へん爲め、或ひは大空の星を數へ、或ひは犬と低き聲にて話しつゝ巡回の際、一度ならず、公堂の方の暗きが中に、ヤンコーの白き衣を見ぬ。彼は公堂へ行くにはわらで、唯その近きわたりを逍遙ひ、壁に近く居寄りて、耳欹つるのみなりき。中なる人はオーベルタスの曲を舞ひ、時々若者達のウハアと囃す聲、靴の響、若き娘のものたづぬる聲など、賑しげに聞ゆ、提琴は低き聲に歌ふ、

もの食べ酒くみて樂まん。

洋琴も深く沈みたる聲にて、合せ唱ふ、

神の授けさせ給ふまゝに。神の授けさせ給ふまゝに。

窓の戸はいき〳〵と輝き、公堂なる梁もゆるぎ出でんかと怪まる。ヤンコーは立ち聞けるまゝ身動きもせず。もの食べ酒くみて樂まんと提琴の奏せるを聞けるとき、彼はいかに多く嬉ばされしぞ。かゝる樂しき歌を出す樂器よ。何所より彼はかつてかゝる歌を得しことありしや。かゝる樂器は、何所にて造

らるゝか。もし或人のヤンコーが手に一度にても、かゝるものを授けたらんには！。彼は唯僅に巡査の「早く家に歸れ」とうながすまでの間を立ち聞きするのみなり。

その時、彼は素足のまゝに家に歸りぬ。されど提琴の聲は、暗中に彼を追ひて、もの食べ酒くみて樂まんとせまり來る。低音の深く沈める聲もひきつゞきて神の授けさせ給ふまゝに神の授けさせ給ふまゝにと合せ唱ふ。

・　・　・　・

收穫の祝宴結婚の日など、提琴の聲を聞く時は彼はいたく樂しまされて、祭日の如くおぼえ、その後の數日間を煖爐の陰にかくれて、暗き所より其眼を猫の如く輝かして、何事をも言はぬことありき。彼は自ら薄き板片と、馬の髮毛もて提琴を造りぬ。そは甞つて公堂にて聞けるが如き美しき音を出さゞりき。――その音は低く、最低く、鼯鼠の鳴聲ならずば、蚊のうなり聲の如く細かりし。されど彼はそを朝より日の暮るゝまで奏でつ。たとへその爲めに屢々平手打ちをくひ、終にその頰は未熟の林檎の如くに膨れ上りしもかつて止まざりき。實に音樂を好むは彼の天性なりしなり。哀れなる兒は次第々々に痩せゆきぬ。彼は唯大なる胃ヶ持てるのみなりき。彼の頭髮は次第に房やかになりぬ。その眼は涙もて被はれしも、ますくつぶらかになりぬ。唯その頰と胸とは次第に痩せ衰へて。

彼は全く他の小兒とは異りき。その樣を例へば彼が自ら造りたる板片の提琴の如く、僅に辛うじて音を出すのみなりき。

（未完）

村岡勤王談

森林黒猿

村岡は其後何の答へも致しません、伯耆守は再び
「近衛殿下は、平生如何なる事にて日を送り玉ふや」
と問へば、村岡は
「女の身ゆゑ、御内用の外は、毫しも存じませぬ」
と應へます、伯耆守は又
「御政事は携はり玉ふよし承るが、如何に」
と問へば、村岡莞爾と笑ひ
「御身分は藤原氏の長者、官は左大臣にておはせば、朝廷の政事に携はり玉ふこと、當然かと存じます」
との答へに返す詞もなく、一先松平丹後守家來へ預け置き、ゆる／＼取調ぶべしとて、退出せしめましたが、跡にて人々
「なんと大膽なる女では厶らぬか」
「去れば年七十を越えて、浪人共と交はるほどの女、一通りの者では厶らぬ」
と語らふ折しも、留役めきたる者出來り
「唯今大御臺所の御内意とやら申す事にて、村岡へ立派なる絹夜具、結構なる御食物等の下され物が參りました」
と申したので、人々顔見合せて呆れ入りたるばかりで厶います、其後度々取調がありましたが、同じ様なる返答の外は、問へども少しも答へませんが、いよ／＼お調べも濟んで、其申渡しとなり、何れも呼出されましたが、頼三樹三郎、鵜飼吉左衛門、其子幸吉等、皆死罪と申渡されまして、梅田源次郎は獄中に死にましたし、其他は或は死罪、或は遠島と、皆それ／″＼處刑の定まりたるゆゑ、

村岡も心の中に「扨は頼三樹ぬしすら、死罪の申渡しなれば、妾一人助からう筈なし、好し其儀ならば、いかで獄卒の手に死なん」と、番卒の隙を窺ひ、髪を振り解きて、笄を抜取り、之を引抜けば、中には小さき刀を仕込みてあります、それを神にかくして、左あらぬ體にもてなしつゝ、控えて居ります、すると松平伯耆守は、いかめしく禮儀を正して村岡に向ひ、左の如く言ひ渡しました

近衛殿老女　村岡

其方儀、かね〳〵主家へ館入致す、清水、成就院、隠居、忍向、引付を以て、水戸殿、家來、鵜飼吉左衛門、悴幸吉、致面會候節、同人義、水戸前中納言殿、其外、御愼、御隠居等、被仰出候次第を歎かれ、主家、御取持を以て、右御方の御愼解、相成候様、致内願置候間、猶、取成の義相願ひ、使者申聞けるならば、如何の儀と心附き、取合ひ申間敷候處、其義無之、幸吉、申聞次第、主家へ申立、右一條に付、幸吉より、忍向の内状、其方へ向け差越し候間、主家へ取次ぎ差出し可申旨、幸吉頼を承り、追て同人方より、上書小札其方宛にて、岩波と認め有之文箱差越し候を、右に入れ有之、忍向變名月照の文通を、同人罷越候節、相達し、又は主家へ取次ぎ、差出せし始末、幸吉等へ馴合筋は無之候共、右始末不届きに付、押込申付るもの也

之は原文の儘を載せ置きますゆゑ、唯今の御婦人方には、些とお讀み惡いで厶いませうが、却つて直さぬ方が好いと心得て、態其儘に出して置きます、サテ此の申渡しを聞いて、村岡は夢の覺めたる如く、霎時茫然として、奉行の面を打ちながめて居りましたが、罪狀の面に、正して押込めとわ

るに、讀違ひにもあらざるを知り、扨はと悟つて、大御臺所の御惠み嬉しく、愼んで御受け申上ました、伯耆守は詞を改め

「此までは役目の表、扨、村岡殿、長々のお調べ、嘸心勞かりしあらん、斯く詮議相濟みたる上は、松平丹後守邸にて、時節を待たれよ」

と挨拶に及びました、村岡は

「御挨拶で恐入ます、左樣ムらば丹波守殿お邸へ參つて、謹身致し居るでムりませう」

と會釋して出立る時、玄關前には、松平丹後守家來、御迎に罷越し候とて、長棒の乘物、供人美々しく出立ちましたが、之も皆大御臺所の御威光に據るのでありませう、村岡は袂なる匕首、ひそかに鞘に收めて懷中し

おぼろ夜と思の外に雲晴れて
月に一こゑ鳴くほとゝぎす

と打誦して、長棒に乘移り、丹後守の邸を差して赴きました。

（完）

田舍莊子

金澤常十郎

蚿に蛇問ふて曰く、われ百足を用ゐて行けども、猶早きこと能はず、人に追はるゝときは、翅もがなと思ふときあり、汝を見れば、足もなくして、のたり行く、さぞことのたらずして、不自由ならん、何の術を以てか、足もなくして、如斯のたり歩行や、

蛇が曰く、われ何をか知らんや、唯心の向ふ所へ頭をさし向ふれば、身は隨ふてゆくまでなり、汝を見るに多くの足を動して行く、さぞこと多くして、心せしはからむ、何の術を以てか、如此多

くの足をまぎれぬやうに運び行くや。百足が曰く、われ一っ一っに心ありて、多くの足を遣ふにはあらず、一機動くところ、即ち百足動き身を乗せて行く、更に忙しき心なし、別に何の術をか用ゐむと云ふ、蚯蚓傍にありて、歎じて曰く、夫れ人々、わが得たる所には、明らかなれども、推して彼を知ること能はず、四書六經を講ずるもの、その廣大高明の理、皆わが心の註解なることを知らず、故に書を離れて、心を解くこと能はず、唯聞覺えたる文字を訓詁しいふのみ、况んや、この心、この形、造化と出入することを知らんや、百足の足多きも、蛇の足なきも、共に造化のなす所にして、われも知らざる所なり、故に蚿足多きとても、苦勞にもせず、蛇に足なしとて、不自由なりとも思はず、今彼等作爲して、羽虫の翅をとりて、身に着けたらんには、飛ぶことの叶はざるのみならず、邪魔になりて歩行もなるまじ鶴の脛の長きと、鵯の脚の短きとは、共に性なり、長過ぎたりとて鶴の脛をよき程に切斷たらば痛みて死なむ、鵯の足の短しとても、この足をよき程に接ぎたらば、苦しみて、須臾も立つことなるまじ、これ足の恰好はよくしても、その自然に任せざれば、その用をなすこと能はず、大凡人、その器の用ゐることを知りて、もと造化より、これをなさしむることを知らず、故に種々の私智才覺を用ゐて、日々に造化の神理に違ふのみ、夫れ木に棲むものあり、水に游ぐものあり、野に臥すものあり、穴に住むものあり、犬と猿と同じく四足あり、猿はよく木に上り、犬は上ること能はず、馬は重きを負て、遠きに行けども、猫の如く鼠を捕ふること能はず、皆己々が才覺にて、如斯なるにはあらず、天より受くる所の性なり、

蚣と虵と性異にして形も亦異なり、蚣は既に足あり、虵の足なくして、のたり歩行の術を知らずとも、事欠かず、虵には足なし、蚣は百足を使ふ術を聞きても、用ふべき所なし、われも亦手足もなく、目鼻もなし、何れが頭やらん、何れが尻やらん、わが身ながら、われも知らず、今まで知らねども事足りぬ、この筈のことにてこそあらめ、と思へば強ひて知らんことを求めず、折々歌を唄へども、何節といふて習ひたることもなし、上塙壌を喰ひ、下黄泉を飲みて世に求めなし、自然鶏に見付らるれば、夫れまでの天命なり、生あれば死あり、われ何ぞ恐れんや、彭祖が八百歳も、七夜の内に死したる赤子も、その死したる日より見れば、同じことなり、惣じて死生のみに限らず、己に福のみありて禍なからんことを思ふは愚なり、陰陽生殺の氣は、皆天造の流行なり、われも亦天地の内の一物のみ、造化の中に生じて、造化の内の、榮枯消増吉凶禍福は、造化の命なり、造化のなす所、豈私を以て、免るゝことを得んや、唯造物者に身を任せて、この間に私意を容るゝことなきもの、これを道の大意を知るといふ」

文林

若葉に雨ふる　　久我建通

ふるあめを楢の廣葉にうけためて
こぼれぬつゆも涼しかりけり

机　　鍋島直大

いとけなき時のことをも思ひ出す
文をのせたるつくゑを見れは

旅ゆく道に時鳥なく　前田利邕

旅ころも紀のせき越る折しもあれ
なのりてもゆくほとゝきす哉

鮎　諏訪忠元

玉川のなかるゝみつのきよければ
たはしる鮎のかすもみえけり

鷗　宮地厳夫

うろくつも渚ちかくやよりにけむ
沖のかもめのつとひきにけり

檜　小出粲

斧の音の絶る日もなき木曽やまも
はてこそみえねしける檜原は

田植うた　千葉胤明

賎の女かうたそ聞ゆるわか葉さす
もりのあなたに田植すらしも

夏筏　遠山英一

水かれし河はらのいかたしつの男か
すゝみの床となれるころかな

遠村　加藤義清

ともし火もつけて後こそ遠さとの
賎かいへゐはあらはれにける

庭岩　岩崎勝従

色かへすいくよかへなむ世の塵も
かゝらぬにはの岩のみとりは

那須宗高　下田春興

いとめけむそやのひゝきは今もなほ
やしまのほかにとゝろきにけり

松有歡聲　近衛貞子

ひな鶴のむれて遊へるこゑすなり
松の木かけやたのしかるらむ

筍　柳原愛子

千代の數すむ心ちせり朝なあさな

おひそはりぬるにはの竹の子

辨内侍　　南郷栁子

楠のかけへたてすはおはうちの
はなをたか野の風やさそはむ

竹徑通幽處　　小池道子

たかむらのしけみか奥にやま水の
澄よかるへきいへもみえけり

山寺子規　　北島以發子

初瀬てら朝まうてしてうれしくも
はつ音きゝつるほとゝきす哉

能久親王　　岩崎箏子

かれにける園生の竹のいさをこそ
高さこしまにたかくたちけむ

樗　　常磐井文子

むらさめのなこりの風に薫りつゝ
露とともにもちるおゝちかな

夏露　　大谷章子

夏くさのしけみはかりに殘りけり
てる日に消ぬつゆのしらたま

自轉車　　小川直子

牛うまのちからもからす我からと
おもふまに〳〵廻るをくるま

加茂眞淵　　服部磯子

信濃なるすかのあら野の言のはの
たかきしらへそ世に聞えける

新樹風　　下田春興

庭の面のひとむらさくら　此の頃は青葉しけらむ
水無月のてる日のかげと　おしたには塵打ち拂ひ
ゆふへには水打ちそゝき　ふく風を待へくなりぬ
昨日かもはなのさかりは　とふ鳥のつはさの風も
まふてふのつはさの風も　かにかくに厭ひし物を

この頃は青葉しけらむ　水な月のてる日のかけと
ふく風を待へくなりぬ　折りふりに移れはかはる
人こゝろかな

うき草　鷲水

木の下陰を走るてふ
　いさゝ小川の清き瀬に
世をうき草の三葉二葉
　水にまかれて淀川の
淀の川瀬の水くるま
　げにおもしろき世の風情かな

* * * * *

卯月　いく子

双か岡のをしへぐさ
　摘まんとにしもあらねども
さかりをのみぞ見るものと
　おもひおらふかみやこ人
花にくるひしきのふの春を
　忘られはてゝさびしげの
隅田つゝみに今日はしも
　たつね來にけりゆくりなく
彌生のそらの雲と咲き
　雪とちりてはかは波の
よるひる分ず立つゞく
　花見くるまに水さほぶね
所せきまてならひてし
　さし出の小家やよし簾

宇治茶ところも花かざし
めせやめせてふ聲〳〵も
ひるはつかしうかけつれし
のきのともし火かげ消えて
秋ならぬ風も身にしめば
あは代小田にかはづなく

うつろひやすき世のさまは
花よりもげにはかなしと
眺めやすらんつく〳〵と
ぬるゝかはなる葉ざくらの
露もしたゝる茂みより
のこんのいろ香二ッ三ッ
ほのかに匂ふをそざくら
あはれも深き風情かな

殘花

おなじ人

はなれをしまのをそ櫻
今しも春をしりそめて
咲くかあはれの山磯ざくら
あさけの色もあら波を
けたてゝはしるしほ風に
採れ〳〵つ生ひ出でぬれば
よしや咲くともかつちらん
、波のしぶきに色あせん
咲きな匂ひそ世の花のごと
苫やのあまの袖にだに
ふれんよすがもあら磯の
日かげもうすきなれ櫻木よ
さちなき花よなが身には
さかで過んぞなか〳〵に
憂世をしらですぎなん物を
いかなる神のたはぶれか

うぐひすだにも聲ふりて
　世は若葉とぞなり行く中に
ひとりをくれてわくらはに
春しりしよりながびねの
　いたみはいえじとことは迄も
なれぬこの世をとくさりね
もゆるおもひをそのまゝに
　そらにけぶれよ鹽木となりて
おもかげ似たる汝がもとに
深きおもひをこのまゝに
　われもしづまん千尋のそこに





六月五日兼題

螢

天　三河國豊橋隨園社　三宅中枝子

ゆふまくれをすのゆらきに風みえて
　まとのわたりをとふほたるかな

評、たすふく風のすゞしさに、螢の光りもことにさやけきこゝちす。

地　長崎市櫻町廿番地　内藤美與子

文よみてこゝろのまたまみかけとや
　まとにはたるのひかりみすらん

評、趣向はふりたれど、詞つゞきよくとゝのひたり

人　茨城縣鹿島郡中野村　内田さた子

まとちかき竹のわか葉のつゆとめて

すかるほたるのかけのすゝしさ

評、とりたつるふしもなけれど、すてがたき趣あり。

甲之部

熊本　坂本たけ子

さにつらふ妹かふせやのまとちかく
おもひみたれてとふほたるかな
熊本　志方圓子

ほたるとふまなひの窓におてたらす
こゝろのたまをわれもみかむ
三河　服部萬子

ゆふ風のふきけつまとのともし火に
かはるもよしやなつむしのかけ
東京　椎野鋭子

青すたれかゝけしまとにすゝしくも
ひかりをそへてとふほたるかな
東京　三好珍子

みやひをか笛ふきすさふまとの外を
こゝろありけにとふほたるかな
大阪　伊勢村花子

しけりあふ竹の葉すえのつゆのむた
まとふくかせにちるほたるかな
松山　水木とも子

露とちりたまとみたれてなつむしの
ひかりさやけきまとのうちかな
岐阜　吉村せい子

まとちかきのきはの竹の葉すゑより
つゆとこほれてとふほたるかな
東京　大木光子

打ちそよく窓のやあきにつゆみえて
すゝしきかせにとふほたるかな

乙之部

ことさらにひかりも清く見ゆるかな
ふみよむまとをてらすほたるは
松山　梯たけ子

わか窓を夜な〳〵てらすほたるは
のきのしのふのつゆをとめきて
伊豫　緑友子

ともし火は風にきえたるまとのとに
のこるひかりはほたるなりけり
大隅　山田稲子

三つふたつほたるとひきてぬは玉の
やみよもまとはさゝれさりけり
大隅　稲垣政子

ふく風をそてにまちとるよひよひに
まとのほたるのひかりすゝしも
肥後　徳永廣子

吹かせにまとのむらたけそよきつゝ
たまとみたれてとふほたるかな
肥後　徳永多瑠子

よひよひの月さへうときゝたまとを
てらすひかりはほたるなりけり
肥後　野口靜子

あつめつる窓のほたるはともし火の
松山　上原のふ子

うすれてのちそかゞやきにける

かせ渡るまとのとも火かつきにて　東京　北島操子
すたくほたるのかけのすゞしき

まと近くすたくほたるのかけとめて　東京　北島功子
くらきまなひのみちやたとらん

ふみまなふまとのくれ竹ふくかせに　岐阜　佐藤そう子
つゆとみたれてとふほたるかな

文つくゑのちりはつかしく思ふまて　三河　永井さい子
まとのほたるのかけさやかなり

まとちかくうゑてしたけに数そひて　肥後　田代綾子
ふみもよむまてほたるとひかふ

ゆふ風のすゞしくわたるいけとのゝ　肥後　田代寧和子
まとをてらしてとふほたるかな

文を読むまとにとひかふほたるこそ　和泉　稲原菫子
わか身を照らすひかりなるらめ

かけともゝそとものまども ゆふまくれ　肥後　佐々小琴子
ほたるとひかふかけのさやけさ

ゆふ立のすき行くまとにしらつゆの　尾張　後藤信子
たまとみたれてとふほたるかな

あめはれてつきまつ窓のたかむらに　大阪　中舘やう子
すかるほたるのかけのすゞしさ

はしゐしてかせまつにはの夕やみに　東京　戸賀崎久子
かくれあらはれとふほたるかな

窓ちかきをさゝのつゆをてらしつゝ　東京　戸賀崎浩子
ゆふへすゞしくとふほたるかな

かけくらくしけれる窓のたけむらに　大阪　大阪谷信子
つゆとまかひてとふほたるかな

露すかるのきのしのふたはなれては　東京　片山あや子
まとのあたりにちるほたるかな

里の子かとりしほたるを籠にいれて　東京　内田きみ子
つれなきまとのひかりとそ見る

こゝろなき身にもむかしの忍はれて　播磨　本多宜子
ふみゝるまとにとふほたるかな

まとちかきにはのこかけの夏くさに　東京　北岡文子
むすひしつゆとみゆるほたるか

夕かせにさとの小かはをはなれきて　秋田　早川のふゑ子
あつめぬまとにとふほたるかな

ふつくゑの籠のうちをやもれつらむ　東京　篠田圓子
まとの外ちかくほたる飛ふなり

なすをふくゆふへの風におくられて　東京　椎野蕊子
まとの戸ちかくほたるとふなり

つきかけもゝらさぬまとのわか竹に　東京　椎野清子
つゆとみたれてとふほたるかな

とり染めふみ見しむかしゝのへとや　大阪　梶井富士子
まなひのまとにほたるとひかふ

ゆふかをにみたるゝ露と見ゆるまて　東京　牛山楽子
木かけのまとにほたるとふなり

ゆふ月のいりてのゝちはまとの外を　三河　服部正子
てらすほたるのかけそさやけき

つき見つゝかせまつまとの若竹に　東京　近澤和子
たまとみたるゝほたるすゞしも

丙之部

夕されはあしまはなれてまとちかく　茨城　荒野たに子

ほたるとひかふかけそすゝしき

しら露のたまのひかりかさよふけて　伊豫　黒田じう子
まなひのまとをてらすほたるは

夕やみにほたる飛かふまとのうちは　大隅　山田よれ子
つきのひかりもおもはさりけり

ひたすらにまなへよとてか露なたに　東京　林ひな子
やとさぬまとにつとふほたるの

わか竹のつゆもすゝしきまとのとに　大阪　桝田益子
ひかりこほしてとふほたるかな

文まなふおとめかこゑになれぬらん　東京　泥堂菊代子
まとの戸ちかくほたるとふなり

賤かやのともし火きにてよもすから　伊豫　小田操子
もゆるはまとのほたるなりけり

まなひやのまとにみなやくなつ虫も　和歌山　長尾小ゑい子
たのむひかりのあはれなりけり

さよふけてすたくほたるの隆なしも　肥後　徳永識子
まなひのまとのともとこそみめ

くれ竹のつゆにやとかるほたるこそ　肥後　徳永萬壽子
まなひのまとをてらすなりけれ

すゝしさにまくらたかめし高とのゝ　肥後　徳永純子
まとの戸ちかくとふほたるかな

われとおなし病にうせしともかきな　香川　安藤光代子
しのふ小まとにほたるさまよふ

ふみよむとあつむる窓にうなゐ子は　山口　村上操子
とりしほたるをはなちてそ見る

夕つゝのかけかあらぬかまとの戸に　肥後　小池穎子
もゆるほたるのひかりすゝしも

窓にのみすたくほたるのきにやらて　肥後　服部倫子
ふみよむよひそうれしかりける

うちかれてほたる飛夜にわかやとの　肥後　千知波橘子
なくらきまともさやけかりけり

まとの外になひくなよたけなよ〳〵と　伊豫　竹村竹里子
ほたるのひかりすゝしかりけり

いさ我もほたるあつめてまとの内に　肥後　田代艶子
むかしなうつすふみなこそみめ

文まなふみちのしろへとたのむかな　伊豫　池田梅子
二つ三つとふまとのほたるな

夕まくれひかりかはしてまとのとに　肥後　佐々有鄰子
とひかふほたるかけのさやけさ

二つ三つまとのとさらすとひかふは　廣島　衣笠滋子
今朝はなちたるほたるなるらん

靜かなるいほのゆふやみまとこしに　東京　太田やへ子
うしろのやまにほたるとふ見ゆ

いにしへのしのはれにけり夏の夜の　相模　岩橋花子
まなひのまとにほたるはなして

かくれかの窓によりそひよむふみを　丹羽　大槻まつの子
よたゝてらしてほたるとふなり

影うすきともし火かゝけふみまなふ　埼玉　前野壽賀子
まとをてらしてほたるとひかふ

ふけぬれとなほ消あへぬともし火は　埼玉　前野ふさ子
まとにあつめしほたるなりけり

まと近くてらすほたるそまなひなき　栃木　青木たま子
わかおこたりないさめかほなる

小夜ふかく竹の葉かせにふかれ來て　埼玉　横田音羽子

まなひのまとにとふほたるも・

よひのまのまとの戸うちし雨はれて
ほたるこほるゝかけもすゝしき　埼玉　横田秋子

かすかなる文野のおくにとふほたる
まなひのまとに見るそすゝしき　茨城　海老澤喜雄子

思ひにはもえてもかけのすゝしきは
ふみよむまとのほたるなりけり　茨城　篠塚喜代子

うれしくもくらきまなひの窓のうちに
ふみをてらしてとふほたるかな　大阪　伊勢村春子

あつめたる学ひのまとのほたるこそ
我か身にそはるひかりなるらめ　東京　戸塚巖子

ともし火のひかりうするゝ窓のうちに
てるなつむしのかけのすゝしさ　東京　矢野やす子

まととほく茂れるにはのくさの葉に
もゆるほたるのかけそすゝしき　東京　平尾あさ子

くるゝよりあつめぬ窓に飛ふほたる
消えぬおもひをひとに見すらむ　東京　川村松子

夕やみにしのふとすれとなつむしの
まとにとひかふかけそすゝしき　東京　新澤わか子

わか草のむらくにつけて知られけり
つゆと見えたるまとのほたるは　東京　片山ふみ子

夕やみに見るほしかけもすゝしきを
まとの戸ちかくとふほたるかな　東京　中島かね子

草ふかきしつのいへこそたのしけれ
わかまとちかくほたるとふ夜は　東京　笹川ふさ子

窓ちかくあまたとひかふほたるをは
ともとなしつゝよをふかしけり　東京　笹川松江子

おこたりを諌めかほにもまとに来て
ふたつ三つ四つほたる飛ふなり　讃岐　横山芳子

よむふみにうみて窓の戸あけみれは
こゝろよけにもほたるとふなり　東京　松村あさ子

月かけのさしいるまとをあけみれは
あまつほしともまかふほたるか　東京　北岡美代子

かゝやきしむかし語りをうつすらむ
ほたるとひかふまとのくれたけ　東京　山本梓子

文まなふまとにあつむるほたるこそ
やかてその身のひかりなりけれ　秋田　古瀬りく子

まと近くをくらきふみのはやしさへ
よたゝてらしてとふほたるかな　秋田　古瀬とよ子

いよすたれかゝくる袖にゆかしくも
うつるはまとのほたるなりけり　東京　林　環子

ゆくすゑは遠きまなひのまとのとに
ひかりのこしてゆくほたるかな　京都　坪内りき子

よむ文もおこたるまとにいにしを
おもひおこせとゝふほたるかな　最崎　長尾いへ子

さよふかく窓にほたるのつとひきて
ふみよめとてやひかり見すらん　熊本　徳永雪枝子

われもかく光りあるみとならまほし
まなひのまとにほたるあつめて　東京　椎野秀子

雨はれてのきはすゝしき窓のとに
かけほのみえてとふほたるかな　東京　椎野ぬき子

おこたりをいさめ顔にもさ夜ふけて
まなひのまとにとふほたるかな　京都　石原ます子

里の子におはれ来にけむみつふなつ　横濱　高森楫ゝ子

ほたるとひかふまとのすゝしさ　山口　田村米子

籠にこめしまとのほたるは友を見て
いふゝおもひに身をこかすらむ　山口　田村道子

おのつから野澤のきしをはなれ來て
あつめぬまとにとふほたるかな　信州　岩間種子

まなへともくらきわか身に光そへて
ふみ見るまとにほたるとふなり　三河　本多きさ子

やみの夜も學ひのまとゝしらるゝは
たかあつめたるほたるなるらむ　三河　河合ぬひ子

しけりあひて若葉をくらき窓の戸を
しらせかほにもすたくほたるか　三河　竹尾みはる子

まとのとをあけはなちたる内までも
みにてすゝしくほたるとふなり　東京　田中秀子

ゆふやみに文よむまとをてらしつゝ
われをはけますなつむしのかけ　東京　小川たき子

螢をはまとにあつめてまなふ身の
やかてひかりもいてんとすらむ　長崎　日高かず子

ついに身のひかりにせよと文まなふ
まとをてらしてほたるとふらん　岩手　佐藤たい子

なとめこかふみの卷〳〵くりかへす
まとにとひかふよはのほたるか　茨城　小沼かの子

人みなはあつめたりとやおもふらん
ふみよむまとにすたくほたるを　肥後　坂本美智子

おこたらす學ひのまとをよもすから
てらすほたるにはけまされつゝ　東京　高橋津彌子

わかとものおくりこしたる此ほたる
ふみよむまとのともし火にせん

さよふけて文よむまとにこひしくも
むかしゆかしくとふほたるかな　熊本　猪原みさを

六月五日兼題

郭公をきゝて

天　長崎市新町十三番地　八尾いへ子

花橘のにほひ出たる夕つかた、雨の名殘の露したたる青葉の上に、月のさし出でゝけしきをかしきに、時鳥の忍び音にうち出でたるいはんかたなし。されば、この時鳥をもてはやし、折ふしにつけ、文にかき、歌によむ種として、から大和のみやびをの友になんありける。今の世は、學の道もやうやう廣くなりゆくめれば、遙けき外國人の心にも、はな橘のかぐはしきをおもはせ、郭公の初音をきかせたらんには、いかばかり心ゆくわざならんかしと空だのめなる、ひとりごちのみくりかへさるゝに、月のかげも山のはちかうなりゆきて、あけやすきをかこつになん。

評、「郭公をきく」と「郭公をきゝて」との意をあやまりたるもの多けれども、この文はさる嫌ひなく、而も簡潔にして水の流るゝ筆づかひ、いとめでたし。

地

大阪市東區平野町三丁目 柳田益子

去年は人づてにきゝし口惜さに、いで今年こそはと思ふ折しも、此頃ぞよきなど、そゝのかす友のあなれば、あからさまにひと日、夕つげて磯山のほとりを徜徉しぬ。降りつゞきたるさ月の雨は、あとなく晴れて、渚の松は翠を重ね、若葉したゝる露は眞砂に玉と散り、沖遠く漕ぎ行く舟は、雲に入るかと見ゆ。入相告る遠山寺の鐘のおとは、幽かに聞え、ほのめき初し夕月の光は、浪に映じて近く輝き、また袖に通ふ浦風、肌え涼しう、所がらあはれもいと深かりけり。折しも郭公の二聲三聲、名のりしたるは嬉しくも、またなく嬉し。なれもかゝるさやけき夜らは、忍び兼て浮れ出けんかし。あはれなが聲は、人皆の古へより、いつも初音の心地ぞすなると、あかぬ思ひの珍らしうおもほえ、まだしき程より花うつぎ、匂ふ垣つ芳はしき香具の木のみの下影に、待つけて幾夜か月に面なれかしと、有明のはかなき影を恨み、さみだるる心の結ぼれも、晴ぬとよろこび、また雲をいとひ、風をかなしみて、思ひをのばへし言の葉は、

百千をもて數ふとも盡せずあん。爰のみかは、ことさへぐ唐にも、もてはやして、さしぐしの曉かけて夜のみなのりし程は、いみじう哀にて、ひたすらに田子の、其聲をうかゞひて農事を興しぬとか。あるは啼いて苦む時は、樹にかゝりて謝豹思歸樂と呼ぶとか。こは不如歸去といふなりとぞ。杜荀鶴の唐歌に、あさどよもして、花の枝をあけに染めぬと。杜鵑行は、君見給はずや、蜀天子杜鵑になり給ふとうたひ、杜子美の詩に、春の暮なん時、はた、聲いみじう哀なり。我は是を見て、ぬかづきぬとか。こは、古帝の魂を尊むの故なりとぞ。范文正の詩に、春山のあはれはつきず、歸るにしかずと說き、宋の元祐の末、邵康節となんいへる人、洛陽の天津橋にて、あのるをきゝて、いへらく、そともの方には此鳥あし。あやしきかも、十とせが中には、かげともの人、文字をもて天の下を、さわがしぬらんかしと。むべある哉。江南より來て天の下亂しぬとぞ。かゝる故事共、かき集めたらんには汝が啼くなる、八千八聲も及ばざらまし。某の啼くにさへ、實はゞいかにといひけん

物から爰にも、かしこにも、めで賞すめれど、友を忍び、人を戀ひ悲しむが多かるぞ、心づきなしや。某のおもとの、雲井まで行くらん鳥の、めでたき數にしも、いれざりしこそいと〳〵口惜きわざあれど、死出の田長やかこつらんかし。さはいへ、近き世には、いよ〳〵競ひて野山にまじり、忍び音をもてはやしぬれば、雨のぬれ衣ほしもあへぬ折もありぬべし。とまれ、かくまれ、國の内外を論らはず、人皆の心を悦ばして、いとをかしきは、待つけたらんふしの初音なりけり。

ほとゝきす山路里わと變れとも
　しのふ初ねやひとつなるらん

評、郭公をきゝて、昔ゆかしうおぼゆるは世の常なりかし。巧にその故事をうつして、おのが心にかへたらむはかへりてあはれふかしや。

人

長崎市西山七十一番戸　日高かず子

今年は人儕より先に聞ばやと、卯の花垣結ひめぐらし、花橘うつしうゑなどす。ちぎりおかねば心もとなく待わたる夕つ方、おぼろげながらほのかに聞きつけたるは、今宵來鳴くらん道すがらの聲なるらし。うれしさに烏羽玉の暗夜こそあはれは深けれど、燈けちてまどの外近う出で、あやめも分ぬ空うちまもれば、物思ふ人の數にも入りたらん心地ぞする。短きならひに山の端白うなり行きて、二十日あまりの月の出たるいはん方なく、光添えたる卯の花のわたりに、いつか來にけん、郭公の聲高く聞えたる、此世のものともおぼえずなむ。心ありげにつゞけたる聲も、いとをかし、「まだきかぬ里の初音や急ぐらんさやけき月に聲を殘して」と口ずさめど、初音には劣りけり。めでたき御代のおほん惠は、學の道も萬新しうなり行くめれば、新しく聞ゆる文もかゝばや、歌もよまばや、はたよく身を修め、家をとゝのへたらむには、おのづと德も高くなりて、空かける郭公の初音にもまさりぬべしとぞ思へりしか。

評、趣向おもしろく、すてがたし

東京　山本梓子

かきくらしたる、五月雨の徒然をなぐさめよとにや。めづらしう、月ほのかに雲間もりきてをかしきに、燈火そむけて、獨うちながむるのきの松風、いづれの里にさそひきにけん、たちばなのかをり、なつかしうかよひきたるに、いとゞ、もよほされけむ、時鳥、一聲、さやかに名のりてすぎぬ。おなやとはかり待ちし日ご

ろのうらみもわすれて、いとうれし。山路くらしつなど口すさみて、いまひとこゑをまつほど、更け行夜半の物思はしう、心にうかぶ事多かるに、いくばくの昔ならねど玉くしげ、箱根の山のいでゆあみせんとて、旅衣おもひ立つゝ、まづ、湯本の里に草まくら結びつる夜、近う流るゝ、早川のたきつ瀬、ともすれば、雨にまがへて耳そばだてたるに、遠愛寺の鐘ならで、ゆくりなくもきいし一聲、所がらなる山水のたゞずまひに打そへて、ゆかしう心にしみしを、今こそわきて忍ばるゝいにし年、きゝしに似たるこゑながら、ふりぬともなきほとゝぎすかな。いにしへ今と取あつめて、かごとがましうかきつゞくる折しも、うき村雨は、月をおほひ、又もや降出たる雨は、わりなくかの山川の、岩こす音にきゝまがへれらてなん。かへす〴〵も、あはれふかしや。

東京 近澤延子

さみだれふりつゞく此頃、さらでだに若葉小くらき窓のうちに、ひもとく文もうちしめり、をり〳〵なき出るかはづのこゑ、軒の玉水の音ものさびしく、何となう心細く、覺えしにやがて、雨も晴れゆきて、月さへめづらしく雲間にほのめきければ、おばしま近うすゝみ出で、かなたこなたど打見やるに、小笹のつゆの玉とちり、雨の名殘にぬれまさりしあやめの色香なつかしく、かきねの卯の花今を盛りとさき匂ひ、庭のけしき得もいはれず、あはれ郭公の初音もがなと心もそらになりゆくをりしも、みやびをのすさびなるか、笛竹のしらべゆかしく、葉分のかぜにたぐひて聞ゆるは、彼人も今宵の月に一こゑやまつらん、おもしろきこの物の音、たゆるまではねやへもいらじと思ひて待ゐたりしに、月はくまなす雲間をもれて、一こゑ二こゑ名のりすぎぬるうれしさ。先の程のわびしきには似もやらず、實にたより文にかき、歌によみなどして、もてはやしつるもさることになん。

肥後 佐々有鄰子

足引の山里なれど、今年はいたくおくれがちなるぞうたてきものから、朝な夕な門の卯花をながめて、今日もおなじところにたゞすみぬ。馬草かりてかへりくる賤の女は、心すまして山かげより出きたりぬれば、郭公きゝつやと問はんとせしに、はやくもかなたの空たかくもらしつるこゑのうれしさむよ。

むらぎものこゝろのかゞみあさやかに
耳をすましてゆく郭公

和泉 福原蓮子

晝すぐる頃より、小止みなく降りつゞけたる五月雨のいとわびしきに、あやにく今宵は、友のきまさぬさう〴〵しさ。文など繰りて、つれ〴〵をなぐさめばやと思ひ、やをら墨すり、筆そめ、これをや書かん、あれをやつゞらんなどゝ、打ち案じつゝありける折柄、郭公の一聲さやになのり過ぎたるゆめかとばかり、初音ききたるうれしさにとく紙そめて拙なきひとふしかくなん。

尾張 後藤のぶ子

あかねさす夕日影の、松の葉ごしに輝きたるも、やう〳〵黒み行きて、二ツ三ツきらめき渡る星の光りいとさやかに、山の端近かうさし出る月の清らかなる四方の景色に、そこはかとなく立ち出つるに、たが宿ならん、かきならす爪音ゆかしう籬をもれて咲き亂れたる卯の花も、寒むからぬ雪の心地して、そゞろになつかしく、たゞずむ程に、空高く一こゑなきし郭公。あはれ今一度とあふぎ見る程に、いづこへ行きけん影もとめず。月はさながら知らぬ顔のうらめしく、いかにかくはつれなき事とかこちつゝも、只一こゑ聞しうれしさに、姉なる君にとく告げばやと、歸るさに一ツ二ツとぶ螢のさまなど、いわんかたなし。

丹波 大槻まつの子

五月雨、ふりやみて、空いとあざらかにさはわたりぬ。いざさつきまつ山ほとゝぎすがもと、去年の夏に、ちぎりてしところにといで行く。雨に洗はれし星、月はかすめる雲まよりゐみ出でゝ心ありげに路をてらせり。かくて、心も細夜道たどりたどりて森の木のまにたゞづめど、唯だ一聲さへも鳴ぬ内、夜は既にふけわたり月かげおぼろなり。今はこれまでと、一と足二足かへらんとせしに、木末はるかに一とこゑ聞ゆて、待てよといひたらんやう思はれたり。おぼはず知らず、足ふみかへせば、三聲五聲ときゝまさるが程に、始のうれしさにひきかへて、わかれし後のものがたりにやと思はれて、故郷こそそゞろになつかし。あゝはらからはいかに過し給ふぞやむかしつどひせし友どちは、如何なるべきやと、何となく人なつかしく、葉ずゐのつゆも、血に鳴く郭公のなみだかと忍ばれて、堪ゆがたくぞありける。鳥もなかずなりぬ、月も山の端にかゝるばかりなりぬれば、いそぎ元きし道へ足を歸しぬ。

茨城　篠塚嘉代子

去んぬる年、五月のはじめ。やんごとなき人々と日光に詣で、中禪寺湖畔に宿りぬ。終夜、瑟々たる華厳の瀑聲に夢を破られ、まどろみかれて獨り燈火の下に讀みのこせし書を繙き、曉至るを待ちわびつる折から耳をかすめて郭公の聲。急ぎ立ち出で雨戸開けば、何處に行きしか姿は見へざりき。四方の景色を打見やれば、湖面は鏡の如く平かに、弦月は斜に山の端に傾き、霞は天地を鎖して、遠近自から濃淡あり。遠き山は眉の如く、近き樹木は黒鬼の如し。溌溂たる魚は湖面を破りて、水に宿せし片月は、忽ちにして金龍と化し、圓波は輪に輪を畫きて、末限りなく廣し。此妙なる眺にいと面白う見入る折しも、陸高きもの、水月をかすめて一聲、又一聲、驚いて天を仰げば、亦姿は見ゆざりき。

熊本　猪原みさを子

さびしき片山陰にすめるみは、四季のうつりかはりをみるのみぞ樂しかりける。いつしか春もすぎはてゝ、青葉茂りて眥見の慾もたぐらく庭のおもは野らよりも草ふかきに、幾日かも小雨降りつゞきぬればたゞに池のおもの人は、常にまさりて濟らかなり。年久しくすめる、都大路の友垣におくらばやと、文書きをへて、端にうたをそへまそと、おもふ折りしもあれ、郭公の二三聲さゝやかに名のりいでたるいかで都のたよりにもおとらましやは。久しくもたゆしみやこのおとつれをきくにもにたる郭公かな」としてたまはらまほしと、茶とゝもに差出しければ、文につけて種々のおものがたりは、古さま今のもありて、庭のやり水のごとく、おとたゆせで學びなば、山住の身も、都人に千里のおとりはあらましやと、清書するもうれし。

長崎　八尾ひで子

夕月のかげしらう、卯のはなもさきたれど、時鳥の聲きこゆぬはたらはぬ心地して、そらのみうちあほがるゝ折から、しげりたるわか葉の梢をもらしたる一聲、いはん方なうをかし。忍音ながらもまたるゝかたにこそひかれたらめときゝはたるわれのみほこりかにいひのゝしるを、月の光も山のはにかたぶきて、きゝいるにやと思はれていとをかし。

東京　三好珍子

今夜は月いと清く、花橘もそこはかとなく匂ひきて、たゞならぬに、郭公の聲、いづれかとく聞かんと契りし友もあれば、たれこめてのみ過さむには、きゝびかむる事もやあらんと、例のごと、はしゐ近くゐざりいで、まてどまてど、しのびねだにきこゆず。やがて、今夜もふけゆくに、などかくは、夜毎〱またせつる心

なの鳥よいぎたなき身にしあれどまけぬ氣のいかできかでやはやむべきと、くりかへしくりかへし、かの鳥なのみうらむ折しもあれ花橘の一しきりにならぬ匂ひして、一聲なのるほとゝぎす、あな嬉しやふくつけき事ながら、をなじくは今一こゑもがなと思へどあだなりけり。いやで、あすはしのゝめ早う友の君を驚かしくれんと獨うれしく思ふものから、なか〳〵に、きゝてしも猶それらにねは、待し夜頃の心ならひなめりと、そゞろに、ふるごとなど思ひ合されて。

伊藤 絲 元子

ふりはへてきませる芳子の君と共に竹椽に端居して、月をめでつつくさ〳〵の物がたりに打興じ、さては時のうつるをも知らでありし折しも、遠の森のかたにて、きゝなれぬ鳥の聲するに、ふと耳そばだて、今のは何にやあるらんなど、かたみにあやしむほどに又二聲三聲鳴きつゞけたるそのねの、こたびはいとさはやかなるに、さは郭公なりけるよと妾の云へば、友の君もさり〳〵とこなたへたまひつ。やがて

訪れて君とかたるもうれしきにおもひもかけぬ初郭公

となんよみ出で給ひぬ。げにかう思ひがけなくも、初音を聞きにしことの、いといたう珍らしう覺えて、わらはも、

なつかしき君に訪はれてもろ共にきくぞ嬉しき時鳥哉

と耻かしき腰折れを、さもほこりげに、口ずさみぬるも、をりからいとをかしかゝる中に早いづくにか去りけん、今一聲もがなと云へども、きこえずなりにしは、いと名殘の惜しまれて。

伊藤 絲 友子

あなめづらしの聲やと、ふと耳かたぶくれば、またみ空にて、いとさやかになのりたるげに郭公なりけり。あやめもわかぬさ月やみなれば、姿はそれと見えねども、其聲のみは、いとしるくもきこえわたりしよ。いまだ此里にては、きゝつとかたる人さへもなきに、思ひがけなく初音を先がけしはげに待ちにまちつけたるこゝりも、はるかにまさりて、うれしともうれしうなん。

大阪 梶 井 富 士子

灯の下に、見ぬ世の人を友とするこそ樂しけれ。と、いひし吉田の法師のあとまなぶにはあらねど、寐られぬまゝに、只一人烈女の傳記をひもとき始めぬ。讀みもてゆくに、はからず、柴田勝家夫人のくだりとなりぬ。さらぬだにあはれ深きに、折しも雨さへそぼふりそへて、いひしらぬ夜のさまとなりにき。

さらぬだにうちぬるほどもなつの夜の
夢路たにそふ山郭公

あゝ山ほとゝぎすいかばかりかなしかりけん。此折は、まさに此頃なりかし。夜のさまもかゝりけん。など思ひ續け、我しらず、はだへ寒く覺ゆる時しも、二聲ばかりさやかになき過ぎぬ。いづかたへぞ、とつま戸明けて見送れば、いと物さびしき夜の色に、雨の音のみ蕭々たり。

三河 本 多 あ き子

ふすかとすれば明くるといひけん。昔の人の言の葉もおもひやられて、短夜の夢路のすゑに、時鳥の聲めづらしく、二聲三聲きこゆれば、其すがたをもみまほしくて、つま戸をあくれば、山の端に殘れる月の影も、いと〳〵あかぬけしきなりや。

おなじくは猶一聲なほとゝぎす
あかつき月にきくよしもがな

東京 太 田 や へ子

さつき半ば、かなたに見ゆる閣の邊の雲か霞かとあやまたれし花も、いつしかちりはてゝ 世はなべて、緑をかしくしなびたる頃とはなりぬ。都のちまたの花橘などかほりなつかしく、又垣根も

たわゝにといふばかり卯花やさきたらむ家居さこそと思ほゆれど、み山の奥まではさる事もなく、只一人起き出でゝは、宵柳のあなたこなたに聲くなめで、ふしては谷水のかすかに音づるゝを聞く外には、何もたのしき事なくてなん。今日も朝まだきよりふりつづきたる雨の一際さうしくしきに、折から郭公のいと近き木ずゑに、あまたゝび鳴いたり。やうしくくれゆくまゝに、今は名残りなく晴れわたりぬれば、今夜は望月なるに、郭公の鳴く音きかまほしく、夜もすがら、いも寝ずはし居して待つけ侍りけるに、有明の月のなかしく、三聲ばかり鳴き渡りき、こよなう面白くなん聞き侍りぬ。誰に見せ誰に聞かせん山里の曉、いつも初音ときゝはやしけん昔も、今も乏しからん都人、さもめづらしからまし。秋里よ。ゆかしきかなり、いみじき花なき山家なれど耳もとにさしあてたらんばかり鳴き過ぎぬる、その折ごと哀れ待つらんあたりにとこそ思へ、うろさしと誰かはかたぶき云はむ。此月此察のほんにうるはしきは、いふも中々になん。

東京　清水鈴子

竹籔の鶯、老い太みたる聲して、朝毎になきわたる。折から五月の空の郭公に、似せばやとおぼしく、心にくう思へれども、またいみじうなかしきに、若楓、柏木などの茂りあひたる窓にゐたり絵ちにまちたる夕ぐれの空に一聲高く名告りたる、うれしともうれし。胸やうしくゐで燈火のかげにかへりたるなり、こたびはかしら高う鳴き過ぐるなきゝける旦は、昨日まで、せめてもの慰みなりける鶯の聲、もはやなかしからずして、み空にのみ心をやり、老いたるふしのいとほしくおもへる。あまりにあからさまなるべきやっ

雜　報

●●●御救恤　岩手縣岩手郡沼宮内町及御堂村大火に付、罹災者救恤として　天皇　皇后兩陛下より、金三百圓を下賜さるべき旨御沙汰あり。また、北海道天鹽國天賣村其他の漁民二百餘名溺死に付、遺族御救恤として、兩陛下より金七百圓を下賜せられたりと承りぬ。天恩優渥といふべし。

●●●地久節　去る三十日は、皇后陛下御誕辰五十三回目の地久節に當りたまへば、各皇族の御息所より祝歌を上つられ、高崎御歌所長も葉山より詠歌を奉りき。　陛下には昨今殊の外御健かに渉らせられ、侍醫のお薦にて所々に行啓あらせられ、少

しも御運動を怠り給はず、國風は、毎年一月歌御會御詠出の外、數萬首を下らずと承りぬれど、世に洩れたるは多からず。さき頃ある宮官へ賜りたる四首の御歌は左のごとしとぞ。

心

むらきもの心にとひて耻さらは
　世の人ことはいかにありとも

愼獨

人しれす思ふこゝろのよしあしも
　てらしわくらむ天地の神

讀書言志

もつ人のこゝろによりて寶とも
　ふみこそ人のたからなりけれ

春月

花見つゝさしおくれたる窓の戸に
　にほふも嬉し春の夜の月

●皇后陛下の御祝歌　去月十五日、東宮妃殿下の御着帯式を行はせたまひたる節、兩陛下より、御いはひの御贈品も多かりしが、わけて　皇后陛下より　妃殿下へ、御よろこびの御しるしとして、殿下のために御歌を詠せさせられて贈りたまひしとか申す。

●東宮殿下　御見學の爲め東北地方御巡回中なる　皇太子殿下には、み氣色ことの外麗はしく、供御はその地の産物を召させられ、時々貧民の常食を御徴發相成るよしにて、朝は必ず新聞を御閲讀のうへ、種々御下問を賜はりて、少しも御暇なき折柄なれど、御出發以來、既にあまたの和歌、漢詩等をものし玉ひたりとぞ。

●東妃殿下御慶事御日取　東宮妃殿下には、引續き頗る御健全に渡らせられ、侍醫の拜診に依れ

ば、御分娩は多分六月二十日以前なるべき由承りぬ。

●有栖川宮殿下の御給畫　東宮殿下に御隨從あそばされし　威仁親王殿下は、松代なる眞田邸に御休憩中、前庭を眺めて、其光景を愛でさせられ、供奉員中より差上げたる扇子を開き、何心なく鉛筆もて之を寫生遊ばされければ、關知事傍にありて、其の御妙筆に感じ、右御拜領の儀願ひ出でたるも　殿下には之を否み給ひ、こは孤のスケッチに過ぎざれば、取らすこと能はず、懇望とあらば別に描寫し置くべしと申されぬ。かくて其地の城山館より川中島古戰場を御瞰望の際、御筆を揮ふて、扇子へ遠近山水を御寫映遊ばされたるを、前日の約なればとて、同知事に下し賜へりとぞ。

●有栖川妃殿下の御下賜金　同殿下には、婦人共立育兒會へ、金三百圓御下賜あらせられしといふ。また、鍋島侯爵夫人は十五圓、外近衛公爵夫人以下、各幹事は各五圓づゝ寄贈せりと。

●皇后宮職御用品　上野五號館に開設中の日本畫會第五回繪畫展覽會中、左記の品々は、此程皇后宮職より、御用品として御買上げ相成たりと。

牡丹小鳥（土居蕉湖）、櫻花（倉石松畝）、山茶花（村上秋鶴）、漁舟夜歸（國本空山）、梅竹小禽（都島雪香）淺山歸樵（稲田梅溪）、水邊秋景山水（山本梅莊）、桑花胡蝶（山内天眞）、初夏（高瀬五畝）、雪中双鴨（荒木十畝）芙蓉（野口小蕙）

●暹羅皇太子來朝期　暹羅國皇太子は、英國オックスホールド大學を卒業あらせられ、近々渡米し、要地巡遊の上、來む八月横濱御着、本邦觀光の御都合なる由。

●婦人共立育兒會　去月十二日、東京神田錦町なる青年會館に於て開會し、貴婦人、淑女の集まりしもの實に多かりしと。例刻となるや、總裁

有栖川宮妃殿下には、田中宮相夫人を從へ、會頭鍋島侯爵夫人の先導にて御臨場あらせられ、一同に御會釋ありて後、左の令旨を賜はりぬ。

我婦人共立育兒會は、年を累ねて、茲に第七回の總會を開くことゝなりぬ。幸に會頭幹事及び會員の盡力により、會務大に進みしことを、畏くも　皇后陛下きこしめし給ひて、昨年そこばくの黄金を下し賜はりしは、本會の幸、之にすぐることあらじ。いましたち、この厚くかたじけなき御意をこゝろとして、ます／＼勵み、會務のいよ／＼眞盛りになりゆかむことを勉めよ。

夫より會頭のあいさつ、金子男の演説了りて後、餘興などありたりといふ。

●慈善音樂會●●●●　岡山孤兒院のため、池田、大山兩侯爵夫人其他の發起にて、去月十七日、上野音樂學校に於て慈善音樂會をもよほせり。其收入を以て、孤兒院を增築し、東京に分舘をたつる計畫ありといふ。當日は内外の音樂家悉く出席し、殊に東宮御所より、金五十圓御下賜金ありたりとぞ。

●女子職業學校●●●●●　近ごろ、女子の服裝やうやく華奢に流れ、甚だしきは振袖を喜ぶ風俗を來せしも、これ等は、自然活潑の動作をさまたぐること多ければとて、東京神田一つ橋なる女子職業學校にては、こたび、生徒登校の際着用する衣服の標準を定め、平素は、木綿、毛織のものとし、たとへ式日なりとも、紬、太織の類に限ることにしたりとぞ。まことに喜ぶべき事なりかし。

●女子中等教育の現況●●●●●　近年女子中等教育は大に進歩發達せりと雖も、其現狀を見れば、男子中等教育に劣ること數等なりといふべし。今其筋に

於ける最近調査を聞くに全國を通じ、官公私立の高等女學校の設備あるもの僅に五十二校、教員數は六百三十九人、生徒數一萬千六百七十八人、年年卒業者は千二三百人内外にして、官公私立中學校生徒數七萬七千九百九十四人に比すれば、中學校男生七人に對し、高等女學校生一人の割合に當れりといへり。

●●●●●在學生徒數　日本女子大學校に於ける在學生徒數、及び府縣別にすれば左のごとしといふ。

（明治卅五年五月十五日現在）

府縣	大學部	英文豫科	高等女學校	合計	府縣	大學部	英文豫科	高等女學校	合計
東京	二〇	六	一〇二	一二八	山形	一八	二	七	二七
京都	八	〇	七	一五	秋田	三	一	五	九
大阪	一一	〇	八	一九	福井	四	〇	一一	一五
神奈川	四	二	一一	一七	石川	三	一	三	七
兵庫	三	二	七	一二	富山	六	〇	六	一二
長崎	四	〇	四	八	鳥取	〇	〇	一	一
新潟	一一	二	六	一九	島根	一	二	〇	三
埼玉	九	〇	一七	二六	岡山	一〇	二	二	一四
群馬	四	二	七	一三	廣島	七	二	五	一四
千葉	八	四	一〇	二二	山口	一一	〇	四	一五
茨城	九	二	一五	二六	和歌山	三	一	一三	一七
栃木	一二	二	一〇	二四	徳島	五	〇	三	八
奈良	三	一	一	五	香川	八	一	〇	九
三重	四	〇	三	七	愛媛	一三	一	五	一九
愛知	八	〇	五	一三	高知	七	〇	四	一一
靜岡	一〇	〇	一三	二三	福岡	九	〇	一三	二二
山梨	一	〇	二	三	大分	四	〇	一	五
滋賀	三	〇	三	六	佐賀	一三	一	二	一六
岐阜	三	一	二	六	熊本	一二	一	五	一八
長野	一	一	一六	一八	宮崎	四	〇	一	五
宮城	一八	〇	九	二七	鹿兒島	三	一	八	一二
福島	一〇	〇	一〇	二〇	北海道	八	一	七	一六
岩手	八	二	七	一七	合計	三六四	四五	三九八	八〇七
青森	一	一	〇	二					

附記　沖繩縣は入學生なし

●●●●●夏季講習會　帝國教育會にては、師範學校中學校高等女學校の教員及該教員志望者其他左の學科研究志望者の爲、本年八月一日より同廿五日まで、夏季講習會を開設するよし。志望者は其講習すべき學科、及び氏名住所職務を記したる書面を以て、來る七月二十五日までに申込むべしとい

ふ。

●女學生の美事　肥後國菊地郡城北村士族佐々政俊の妻、香川子刀自は、其地方の子女を集めて、裁縫筑紫琴を敎授せられけるが、一昨年七十六歳の高齢をたもちて遂にみまかられ、昨年その一周忌にわたりし時、門生西田ます、保利やすゑ、保利まつゑ、德永ひろ、金光にき、田中かず、立野登壽、村上はま、內村つぎを、井手上時江、井手上喜壽、小森田てる、澤田しづを、酒井やつ、佐々ちか、北里しげる、森田ます、森田ふき、森田ゑしの十九名、同心協力して祭典を行ひ、墳墓に石碑、石燈籠、石階をたて、なほその費用の一部をさきて、熊本貧兒寮に寄附せしと。美事といふべし。

●實業家の受賞　多年商工業に從事し、刻苦經營能く其効を奏し、社會に裨益を與へしこと尠からず、衆民の摸範たりといふ廉を以て、左の諸氏に對し、今回賞勳局總裁より、農商務大臣を經て、綠綬褒章を下賜せられたりといふ。

(東京)鹿島萬兵衛▲(大阪)山邊丈夫▲小泉清左衛門▲松下彥兵衛▲井上淺次郎▲小西篠兵衛▲五百井長平▲島田孫市▲淺田長次郎▲春元重助▲駒井庄太郎▲(兵庫)井上貞次郎

●女子と事務員　遞信省其他東京郵便電信局等に於ける女子事務員の狀況および成績をきくに、電報調査所にては、廿六年八月初めて女子を採用せしより、現今五十二名ありて、その事務は賴信紙と着信紙との對照、鐵道、電信に係る交付金調査なり。何れも未婚者にして、年長は廿九歳、年少は十五歳、日給の最高額は參拾五錢、最低額は十七錢なりと。爲替貯金管理所は、五十九名の事務員を採用し、優等者には、以前男子の執りたる計算事務、記簿計算など、やゝ高尚なる事務を分擔せしむ。年長は卅六歳、年少は十四歳にして、

日給は十七錢より參拾錢までなりとぞ。鐵道作業局運輸部には現に三十一名ありて、運輸日報、並に旅客、貨物發着表に關する調査をなし、又、總計の一部を分擔せり。日給は十七錢より廿七錢までなりといふ。東京郵便電信局にては、卅三年十月第一回を募集し、現に卅一名あり。監理課に屬する爲替貯金の調査に廿一人、規畫係遞送記調査に四人、窓口事務に六人を配置せり。この窓口事務は、爲替貯金の受拂、書留、小包、價格表記等の引受事務なれば、公衆に接するに最も親切ならざるべからずといふ。右の內、結婚者既に廿六人ありて、日給の最高額は三十錢、最低額は十八錢なる由。以上の中、成績の尤も善良なるは、管理所に於ける記簿及び計算事務を執掌するものなれども、なべて良結果あるがうへに、今後ます〳〵繁忙を來すべければ、機を見て女子の事務員を增加すべしとぞ。

●●●●●

●堀切の花菖蒲　きのふけふは、藤のゆかしき花もすぎ、菖蒲の時となりぬれば、郊外の新綠をめづるもの益々多かるべし。卷頭にかゝげたる、堀切に杖をひかむとするには、まづ吾妻橋より千住通ひの汽船にのりて、鐘が淵に上るか。あるひは、東武鐵道の吾妻橋、引船又は白髭等、おの〳〵便利なるステーションよりのりて、堀切ステーションに下車すれば、僅か六町にして菖蒲園にいたるべし。かくて堀切には武藏屋小高園あり。武藏屋は、園內一面の菖蒲洲にして、紫白まじりて、なか〳〵見ばえあり。所々に茶亭の設け、また八ツ橋をも數多かけ渡し、十分に手は盡しあるも、惜いかな、遠望を缺くを以て、もの足らぬ心地せり。小高園は、小丘に茶亭の設けありて、東北に

わたる葛飾の沃野を見はらす眺めおもしろく、園內には八ッ橋の設けあり。兩國とも、田舍流義とはいへ、支度も差支へなく、かへりて、俗塵のうちに住まふ媛達などのものしたまはむには、さぞや仙境に遊ぶの思ひあらむ。

●本年の養蠶に就て

本年の養蠶は氣候の不順によりて、昨年よりも餘程の減作ならんとは、一般に豫想する處なるが、或る筋より聞くに、成程晩霜の爲めに、地方により多少桑葉の被害を免かれざるべきも、多くは桑葉の價格を



昂騰せしめんとの商略上、故らに誇大の報告を傳へたるに過ぎずして、實際は大したることなく、殊に各地とも蠶兒掃立の增加したると、技術進步の著しきとの爲め、今後氣候の劇變なきに於ては、格別の減作はなかるべしと。

●外報

●良人の擇み方　英國の婦人は、風采堂々として氣高き性質の男子を求め、佛國の婦人は、額の美麗にして愛嬌ある顏立の男子に配せんことを望み、墺國の婦人は、取分けて正直律義の

男子を求め、和蘭の婦人は、柔和にして決闘などを好まざる男子を擇み、西班牙の婦人は、妻の言分を斥け、其無作法のとがある場合には、つれなく當るなどは、良人たるものゝ常なりとて却て此事なき男子を嫌ふの風あり。伊太利婦人は詩人風の思想ある男子を求め、露國婦人は、他の歐洲諸國なれば、野蠻人として拒絶せらるゝ如き性質の男子を愛し、丁抹の婦人は、常に國にあつて外國旅行を爲さゞる男子を好み、米國の婦人は其地位の高下に拘はらず、資産富裕なる男子に配せんことを望むよし。我國婦人は、いかなる男子を擇み給ふにや。

●富女と結婚する國民　英國にては、金持の女と結婚する男を、男子の威嚴を損するものなりとして擯斥するも、獨逸及び佛蘭西にては、却て此男の處世の術に巧みなるを賞す。左れば、此等諸國の男子中には、只金持の婦人を捕ふる事のみを業とするもの多く、富裕なる女子と見れば紹介をも待たず、如何なる場所にても話を交へて、五月蠅く附纏ふを常とするより、同國に旅行する他國の女子は、迷惑一方ならずとは、いまいましき事也。

●露國に女囚多し　露國昨年度の統計に據れば、同國に於ける女子犯罪者の數は、男子犯罪者の數より五割方多く、かくて女子犯罪者の多數は未婚女子にして、且つ勞働者なりと云ふ。女子犯罪者の多きは、世界の諸國中露國にすぐるものなしと。

●新刊略評

◎余の家庭観（佛人リギヨル氏著）

曩きに『理想の家庭』を著はして、學者社會の喝采を博したる佛國人リギヨル氏は、復た『余の家庭觀』なる一書を公にして、家庭の原理、變遷、婚姻制度、女權論、婚姻の性質及び其目的等を詳述したり。其の説西洋に偏せざると共に、東洋の美

風を捨てず。善く中庸の觀察を得たるところ、確に一讀の價値あり。著者もと孤獨主義を守りて、鰥居索寞の生涯を樂しむ人、而して猶はホームの理想に富む斯の如きは驚ろくべし。然れども凡ての場合に於て、局外の觀察なるものが、公平正明の眼光々失はざるものとせば、家庭なき學者の家庭觀が眞のホームの原理、快樂、趣味を說き盡して、一般家庭生活の上に、大なる裨益を與ふるも亦た怪しむに足らざるべし。(定價廿錢本鄕湯島一ノ十三昌平館發行)

◎ルーソー及其文學(前田長太氏著)

初めにはルーソーの經歷を記し、後には其の絕代の著述として、今尙ほ世に持て囃やさるゝエミール及び、民約論等に批評を加へたる面白き小冊子なり。著者が、ルーソーと絕對的反對主義を懷抱せるに拘はらず、力めて其の鋒鋩を包み、禮讓を重んじて、公平に批評を試みんとしたる痕跡は、議論文章の上に顯然たるを認む。其の苦心や察すべしと雖も、之が爲め往々心なき讀者をして、一是一非の間に迷はしむる憂なきか。甚だしきは、却て或點に於て同情をルーソーに寄せしむるの傾きなきを得るか。予輩は氏が博識と明犀なる頭腦とを以て、他日更にルーソーの性行、議論、文學等を詳論して、世に公けにせんことを期待せざるを得ず。但し、其の結論に於て、吾邦の人々は、半世不遇、轗軻淪落、飽く迄も當路者に反叫するを見て感激するの癖あり、此點よりルーソーを觀察せば、同情を寄すべき所多からん。然れども是れ固より人物論の定規とすべきものにあらずといひたるは、善く時弊に適中したる至言なり(定價金八錢本鄕湯島一ノ一三昌平館發行)

口繪について

●山脇房子刀自　刀自は、慶應三年六月島根縣松江市に生る。同藩士小倉忠氏の女にして、行政裁判所評定官山脇玄氏の令夫人なり。としの頃大日本婦人教育會の爲に大に力を盡し、又愛國婦人會に評議員として、內外の事に當り、其他關係するところ少からず、刀自夙に我國婦人集會の用に供すべき一大會館なきと、女學生に完全なる寄宿舍なきを憂ひ、自ら率先してその經營に任じ、苦心焦慮、遂に三萬圓の建築費と、適當なる敷地とを得て、やがて工事を創めむとす。傍ら衣服改良の事に熱心し、同志と共に日夜考究しつゝありといふ。當代女界の獻身的事業に從ふ者、濱尾夫人あり。刀自と並稱して、明治の双璧といふも、また決して過褒にあらざるべし。



●佐方鎭子刀自　鳥取藩士故佐方易淸の女なり。安政五年三月東京八代崎河岸の藩邸に生る。幕末の多事なるに及びて、父母と共に鳥取に轉住

し、家庭にありて裁縫讀書等の教へを受くること數年。明治八年再び東京に移住せり。偶東京女子師範學校の設立せらるゝあり。募集に應じて試驗を受け、同年九月入學を許さる。明治十二年三月卒業の後、直に同校に奉職し、ついで十六年七月より十七年七月に至る一個年間、群馬縣立高等女學校の教諭となり、再び女子高等師範學校に轉じ、以て今日に至れり。現時同校教授として、倫理及び國語を教授し、傍著述をなし又婦人會の役員たる事多しとぞ。

●●●●●●

●興風女學校生徒　興風女學校は神田駿河臺袋町にありて、校長は山田倉太郎氏なり。善良なる校風を有し、明治十二年以來、幾多の賢母良妻を出せり、蓋し我國の婦道を發揮するを主とし、禮義作法に重きを置き、節儉を旨とすると共に之を實行して、文質彬々たるの感あり。卷首に掲げたる寫眞は、前列中央に位せる二孃が、本年卒業して歸國せられむとするに際し、その送別の紀念として、來會せる職員及び生徒の撮影したるものにて容儀端正なるは其校風をあらはしたるものといふべし。

●●●●●

●三澤初子の墓　仙臺市八ッ塚孝勝寺中松杉色緑りに櫻樹花紅なる處に兩基の石碑あり。一は仙臺藩第二世伊達忠宗の室池田氏振姫の墓にして其一は第三世綱宗の室三澤氏初子の墓なり、此初子こそ伽羅千代萩の演劇にて幾多の觀客をして其忠烈に泣かしむる局政岡の實際なりとは傳へらる。初子の父は三澤清長と云ひ徳川氏旗下の士にて剛直の人なり、其女初子は幕府の後宮に仕へしが將軍秀忠　池田輝政の女振姫を養ふて之を忠宗に配はすに及び初子振姫に從ひ來る。人となり伶悧にして標致も亦拔群なりしかば忠宗の目に止まり、其頃忠宗は部屋住にて未だ夫人も定らざりし

故其側室にせんとて之を其父に謀りしに、清長肯んせずして我家今こそは旗下の士なれど清和源氏の嫡流にて其門地を論ずれば伊達家に劣る所あらず、正妻ならでは命に應じ難しとて之を拒みぬ。十二萬石の大諸侯と、三千石の旗下とは所謂提灯に釣鐘、如何にも不釣合の縁談なりしも、忠宗深く初子の器量と清長の意氣を愛せられ、遂に綱宗をして初子と正式の婚儀を爲さしめたり。果して忠宗の鑑識誤らずして琴瑟能く和諧し、幾程もなく一子を擧げ龜千代と名く、後に陸奥守綱村と稱す、演劇に所謂鶴喜代君是れなり。綱村は伊達家の歴代中稀れなる明君にて、一代の美事佳話頗る多し、二歳にして國を受け叔父伊達宗輔奉行原田甲斐守簒奪の奸謀ありし爲め種々の危難に遭遇せられしが、伊達安藝片倉小十郎等の忠義により父祖の遺業を全うすることを得たり。此際其母なる初子の苦心焦慮は如何許りなりけむ、されば狂言作者は其衷情を推測して政岡なる一忠烈の女丈夫を書き顯はしたるなるべし。初子の行實は多く世に傳はらずして其詳細を知るに由なけれど、其父清長及び其子綱村の人と爲りを見て其賢母良妻たりしことを推測することを得べし。綱村其罔極の恩に報いんことを思ひ、其母が生前渴仰せる釋迦佛の像を城東躑躅ケ岡に安置して其冥福を祈り、且つ其附近に櫻樹數百株を植ゑ衆庶の遊觀を縱にせしむ、今日東北地方櫻花の第一勝地と稱せられ、春每に士女雲の如く集まり、釋迦堂を拜し初子の墓に詣で、寛文騷動の當時を追想して感嘆措く所を知らざる者多しと云ふ、本號口繪は初子の墓を寫眞せしものなり。

次號豫告

口繪

瓜生女子高等師範學校教授の肖像其他の教育家及び高等女學校目あたらしき風景等を掲ぐべし

論説

三輪田女學校長兼女子大學講師三輪田眞佐子刀自繁忙のため、久しく本紙上に筆を執られざりしが、今回有益多趣味なる論説を寄せらる。其議論文章のいかなるかは、既に諸媛の知り給ふ處、茲に贅言を要せざるべし。また伊東々京府第一高等女學校長の「子女監督の必要」と題する論説をかゝぐ。滔々數萬言、而も言文一致なれば容易に了解することを得べし。

漫録

福地理學士の「新島婦人の話」は、興味津々、恰も髣髴として目前に見るが如し。

其他藤澤文學士の少音樂隊愈佳境に進み、下田義天類大人の説話益眞境に入らむとす。此外博士學士諸大家の學藝樂園等材料豐富なり。

新刊寄書

女藝	三號	東京	新進社
兒童研究	五ノ三	同	教育研究所
少年世界	八ノ六、七	同	博文館
婦人と子供	五號	同	フレーベル會
刀劍會誌	十九、二十	同	刀劍會本部
令德	四ノ四五	同	令德會本部
婦人世界	十二號	大阪	浪華婦人會
裏錦	百十四號	東京	尚絅社
兵事雜誌	七ノ二	同	兵事雜誌社
高知教育雜誌	百十八號	高知	同縣教育會
體育		東京	日本體育會
紀伊教育	百九、百十號	和歌山	和歌山印刷株式會社
六合雜誌	二百五十六、二百五十七號	東京	日本弘道會
慶應義塾學報	五十一、五十二	東京	慶應義塾
上越教育雜誌	三、四號	新潟	同會
京都府教育雜誌	百十九、廿、廿一號	京都	村上勘兵衛
教育時論	六百十號	東京	開發社
新東京	一號	同	壬寅社
愛國	八十三、四號	岐阜	愛國社
白虹	增刊二卷四號五號	東京	同社

社告

女鑑歌文月次兼題

六月廿日　六月九日〆切
歌　閑居水鶏
文　不幸の人を慰むる文

七月五日　六月廿四日〆切
歌　夕立
文　人の新盆を弔ふ文

七月廿日　七月九日〆切
歌　夏旅
文　夏の朝

懸賞

天には三册（一月半分）　地には二册（一月分）　人には一册を贈呈す

女鑑月次兼題歌文投稿書式

歌書式

用紙は半紙半截の事。題毎に用紙を別にし、一題には一人一首若しくは二首を限りとす。上の句の中に二音の漢字を一字入れ、其の他は悉く假名、若しくは一音の漢字にて認むべし。

題　住所　姓名
…………………
…………………
…………………

文書式

用紙は半紙二つ折の事。字體は鮮明に記し、且句讀點を施すべし。

題　住所　姓名
……、……、……。
……。……、……。
……、……、……。
……、……、……。

○總て文字は分り易き樣、漢字は楷書、假名は普通の平假名にて個々に離して認むべし。
○總て書式に違ひたるは沒書とす。
○女子は、なに人にても、隨意に投稿するを得。
○兼題を天地人の三才に分つ

わきが（腋臭症）

根治確證 新發見藥

從來醫療賣藥其他百方手を盡し到底不治の難症と斷念せる腋臭患者は速に當館新發見の根治藥を施し「生きながら地獄」の苦惱を永遠に脫せよ、いか程重き慢性わきがにても本劑を用ゆれば誓つて**根治**すること確證す殊に本劑にて一旦全治せば決して再發或は他病に變ずる患ひ無く生涯再び用藥を要せず是れ他にありふれたる賣藥と異なる處の本劑一種特有の神效なり患者よ速に此根治的新藥を一試して世人の嫌忌する病根を斷絕せよ實に不思議の新發見奇劑なり▲根治的謝狀山の如し來り見よ示す▲（藥價）輕症根治分藥價送料共六拾錢◎重症根治分同上壹圓廿錢◎頑固慢性症根治分同上貳圓卅錢◎爲替は神田局あて取組の事◎切手代用は必ず二割ましの事◎着金即刻送藥す▲（注意）本劑の大效を羨み近時續々怪しき無效の類似僞藥顯はる用藥者は深く注意ありて「日新館藥房製劑」の名義に着目して購求あらんことを乞ふ

專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**（電話本局二五四六番）

稟告

女鑑發賣に關する事務は爾後國光社出版部に於て取扱候間自今代金御送付、御照會、及廣告に關する事件一切の事務は左記宛にて御申越被下度候也

追伸

爾來各所より新刊新聞雜誌及圖書等御寄贈は甚だ御手數ながら必ず**國光社出版部**へ宛て御寄贈被下度此段謹告候也

明治三十五年六月

東京市京橋區築地二丁目廿一番地

株式會社 **國光社出版部**

（電話特新橋八八番 電話新橋二六九三番）

新刊豫告

倉庫銀行頭取 中村清藏序　中村佐平著

新式 銀行簿記學

洋装美本 全一冊

銀行簿記の必要なるは今更贅言を要せず、然れども、從來其良書に乏しく、常に以て憾となす。本書はこれ等と全く撰を異にし、まづ、東都大小の銀行に就いて實地調査を施し、之を参酌折衷して實地應用する方法を叙述して遺す事なし。而も專門大家の校閲を經たるものなれば完全無缺なるや必せり。されば、簡易商業學校其他の教科書として適當なるのみならず、學校に入らずして直に銀行業に從事せんと欲する者の、須臾もはなすべからざる最好良書也。

須田毎六君新著

銀行利用法

洋装美本 全一冊

銀行は資金の泉源にして之れと取引するの必要あるは何人も均しく認むる所なれば實業者にして銀行と取引せざるものなしと雖も能く之れを利用するものに至りては寥々乎として晨星の憾なき能はず著者茲に感ずる所あり多年の實驗と私見とに依りて銀行を利用すべき方法を極めて簡明平易に記述したるものなれば實業家は勿論何人も必らず一本を座右に備へざるべからざる近代の珍書なり

新刊廣告

陸軍大臣 寺内正毅君題辭
帝室制度調査局主事 關謙之君序
紫洲 甲秀輔編

徳川の孔明

袖珍美本全一冊
定價郵税共
金拾五錢

本書は徳川の孔明とあだ名されたる徳川東照公帷幄の謀臣本多佐渡守正信の經國意見を編纂せしものなり、本多正信と云へば世人多くは權詐狡猾の奸物なるが如く速了すれども是實に皮相の見にて其云ふ所眞摯篤實最も今日に適切なることは文武兼備の稱ある現寺内陸軍大臣が其題辭を書されたるにても知らるべし大方諸君請ふ一讀して徳川氏三百年泰平の基を開きし謀臣の識見の如何なるものなるかを驗し玉へ

東京々橋區築地二丁目廿一番地

發行所 株式會社國光社出版部

伯爵東久世通禧君題字
高等教育會議々員湯本武比古君序文
東京感化院長高瀬眞卿君講述

家庭學校 修身一夕話 全

洋裝全一册四百頁
總クロース美本
表紙金文字入
正價金六拾錢
郵税金八錢

本書の叙述す處は修身倫理の大綱、東西古今の偉人碩儒の事蹟にして滔々數萬言、行文平易、趣味饒多、近來稀有の一大珍書、今や盛裝して世に出づ。身教職にある者は勿論、苟も子女教育に留意せらるる諸氏、幸に愛讀を賜はんことを。

日露の英雄

山崎忠和君著

洋裝四六版
全一册
定價金廿錢

露國の彼得大帝と我朝の德川齊昭島津齊彬とは其識見事業の世界的なる處同一なり其帝たり侯たり事功の成否の如きは別問題とすべし今此の三大英雄の性行經歷に就て細かに觀察すれば識慮の遠深なる意氣の雄偉なる機略の豁大なる未だ嘗て其の間に甚しき軒輊あるを見ず但其成功と否とは境遇に順逆ありしのみ之を以て三大英雄を輕重する如きは眞に皮相の見なりと言ふもの是れ本書の著者が立論の骨子なり著者燃犀の史眼を以て東西數百卷の史傳を看破し以て此の書を爲す三大英雄の音容動作眼前に現れ出でて宛も活動寫眞を見るが如し大方有爲の諸君一讀して萬古の心胸を開拓し一世の智勇を推倒するの志氣を養成せられんことを望む

白耳義リーヂ大學教授ラヴレー氏原著
文學士寺内淳二郎君譯

奢侈亡國論

洋裝全一册
定價金二十錢

現今の世、人心靡然として奢侈に流れ、競ふて外觀の華を衒ひ、皮相の美を粧ひ、豪奢淫佚自ら得たりと爲すもの滔々世を擧げて、比々みな是なり、彼の歐米交際社會といふ者の如き綾羅の錦衣に非ざれば、乃ち共に臂を交へざる也。粱肉の美味に非ざれば、乃ち共に卓を圍まざる也。是を以て一夕の燕遊に數千萬金を費消して、傲奢誇耀唯だ其額の少なからんことを是れ恐る、而て曰く是れ文明也、進步也と、噫斯の如くにして已まずんば、遂に羅馬衰亡史中の事實を再演せずんば幸のみ、著者白國リーヂ大學教授ラヴレー氏茲見るあり、奢侈の定義、動念、不正を論じ、其の道德及び進步の原因に非ざるを說破して、一代の頽瀾を將倒に挽回せんと試みたり、本書は即ち是れ也、議論元と經濟上より觀察を下せりと雖も、而も一般經濟書の無味乾燥、砂を嚼み、臘を舐ぶるが如きに類せず、其の現代社會の華侈驕奢を冷評罵倒するや、骨を刺し、腸を抉り、世の流行紳士をして狐奔鼠竄殆ど顏色なからしむ、譯者亦流麗の筆を以て親切鄭寧に原文を譯出したれば、繙讀の間趣味津々自ら禁ずべからざるのあり、吾國民由來勤儉の美風に富む、幸ひに本書を熟讀せば、奢侈の甚だ恐るべく、勤儉の益々尙ぶべきを知りて、謂ゆる文質彬々の美果を占むるを得ん、乞ふ購讀の榮を賜へ

發行所 東京京橋區築地二丁目 國光社出版部

大林弘一郎著

中等國文學史

全一冊 洋裝美本 定價金六十錢 郵税金八錢

從來國文學史の教科書として出版せらるゝものを見るに多くは評論の高尙に過ぎて授業者には其要を知るに難からしむるものあり又或は引例の歌文も奇古にして解し難きものあり或は其の材料の非常に頗多にして文部省規定の時間内に教授し了ること能はざるものあり此等の事項は教科書としては其の教授上に少からざる不便と困難とを感ずる所にして實際之が任に當る各學校教員諸氏の均しく遺憾とせらるゝ所なり本書は著者が多年の研究より得たる考案を本とし之を實地の教授に徵し時間の旣當材料の難易多少等には充分の調査を加へ且記述の體裁に至りては最簡明を主とし議論の高尙に失せざらんことを務め語調の流暢にして誦讀に便ならんことを謀りたるものなれば中等諸學校に於ての教科書として適當なるは固より言を待たず、

山崎忠和著(彩色精版口繪並に挿畫入)

文久物語

洋裝全壹冊 定價金廿八錢 郵税金六錢

寺田屋騷動の名は維新史中の悲劇として世人之を知るも其眞事實に至つては今猶秘密の間に伏在せり此書當年の事蹟を記すること極めて精確にして隱微を發き秘密を明にし彼の奇傑田中河内が同志淸川八郎と僞錦旗の下に天下の大諸侯を飜弄したる機變百出の壯圖を始とし其間島津久光西郷隆盛眞木和泉平野二郎等諸豪傑の活躍するあり正に是れ維新史中の花として絶悽壯絶を極むるの狀髣髴として目睹するが如し

發行所 東京築地二丁目二十一番地 株式會社國光社出版部

小松宮彰仁親王殿下題辭　内務大臣内海男爵題辭
前内務大臣樺山伯爵題辭
賞勳局總裁大給子爵題辭　内務大臣官房編纂

明治國民龜鑑

定價金貳圓豫約價壹圓參拾錢期限後は定價に復す

豫約出版廣告

本書は明治十四年發布の褒章條例により紅綬綠綬藍綬の褒章を賜はり其善行を表彰せられたる者の傳記にて之が編纂の任に當れるは我文學界に名聲高き文學士大町桂月君ゆゑ字句流麗文章平易毫も艱澁難解のことなく敍寫傳神の妙を極めたれば、孝子順孫、節婦義僕を始め、一身の利害を顧みず專ら力を公同の事業に致し、若くは實業の發達を圖れる有志家、及び萬死を冒して人の生命を救助せる義侠者等の面目鬚眉躍如として紙上に現れ、其志氣節操、義烈の行爲を眼前に見るの思あらしむ、實に國民必讀の要書なり、本社今回原本の御下附を請ひ得て精巧の活版に附し總傍假名を附として婦女童幼にも讀易からしめんことを勉め、極めて廉價を以て豫約販賣することゝせり、大方の諸君速に御申込あらん事を乞ふ。（見本は各官衙町村役場學校等にあり）

注意

●受賞者肖像寫眞銅版及受賞者行狀密書木板數拾枚挿入●菊判五號活字總振假名大和綴●紙數凡九百頁●申込の際豫約價の半額を拂込むものとす●諸官廳郡市役所町村役場諸學校等公印押捺申込の分及褒賞佩用者は豫約前金に及はず●申込期限は五月三十一日迄●出來期日六月三十日●同日迄に豫約代金全額を拂込みたるものより順次發送す

豫約申込所　東京京橋區築地二丁目廿一番地　電話新橋特八八　新橋二六九三　合資會社　國光社出版部

●●●近刊豫告●●●

現今諸名家撰述　國光社出版部編纂

新編ひめかゞみ　全

女子必讀

近世女子教育の年に月に盛んなるに随ひ、學は和漢洋を兼ね、才は天地人に通ずとも許すべき閨媛の彬々として世に現はるゝは誠に喜ぶべき事ながら、専ら智育を宗として重きを徳育に置かざる餘弊にや、さはかりの才媛にても其操行如何と顧る時は案外眼に一丁字なき鄙の賤の女にも及ばぬ者多く、其甚しきに至りてはふりがな新聞の三面に、父母良人の名迄汚す者さへ少なからず、斯くては古今東西の書を讀み盡せしとて何かせむ、誠に嘆はしき限りなり、本社茲に慨する事久し、仍て當今諸名家の文章中より近世列女の傳記を抄出し、之を賢良、忠義、孝行、節操、才學の五綱に分ちて編纂刊行することゝなせり、抑方今文明日進の際時勢に伴ふて女子の本分を盡さんと欲せば、操行學藝兩全ならざるべからず　學藝は花にして操行は實なり、花あり實ありてこそ始めて完全の女子と謂ふことを得べし、世上の才媛淑女諸君本書を熟讀玩味して花實を一身に兼ね備へ玉はんことを祈る、傳文撰述の作家中重なる人々の姓名を左に錄す

柳川重次郎　大町桂月　三輪田眞佐子　鹽井雨江　久米幹文　山川清家　井上賴文　鹽井ふく子

青山延壽　安藤紫光　栗田寛　山本正周　桑野鋭文　大槻文彦　濱田康　指原乙子　以下數十家

發行所　東京市京橋區築地二丁目　國光社出版部

第十一版出來廣告

細川十洲翁序
三輪田眞佐子著

第拾一版

女子の本分

金銀摺彩色表紙大和綴優美
定價金二十五錢
郵稅金六錢
郵劵代用一割增

曩に三輪田女史我邦女子道德の頹敗に赴き日に甚しきを慨し本邦固有の道德に基きて此書を著し以て我邦の婦女子に其本分のある處を示さん事を期せらる本社の一たび之を世に公にするや忽にして再版三版を賣盡し九版十版猶需用を充たすに足らず以て女子教育の爲聊貢獻する處ありしを喜ぶ今や時廿世紀に入り國運日に進み益女德を涵養し貞淑賢良の婦女を養成し雄大忠誠なる國民の慈母たらしめん事を望むや切也、本社またその訂正を請ひて十一版を發行し、附するに女史の肖像、詠歌傳記を以てす。其完全なるは敢てこゝに云はず たゞ諸婦人達の一讀して價値を知り給はむ事を。

東京築地二丁目廿一番地
發行所 國光社出版部

女鑑

明治三十五年六月五日發行

毎月二回五日廿日發行
第貳百五拾四號

明治廿五年三月十二日
第三種郵便物認可